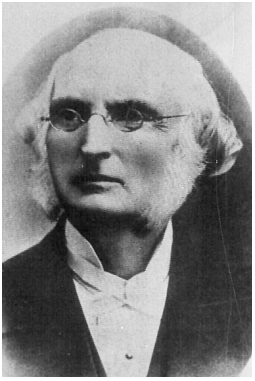
アメルマン　Amerman, James Lansing

フルベッキ　Verbeck, Guido Herman Fridolin



ブラウン　Brown, Samuel Robbins

ヘボン　Hepburn, James Curtis

バラ　Ballagh, James Hamilton

明治学院歴史資料館資料集

第6集

『アメルマン・フルベッキ・ブラウン・ヘボン・J.H.バラ史料集』

明治学院歴史資料館

まえがき

明治学院歴史資料館　館長　辻　泰一郎

明治学院歴史資料館資料集第６集をお届けします。今回は、明治学院の創設に深く関係のある宣教師たちの記録及び小伝を、翻訳と原文とで紹介することにしました。史料の説明については「あとがき」で訳者が述べるはずですので、詳細はそちらに譲りますが、初期来日宣教師研究のために必要不可欠な史料を今回初めて全訳したことの意義は大きいと思われます。

今年 2009 年は 1859 年にヘボン、ブラウン、フルベッキが来日し宣教活動を開始してから 150 周年の記念すべき年にあたります。このような年に辻直人氏の翻訳による宣教師史料が出版できますことは、時宜を得たものと言えましょう。

現在、明治学院では 2013 年の開学 150 周年の節目に向けて、『明治学院百五十年史』（仮称）の編纂作業を進めています。これまでの明治学院は年史を五十年史、八十年史、九十年史、百年史と編纂してまいりましたが、これらはいずれも 1877 年の東京一致神学校の開校を起源としていました。しかし、井深梶之助が言うように、明治学院の源流は 1863 年のヘボン塾まで遡ると考えて、『明治学院百五十年史』を編纂しています。今回の資料集でご紹介します初期来日宣教師であるヘボン、ブラウン、フルベッキ、J.H. バラたちは開国間もない日本で様々な苦労をしながら、日本人という隣人のために尽してきた、いわば近代日本の恩人のような人たちです。この前者 3 人の小伝は、ちょうど百年前の 1909 年に開かれた宣教師協議会で後輩宣教師たちが回想したもの、J.H. バラの「回想」は自分自身の半生を振り返ったものです。是非ご一読くださり、当時の宣教師たちの人生に思いを馳せていただければ幸いです。

また、本資料集には改革教会宣教師アメルマンによる幕末から明治初

期にかけての宣教報告も掲載しました。併せてお読みいただき、当時の様子を知る手がかりにしていただければと思います。

今回の史料翻訳は、歴史資料館研究員の辻直人氏に担当していただきました。辻氏は 2001 年度より当歴史資料館の研究調査員を務められ、2006 年には東京大学の教育学博士号を取得されました。2008 年 4 月からは石川県金沢市にある北陸学院大学短期大学部准教授として金沢へ移られましたが、引き続き研究員という形で明治学院歴史資料館の活動に関わっていただいております。また『明治学院百五十年史』編集委員や『キリスト教学校教育同盟百年史』の編纂委員も務めておられます。辻直人氏が教育や研究・編集委員等、ご多忙の中宣教師関係史料の翻訳を続けられたご労苦に対し深く感謝いたします。

また、本資料集の刊行は、いつもながら、歴史資料館の職員の方々による事務的作業の助力なくしては実現出来なかったと思います。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

関係各位におかれましては今後とも歴史資料館の活動をご理解いただき、資料提供などの点でご協力いただければ幸甚です。

目　次

『アメルマン・フルベッキ・ブラウン・ヘボン・J.H. バラ史料集』

まえがき
凡例
日本宣教の概観　J.L. アメルマン著（辻直人訳）……1
凡例
宣教師小伝（辻直人訳）
　ギドー・F・フルベッキ伝　M. N. ワイコフ著 ……25
　S.R. ブラウン伝　T.C. ウイン著……41
　J.C. ヘボン伝　D. タムソン著……54
　回想　ジェームス・H・バラ著……61
あとがき　辻直人……74

【附録】
凡例
Sketch of the Japan Mission byJ.L.Amerman（復刻）……83
Biographical Sketches（復刻）……105
　Ⅰ. Guido F.Verbeck, by M.N.Wyckoff ……106
　Ⅱ. S.R.Brown, by T.C.Winn ……124
　Ⅲ. J.C.Hepburn, by David Thompson ……139
　Ⅳ. Reminiscences by J.H.Ballagh ……147
明治学院歴史資料館資料集第１集―第５集内容目録 ……160

日本宣教の概観

J.L. アメルマン著

（辻直人訳）

凡例

1．本翻訳の底本は *Biographical Sketches*（明治学院大学図書館所蔵）である。

2．訳注は各小伝の本文末に付し、原注は脚注とした。

3．本文中の聖書引用は、原則として新共同訳を用いた。ただし、文脈に応じて訳を変更した箇所もある。

4．聖書引用箇所が原文中に記されている場合はそのまま翻訳文中に挿入したが、原文に箇所の記載がなく訳者が独自に調べた場合は、全て訳注として本文末に記載した。

5．China については、時期的に考えれば正確には「清」と訳すべきところだが、訳としては今回は「中国」に統一した。また、Chinese についても同様に「中国語」と訳した。

6．原文になく翻訳上補足した箇所については [　] で記した。原文で著者が挿入した括弧書きは（　）とした。

日本宣教の概観

J.L. アメルマン著
辻　直人訳

米国改革教会の日本宣教

外国人が日本で居住する権利は、1858 年の条約によって保障されました。即座に 3 つのアメリカ教会によって、この国に宣教の拠点を置く措置が取られ、1859 年末にこれらの教会から宣教師が到着しました。改革教会宣教師からは、ギドー・F・フルベッキ博士が長崎に、サミュエル・R・ブラウン博士と D.B. シモンズ博士は神奈川（横浜）に居住しました。シモンズ博士は翌年ミッションから撤退しましたが、ジェームス・H・バラ博士が 1861 年より神奈川に住むようになりました。

初期の出来事

開国間もない日本では、キリスト教を教える機会はほとんどありませんでした。人々は外国人に警戒心を持っていましたし、［宗教上の］説教は許されていませんでした。キリスト教は嫌われ、幕府の布告により人々はそれを受け入れることを禁じられていました。従わなかった臣民には、残忍な懲罰が課されました。このような状況に加えて、［宣教師たちの］日本語の能力もなく日本的思考に対しても無理解な状態は、宣教活動を妨げる大きな障壁となりました。よって、初期の数年間は、日本語を習得し、また政府及び民衆から、宗教と宣教師たちの活動に対して信頼を勝ち得ることが主たる目的でした。最初の数年間には、後の時代には余り知られていない危険や困難も多々あって、この時期の宣教師たちの経験は非常に苦しみの多いものでした。しかし、主は彼らの助け

手となられ、試みから脱出させただけでなく、彼ら及び本土の教会に、この主のブドウ園には将来の可能性が間違なくあることを示してくださいました。早い段階から、個別に訪ねて来て宣教師の家で聖書の学びを受ける者もいました。宣教師への信頼が徐々に高まって、厳格だった幕府の布告の運用が緩んだ頃に、人々が集まって聖書を学ぶ小さなクラスができました。最初の洗礼は 1864 年に行われ[1]、1866 年には 2 人が受洗しました。1883 年に大阪での宣教師会議で「日本プロテスタント伝道史」について講演したフルベッキ博士は、この時代のことを「準備と見込みの時期」あるいは「学びと種蒔きの時期が終わりに近付いて収穫の喜びを待つだけとなった時期」と呼んでいます。

聖書翻訳

他の初期来日宣教師と同様、改革教会宣教師たちは聖書翻訳への何らかの挑戦を試みましたが、この初期作業の成果は全く公に刊行されませんでした。当時はキリスト教に関する文書の出版や翻訳作業を手伝ってくれる日本人を見つけるのが困難でした。幕府のキリスト教への態度が厳しかったため、人々は自らの自由や命でさえも危険を覚悟の上で、そのような作業を引き受けなければならなかったからです。

1865 ～ 66 年にブラウン博士は新約聖書のいくつかの箇所の翻訳にとりかかっていましたが、全ての原稿[2] が 1867 年に起きた自宅火災のために焼失してしまいました。1867 年、バラ氏は幾人かと「マタイによる福音書」の最初の草稿作成にとりかかりました。この翻訳は改訂された後 1873 年に刊行されました。その間、ブラウン博士は 1872 年に出版されたマルコ伝及びヨハネ伝の改訳を手伝っています。これ以降、聖書やその他キリスト教書籍の出版を行うにあたっては大きな困難もなくなりました。キリスト教禁教に関する高札も撤去されました。政府は禁教令を取りやめたわけではなかったのですが、キリスト教の拡大や出版に関しては結局黙認していました。

聖書翻訳の組織的取り組みは1872年の宣教師会議[3]における決議によって始められ、翻訳委員会はまず新約聖書の翻訳にとりかかることとしました。ブラウン博士は丸5年の間、ほとんど全精力をこの翻訳委員会の事業につぎこみました。ところがあと少しで完成という時に健康を害して作業を中断しアメリカへ帰郷、1880年に現地で召天しました。1869年にはフルベッキ博士が長崎を離れて日本政府で働くことになりました。1879年には再び宣教活動に加わり、1878年の宣教師会議で決まった旧約聖書翻訳委員会の活動や、その後の聖書全体の改訳事業に大きな力を注ぎました。聖書全体の翻訳の完成が祝われたのは1888年2月のことでした。

最初のキリスト教会

最初のキリスト教会が組織される道筋は、宣教師たちの長きに渡る信仰に満ちた働きによって、個人的にあるいはクラスで学んだ数人の者と共に整えられていきました。まず組織された集会は、一連の祈祷会でした[4]。「1872年1月、横浜の宣教師たちと英語を話す教派を超えた人たちが祈祷週間の遵守のために1つに集まりました。宣教師に個人的な教えを受けていた日本人生徒の何人かは好奇心から、あるいは自分たちの教師を喜ばすために、また何人かはおそらく本当にキリスト教に興味を持って参加していました。祈祷会では使徒言行録を毎日読み進めることとなりました。日本人参加者が礼拝中よく理解できるように、その日の聖書箇所は即座に日本語に訳されました。集会は関心の高まりと共に成長し、2月の終わりまで毎週続けられました。数週間の後、日本人たちが非常に感情的に動かされ、涙を流しながら、神が聖霊を日本に、初期の教会と使徒たちの周りにいる人たちに与えられるようにと、この国の歴史上初めてひざまずいて祈りました。これらの祈りは彼らの激しい真剣さによって生み出されたものでありました」(J.M. フェリス博士の講演、マイルドメイ会議にて、1878年10月。大阪会議記録、52頁より)。

これらの祈祷会から生まれた直接の成果として、1872 年 3 月 10 日に横浜で教会が組織されました。この教会は、その日に洗礼を受けたばかりの 9 人の若者と、既に洗礼を受けていた中年男性 2 人によって構成されました。教会員たちは自分たちの呼び名をカトリック風に「日本基督公会」としました。これが先ほどの冒頭部分で言及した喜ばしい収穫の日であり、後に続くこの国のキリスト教伝道史において繰り返し見受けられる日々の第一歩となりました。

現在は海岸教会の名で知られているこの教会は、ほとんど途切れることなく霊的な繁栄を続けました。そしてこれを書いている時点(1889 年)で、会員数は 583 人の成人と 38 人の子どもとなっています。彼らの大半は同教会のメンバーですが、他の教会形成の中心にもなりました。また彼らは宣教活動を維持しながら、自分たちのサポートや慈善活動に 1 年間貢献しました。その額は 1,000 米ドル金に相当します。

バラ氏はこの教会の臨時牧師を数年務めました。そして彼の指導と努力により、同教会は日本で初めての教会堂を建てた教会となりました。これはレンガ製で、約 500 人分の席があります。1875 年 7 月 10 日に献堂されました。(サンドウィッチ島[5] の土着クリスチャンによる 1,000 ドルの献金はこの会堂建築のために用いられました。)

一致キリスト教会

それぞれの宣教団は異なる教会組織からの派遣ではありますが、かなり初期の段階から、日本に 1 つの教会を共同して設立しようと強く切望されていました。その教会は他の国のいかなる教会とも組織的なつながりを持つべきでないと考えられました。この問題については 1872 年の宣教師会議で熱心に話し合われ、教会が適当な時が来た時に 1 つの組織となるために、形成されるべき教会組織は類似性のあるものにしようとする方針が取られました。しかしながら、1876 年に至るまでは明確な動きはなく、結果的に、長老制をひく諸教会が合同することで 1 つの協

議会を作ることとなりました。これらのミッションとはすなわち、アメリカ改革教会、米国（北）長老教会、そしてスコットランド一致長老教会のことです。この段階での合同の目的は2つありました。すなわち、日本人教会の育成と神学校の維持のためです。その他の事項については、各ミッションは別々の活動を続けていました。

これらのミッションの世話によって作られた教会は「日本基督一致教会」と呼ばれるようにました。教義基準はウェストミンスター信仰告白とショーター教理問答、ハイデルベルグ教理問答、ドルト信条です。教会の政治形態は厳格に長老制を採用しています。最初から、この合同の成功は確信されていました。それは教会の急速な成長によって証明されています。組織された1877年10月3日の時点で、8つの教会と623人の教会員が存在しました。これらは1つの中会に合同されました。1881年までに、教会数は大幅に増加したので、彼らの活動の指導、教職候補者への資格付与のための試験と任命、その他教会にまつわる事業などはより多くの時間と労力を必要とするようになり、1つの中会で都合のよい具合には担えなくなりました。教会のいくつかは拠点からは遠く離れた場所にあったため、1年のうちに2つの定期的な集会に参加するにも移動に多くの時間が費やされて、大きな重荷でした。そのため、今年より当初の中会は3つに分断され、大会は教会憲章が制定されると共に組織されました。

1885年に米国（南）長老教会ミッション(6)が、1886年に合衆国改革教会ミッション(7)が協議会に加わりました。1886年、新たに2つの中会が組織されました。米国婦人一致伝道協会(8)は一致宣教協議会の会員ではありませんが、一致教会には当初から協力的で、共感と労苦を惜しまず、成功的発展に少なからず貢献したことを述べておくべきでしょう。

昨年末に公表された統計によれば、一致教会には現在のところ大会が1つ、中会が5つ、61の教会、それに8,690人の教会員で構成され、う

ち 7,551 人が成人信者です。また昨年教会維持や宣教活動などのために捧げられた献金額は 15,000 米ドル金を超えました。添付されている地図[9]をご覧いただければ、国中の如何に広い地域まで教会が散在しているか、お分かりになるでしょう。

宣教活動

我々のミッションによる組織的な宣教活動は、1875 年に日本人キリスト者の協力と共に始められました。外国人が旅行できる範囲は条約で狭い地域に限られており、この条約規程は深刻な障壁でした。しかし、機会を見つけては、[宣教] 活動を続けました。成功の度合いや結果の出る速さは地域によって大きく異なります。しかし、何処においてもある程度の成功を見出すことができます。すぐに各ステーションが設立され、全国各地に教会が組織されました。

後に、協力し合っているミッション同士が統合して、宣教委員会の指揮の下で大きな宣教活動となりました。この委員会は協議会によって選ばれ、幾人かの宣教師と多くの日本人牧師と長老たちが含まれていました。委員会が開かれる東京から遠く離れているという理由で、活動のいくつかの重要な部分は同委員会の下では行えませんでした。長崎を中心に行われていた全ての活動がそのケースでした。同委員会は活動を 2 年ほど続けましたが、その活動の指導や責任において、宣教師と日本人信徒たちの協力が極めて有益であることが分かり、このことが一致教会の発展に大きな前進への道筋をもたらしました。

この前進は 1886 年、すなわち大会が伝道局を組織し、それぞれの中会における伝道委員の任命を指導した年に起こりました。教会の宣教活動及びミッションによる宣教活動の大部分は、現在まで続けられています。伝道局および各伝道委員会の半分のメンバーは外国人で、残り半分は日本人です。 諸教会は伝道局に毎月献金しようと熱心に活動しています。協議会とつながりのあるミッションは、3 倍の量でこれらの献金

を満たしています。伝道局は中会伝道委員に年間の割り当て金を、月々の分割払いで支払っていて、委員たちはそれぞれの活動を自分たちの負える範囲内で指導しています。この方法は試行期間を経て実施に移されました。委員たちの仕事は寄附によって可能な限り早く拡大されたので、ミッションはそれぞれの宣教活動を各委員の管理下へと手渡しました。委員たちは定期的に集まり彼らの雇っている聖職者や伝道者からの報告を受けたり、困難なケースを解決したり、人気のある「講義集会」や特別伝道集会を準備したり、彼らの活動がより効果的に遂行できるような方法や手段を工夫したりしています。このような試みの中でも、特に顕著な利点と考えられる点は以下の通りです。すなわち、外国人と日本人が同時期に一緒に働くこと。教会の活動におけるリーダーたちがお互いのことをずっと深く理解し信頼していること。地域の様子をよりよく理解していること。不足している点がより容易にまた素早く補われること。外国人宣教師だけよりも日本人協力者たちの方がより完全に地域を指導していること。そして、教会がこの国の福音化のための働きを支え管理していくために教育されていることです。

ミッションによる宣教活動のうちのいくつかは、伝道局とこれらの伝道委員の管轄に移されないで行われていました。例えば、上田、名古屋、三島、保田と近隣地域での活動がそれに当ります。これら全ての場所に教会はあるものの、そのいくつかは異様な困難に直面しています。このような理由から、それらは現時点ではミッションの指導下に置くのが一番であると考えられています。 東京から北へ 360 マイル離れた盛岡では、1887 年に新しいステーションが開設され、ミラー氏がその場所を担当するため昨年転居しました。すなわち、教会自体が宣教活動に力の続く限り関わるように、励ましを受けたり教育されたりしてはいますが、ミッションの様々な活動の範囲はもはや規制されていません。

横浜及び東京での教育活動

日本においてキリスト教の活動が始まった当初は、宣教師たちは官立学校において教師を務めることも多い状況でした。フルベッキ博士は長崎で数年教師を務め、東京に移ってからは帝国大学の設置に関する政府の信頼された助言者となり、同校における最初の監督者[10]となりました。ブラウン博士も新潟の官立学校で1年教え、その後横浜に戻ってからは彼のもとで若者のクラスを開きました。彼らの何人かは、一致教会の最も信頼された聖職者や、他教派宣教師の貴重な助手となりました。このクラスの世話はその後数人のミッション・メンバーによって担当され、1877年には一致神学校という組織となって東京へと移転しました。その後1年間は横浜で男子のための学校を続けようという努力がなされましたが、改革教会外国伝道局から学校を維持するための十分な供給がなかったために、失敗しました。マーティン・N・ワイコフ教授は1881年に来日し、先志学校として知られる学校を設立しました。この学校はよく維持されて成功しました。同校は2年後に東京に移転し、米国長老教会の築地大学校と統合して、ユニオン・カレッジ[11]となりました。

1877年に3教派の協力によって一致神学校が作られました（5頁［4行目］を見よ）。同校は3教派から1人ずつ選ばれた代表者たちによって、9年続きました。

明治学院

1886年、これらのミッションによる教育活動は、更なる統合へと向かい、明治学院として知られる学校機関へと発展しました。「明治」とは現天皇の時代を指す名前で「啓蒙された統治」を意味します。「学院」とは「学びの場」の意味です。この機関においては、ユニオン・カレッジは普通学部となり、一致神学校は邦語神学部となりました。当初は神学とその他の特別講義を英語で行う特別な学部が、普通学部卒業生のために設けられていましたが、3年間の経験で得られた叡智を集めた結果、

この計画は最近変更され、現在の明治学院には２つの学部しかありません。すなわち、普通学部と神学部です。普通学部における教育は大部分英語で行われています。神学部における教育は英語か日本語のいずれかで、教授の裁量で決められ行われています。普通学部を卒業して神学部学生になった者、東京在住の聖職に就いた者、その他適当と認められた者のために、卒業後の選択コースが提供されています。

明治学院の目的は生徒にキリスト教の影響下で完全なる教育を施すことであり、特に若い人たちをキリスト教の聖職者として訓練することです。ヘブライ語は教えられておらず、ギリシャ語教育も初歩的な内容しか教えられていませんが、これらの学習以外の点では、神学部のカリキュラムは本国の神学校と大して変わりません。

教授会は理事会内に置かれ、７人の外国人と７人の日本人より構成されています。直接の運営は全ての教授を含む教師陣の指示下で行われています。彼らは理事会によって任命されます。我々のミッションから教員として加わっているのは、普通学部のワイコフ教授とハリス教授、そして神学部のアメルマン博士です。

普通学部の教室がある校舎は、ニューヨーク市の G.A. サンダム夫人からの寄附によるものです。外国人居留地の不動産の一部が E. ローゼイ・ミラー宣教師によって寄附され、その売却益はチャペルの建設に使われる予定です。

今年度の学生については以下のようにクラス分けされています。

神学部

上級クラス	4
中級クラス	21
初級クラス	17
計	42

特別学生　2

普通学部

4年クラス		15
3年クラス		18
2年クラス		36
新入生クラス		45
予科　クラス	A	55
	B	22
	C	23
	計	214
	合計	258

このうち154人がキリスト者。

現在,伝道者養成科課程を作る計画を進めています。伝道師として成功するであろう有望な青年たちがいますが、年齢やいくつかの障壁のために、神学学習の課程を全て成し遂げることができない者もいます。彼らのために研究と実用的活動のための2年コースが開設され、神学部の教授陣や幾人かの東京の牧師たちによって指導がなされることになるでしょう。

フェリス・セミナリー

1870年にメアリー・E・キダーが横浜で4人の生徒に教え始め、間もなく港湾の役人[12]を後援者にして日中の女学校を開校しました。数人の生徒が転校してきて、学校は全体的に満足のいくものでした。1872年の終わりまでに、生徒の数は22人となりました。しかし宣教的観点から見た時に、完全に成功した昼間の学校を作ることは不可能に思えました。多くの生徒の両親は近隣に住んではいてもほんの短い間しかおらず、この期間においても生徒たちは1日のうちの部分的にしか学校にいられなかったのです。なので、彼女等の中にキリスト教の影響が長く残るというような望みはほとんどありませんでした。全寮制学校が必要だ

ったのです。その後しばらくして、横浜居留地の広い土地を 1874 年に賃貸できるようになり、そこに校舎が建てられました。キダー女史は 1873 年 7 月に E. ローゼイ・ミラー宣教師と結婚し、それ以降、同校は彼女の夫の協力によって運営されました。この学校に関する初期の歴史についての興味深い報告は、『米国改革教会宣教手引』で見ることができるでしょう。

休暇のためアメリカへ 1879 年に帰国したミラー夫妻は学校の世話を E.C. ウィットベック女史に委ねました。1881 年にウィットベック女史はアメリカへ帰国し、代わりに長崎より健康診断のために横浜に来ていたユージン・S・ブース宣教師がミッションの要請で、同校の世話をすることになりました。1881 年以前は、常に出席している生徒の数は 40 人を越えることはありませんでしたが、女性教育への日本人の要求が急速に成長することで学校の影響力を増す機会は広がりました。1882 年に校舎の拡張によって生徒の収容人数が増えたことも手伝って、生徒数はすぐに 100 人を超えました。ブースは 1886 年にアメリカへ帰国した際、教育活動を更に広げる希望を本土の教会に伝えたところ、隣接する土地の購入のため、また新たな建物の建設のための費用が与えられました。新しい建物であるヴァン・スカイック・ホールは近く完成予定です。このように、学校には必要とされていたチャペル、新たな教室、寄宿舎が作られ、まもなく 200 人ほどの学生が収容可能となります。 学校のレベルはかつて望まれていたよりも高いものとなり、ミッションの指導する他のいかなる女学校とも引けをとらないほどになりました。

ミッション・メンバーのうちフェリス・セミナリーに関わっている者はユージン・S・ブース宣教師夫妻、M・リラ・ウィン女史、アンナ・タムソン女史、とメリー・デヨー女史です。

生徒は以下のようにクラス分けされています。

高等科

2 年　　1

1年	2
計	3
本科	
A クラス	4
B クラス	4
C クラス	11
D クラス	29
計	48
予科	
2年	35
1年	35
計	70
合計	121

このうち51人がクリスチャン

長崎での教育活動

1869年、ヘンリー・スタウト宣教師はフルベッキ博士が東京に移る直前に、長崎に到着しました。その後3年以上は官立学校での教育にあたっていました。その後、直接宣教活動に取り組める機運が感じられるようになったので、官立学校での仕事には終止符を打ち、宣教師館に男子のための教室を開きました。聖書を主たるテキストとして英語で行われる教育は、若い男子に参加の意欲を掻き立てました。スタウト夫人は1873年に、やはり宣教師館で女子のための学校を始めました。生徒は間もなくして多くなり、教室に入りきらないほど集まりました。そのため、どちらの学校も地元の町中へと引っ越すことにしました。数週間のうちに、50人の女性と30人の男性が集うようになりました。しかしながら、聖書をテキストに用いていたことが問題となって、日本人支援者［保護者］たちが学校を閉鎖へと追いやりました。教育活動は宣教師館

で再開されました。後に、キリスト者外国人の厚意によって、校舎がミッションの所有地に建てられ、学校もそこに移動しました。

この時から 1886 年までの間、教育活動は男女ともに希望と失望の間で揺れ動きながら続けられました。1875 年の末にかけて、ウォルフ宣教師が男子校の世話をするように調整されていましたが、数ヶ月後に彼はミッションを去ってしまいました。1881 年にブース宣教師が男子校を開設し、スタウトは 4 人の学生がいる神学クラスを教え始めました。このうち 2 人は現在最も影響力のある教職者となっています。ブースが同年末に横浜へ異動したため、全ての活動は以前のように山積みにされてしまいました。1884 年、ハリス宣教師が活動を引き継ぎましたが、彼も東京へ移ったため、活動はデマレスト宣教師に引き継がれることとなりました。彼は他の仕事の傍ら、空き時間を利用して取り組みました。

スティール記念学校

一方、改革教会外国伝道局はウィリアム・H・スティール・ジュニア記念学校設立のための寄附を局長より受け取りました。その寄附により、1886 年に来日したアルバート・オルトマンス宣教師とその夫人の指揮下で、ミッションによる長崎での男子のための教育活動は成功の軌跡を歩み始め、現在に至っています。1886 年 10 月の段階で、19 人の学生が在籍していましたが、翌年の夏前に学生数は 40 人に増えました。適切な場所が既に選ばれ、教室と寄宿舎用の建物建設が始まりました。これらは 1887 年秋に正式に開設されました。体育館も新設されて、人目を引きつける魅力的な施設となりました。同校には現在予科と普通学部の 2 つの学部が設置されています。前者は 2 年制課程で現在 54 人の学生がいます。後者は 4 年制課程で、35 人の在学生がいます。これら学生のうち 25 人がクリスチャンです。同校は下宿者 60 人分の自前の宿泊施設を有していますが、現在 70 人もの学生で混み合っています。

普通学部における教育内容は英語、日本語、中国語、算術、その他一

般英語を使用した地理と生理学が設けられています。全ての学生に対して毎日聖書の講義があり、週 1 回歌唱の授業もあります。神学を教えるクラスは、日本人教職者と協力して行われています。［開学］当初からいた学生 13 人のうち 4 人が卒業しました。昨年の学生数は 6 人です。神学、宗教史・教会史、聖書、説教学そして歌唱の教育がなされています。学科課程は 3 年に延長されました。神学クラスとスティール記念学校は同じ教師陣によって担われています。すなわち、ヘンリー・スタウト宣教師、アルバート・オルトマンス宣教師、H.V.S. ピーク氏、そして何人かの日本人教師です。

スタージス・セミナリー

ファーリントン姉妹は 1878 年に長崎に派遣され、女子クラスを教え始めました。この活動は学校の中核となるべきことが期待されていました。しかし病のために仕事の中断を余儀なくされ、翌年アメリカへ帰国しました。かつてはスタウト夫人が時間と体力の許す限り、集まってきたそのような女子たちをできるだけ教えていましたが、姉妹の帰国後は学校再建のための新たな女性宣教師が本国から派遣されることを期待しながら、再び夫人が小さなクラスを教えました。期待された人材が派遣されるまで数年を要しましたが、新たな宣教師たちが日本語を学ぶ必要があったため、小規模クラスでの教育以外の活動が始まるまで更に数年かかりました。1887 年にジョナサン・スタージス・セミナリーの校舎が完成し、9 月に 7 人の生徒と共に開学しました。一学期が終わる 12 月には、定期的に出席していたのは 17 人になりました。昨年末には、26 人の生徒がおり、うち 20 人が寄宿生です。彼女たちの 9 人はクリスチャンで、6 人が洗礼を希望しています。 授業は、日常英語を用いた科目、日本語、中国語、音楽と裁縫が行われています。聖書の授業も毎日行われています。学校を世話しているのはメリー ·E· ブロカウ女史とレベッカ・アーヴィン女史です。

女性のための活動

フェリスとスタージス両セミナリーに関わった女性は、時と機会が許せば生徒の家族にも同様の活動をしています。ウィン女史もまた、毎週土曜に、横浜から数マイル離れた横須賀へ蒸気船で渡り、海軍士官の妻や娘たちを中心に構成されている大きなクラスで聖書を教えています。その活動をより効果的にするために、彼女は生徒たちに最近洋食調理のクラスを始めました。

我々宣教師の妻たちには、ぶらぶら遊んでいる暇などありません。彼女たちも可能な限り聖書や裁縫、英語のクラスを受け持ち、居住している地域にあるいくつかの教会や学校とも大抵関わりを持ってきました。しかしながら、伝道局の管轄で組織され実行されている女性の活動は、大部分が横浜のフェリス・セミナリーと長崎のスタージス・セミナリーに限られています。

出版物

いくつかのトラクト［伝道用配布物］がミッションのメンバーによって作られました。その数は正確には数えられません。そのうちのいくつかは彼らが使用する目的で作られただけなので、再発行されていません。他のトラクトはクリスチャン伝道者たちによって、全国で継続して用いられています。2万部から4万部も発行されたものもあります。ミッションは日本のキリスト教雑誌に説教、記事、その他の投稿をして、よく登場しています。

その他に、フルベッキ博士が政府に雇われていた時に書いた本、ミッションによって出版された書物、あるいはミッション・メンバーの著作で出版社によって刊行された書物は、以下の通りです。

ブラウン博士による著作『会話日本語』[13]（1863年刊）と続刊の『語学修得法』。日本語学習のための書物です。前者は2版されています。

フルベッキ博士による論文「日本語習得の最良方法」と「日本語動詞

活用の概要」

バラ氏監修による『子どもの教理問答』、現在3版

『ハイデルベルグ教理問答』の翻訳は何人かのミッション・メンバーの共訳

アメルマン博士監修による『赤子のミルク』と口語『マルコによる福音書』の翻訳

ミラー氏による翻訳『アメリカ改革教会典礼書』

スタウト氏による『宗教史手引』と『教会史』全2巻。これらの多くの部分はS.M. ウッドブリッジ神学博士の講義の翻訳です。

デマレスト氏の監修翻訳でウッドブリッジ博士の『組織神学』

アメルマン博士による『新約聖書神学』、これはヴァン・ウスタージー博士の著作を基に書かれたもので現在2版、『組織神学入門』、『有神論』2版、『神性論』、『神之定旨』、『天地創造論』、『人性論』、『救拯論』、ウッドブリッジ博士の小論『教会政治』に関する翻訳

1881年以来、ミラー氏は『喜の音』を編集出版してきました。これは14ページからなる月刊誌ですが、ここ何年かはイラストの入りのリーフレットも作られています。現時点での月間発行部数は3,300部で、リーフレットは2,800部発行しています。

何年か前に、ミッションからはアメリカ・トラクト協会出版委員会の東日本委員会の代表として2人加わっており、同委員会の多くの仕事を担いました。この1年間、この委員会が刊行した書物の部数は以下の通りです。

書籍	4,283
トラクト	171,774
これらトラクトの総ページ	1,565,481

新たなミッション

今年中に、ミッションの長崎ステーションは別のミッションを作るこ

ととなりました。したがってアメリカ改革教会は日本において、2つの別々のミッションを維持することとなりました。

提案された合同

現在、「日本基督一致教会」と「日本組合基督教会」の合同が提案されています。このことが公表されてから2年ほど経ちますが、この合同は強く望まれています。あと数週間のうちに合同は完了するでしょう。私たちは期待し、祈っています。この提案された合同の主たる利点は2つあります。第1に、この国の主要な街において互いに争うのでなく協力し合い、それぞれが別々に行動するよりも1つで行動することができます。第2に、全ての人々に福音を伝えるために、より大規模で効果的な計画を立てることができます。

結論

30年にも及ぶアメリカ改革教会日本ミッションによるキリストと諸教会のための活動を、この小論で十分に描くことは困難です。これはある世代の一代記のようなものでありますが、神がこの世代やその他の媒介を通してこの国にもたらした、これほどまでの変化を証言できる世代があるでしょうか？この国でのキリスト教に対する激しい敵意は薄れ、あらゆる町や村で自由に宣教し民衆も耳を傾けることができるように主は変えてくださいました。無知の暗闇は文明の発展と神の真理の光によって消え去っています。キリスト教信仰への回心者に対して死刑を処していた政府は、今では信教の完全なる自由を全ての臣民に宣言しました。そして上述したいくつかの出版物は、政府刊行物として印刷されています。十数年前までは、この国にキリスト教会は存在しませんでした。しかし現在、教会の数は250を下りません。そしてこれらのうちおよそ100の教会は、全く自主的に運営されています。 教会全体の教会員は年々増加し、3年間で2倍の人数になっています。1883年1月1日の時

点では、成人で信仰を告白した信者の総数は 4,400 人以下でした。ですが 1888 年の 1 年間だけで、7,000 人近くの成人が洗礼を受け、（子どもも含めて）同年末時点での総教会員数は 25,000 人以上になりました。

働きはまだ終っていません。日本の人口は 3,800 万人います。危険が全くなくなったわけではなく、困難が全て克服されたわけではありませんが、20 年前と比べると、かつての危険や困難は真実でなかったかのようであり、大したことではなかったかのように考えられるようになりました。本国の教会での祈りと献金は以前と同様に現在も必要とされています。我々はもっと働き手が必要です。1886 年、私たちは多大な補助をお願いしましたが、未だ何も届けられていません。私たちは補助を期待していいのでしょうか？これまでの働きに対する神の祝福に励まされた教会は、これからなされようとしている働きのために、私たちの手と心を強めてくれるでしょうか？

現在、宣教師の活動には 3 つの要素があります。すなわち宣教活動、キリスト教教育、キリスト教書籍の出版です。私たちは、以下の点で教会に祈り求めています。どうか今まで歩んできた方向へ更に進んでいけるよう私たちを強めてくださるように。私たちの働きのいかなる部分に対しても中途半端な支援はしないように。私たちが今後も活動を実行していくことを皆さんが徹底して支持してくださるように。そうすれば、私たちは喜んで仕事にとりかかることでしょう。私たちは今世紀の終わりまでに、外国ミッションの働きが完了して、列島に住む大勢の人々が主に立ち返ることを望んでいます。主がこの祈りに応えてくださり、御名が崇められますように。

東京、日本、1889 年 4 月 26 日

日本に派遣された米国改革教会宣教師

	ミッション加入年	引退年
サミュエル・R・ブラウン博士*とブラウン夫人	1859年	1880年
D.B.シモンズ博士*とシモンズ夫人	1859年	1860年
ギード・F・フルベッキ博士とフルベッキ夫人	1859年	
ジェームス・H・バラ宣教師とバラ夫人	1861年	
ヘンリー・スタウト宣教師とスタウト夫人	1869年	
メリー・E・キダー女史（E・ローゼイ・ミラー夫人）	1869年	
チャールズ・H・H・ウォルフ宣教師とウォルフ夫人	1871年	1876年
S.K.M.ヘッケンブルグ女史	1872年	1874年
エマ・C・ウィットベック女史	1874年	1882年
E・ローゼイ・ミラー宣教師	1875年	
ジェームス・L・アメルマン博士とアメルマン夫人	1876年	
ハリエット・L・ウィン女史	1878年	1887年
エリザベス・F・ファーリントン女史	1878年	1879年
マミー・J・ファーリントン女史	1878年	1879年
ユージン・S・ブース宣教師とブース夫人	1879年	
キャリー・E・バラ女史	1881年	1885年
マーティン・N・ワイコフ教授とワイコフ夫人	1881年	
M・リラ・ウィン	1882年	
ネイサン・H・デマレスト宣教師とデマレスト夫人	1883年	
ハワード・ハリス宣教師とハリス夫人	1884年	
メリー・E・ブロカウ女史	1884年	
クララ・B・リチャーズ女史	1884年	1885年
アンナ・H・バラ女史	1884年	1887年
アルバート・オルトマンス宣教師とオルトマンス夫人	1886年	
アンナ・De・F・タムソン女史	1886年	
レベッカ・L・アーヴィン女史	1886年	

ハーマン・V・S・ピーク　1888 年

メリー・デヨー女史　1888 年

*故人

訳注

（1）日本で最初のプロテスタント宣教師による洗礼は 1865 年、J・H・バラにより矢野隆山に施されたとされている。 したがって、この記述は誤記と思われる。後掲の J.H. バラ「回想」注 8 を参照のこと。

（2）実際は全てではなく、一部の原稿は友人に貸してしたために災禍を免れた。

（3）1872 年 9 月 20 ～ 24 日に横浜居留地 39 番のヘボン邸で開かれた最初の在日プロテスタント宣教師たちの会議。この席上で聖書翻訳や公会主義などについて話し合われた。

（4）1846 年にロンドンで万国福音同盟会創立大会が開かれたことをきっかけとして、年頭の一週間諸教派の者同士で祈りあう初週祈祷会などが実施された。幕末期に来日していた多くの宣教師たちはこの動きに同調し、日本でも諸派の宣教師たちにより初週祈祷会が実施されるようになった。この動きが 1973 年に福音同盟会日本支部という形で結実する。

（5）現ハワイ諸島のこと。

（6）金城学院などを作ったミッション。最初の来日宣教師の 1 人であるロバート・E・マカルピンは J.H. バラの娘婿にあたる。

（7）いわゆるドイツ改革派のことで、仙台教会を中心とした宮城中会を形成した。学校機関としては東北学院、宮城学院、尚絅学院が関係する。

（8）横浜共立学園を設立した 3 人の女性宣教師、プライン、クロスビー、ピアソンらを派遣した宣教団体。共立とは連合一致（Union）の意味。

（9）本資料集附録巻頭に添付されている日本地図を参照のこと。

（10）フルベッキは 1869 年に長崎から上京し、同年開成学校から改称した大学南校の教頭に 1870 年より着任している。

（11）東京一致英和学校のこと。

（12）神奈川県令大江卓のこと。大江は 1872 年 9 月、野毛山（伊勢山）紅葉坂の県官舎をキダーの教育活動のために貸し与えた。

(13)『日英会話篇』とも訳されるが、原題は*Colloquial Japanese* であり、日本語修得のことを念頭に置いたものである。近年の研究翻訳でも『会話日本語』(加藤知己 , 倉島節尚編著、三省堂、1998 年）と訳すものもある。

宣教師小伝
（辻直人訳）

凡例

1．本翻訳の底本はJames Lansing Amerman, *Sketch of the Japan Mission*（同志社大学人文科学研究所所蔵）である。

2．著者による括弧書き挿入は[　]と（　）の２種類あるが、翻訳ではどちらも（　）で統一した。

3．原文になく翻訳上補足した箇所については［　］で記した。

ギドー ·F· フルベッキ伝

M.N. ワイコフ著
辻　直人訳

親愛なる皆さん、今皆さんにフルベッキ博士について語ることはなんと名誉なことでしょう。ここで博士を語ることで、博士をよく知る方には改めてその思い出を蘇らせることになるでしょうし、少しばかりしか知らない人にとっては興味深い話を新たに知っていただくことになるでしょう。私はミッションの先輩であり誇りでもあるこの親愛なる友人について語るだけの力がないと感じています。私などよりも博士を長いこと知っておられる方がおいでになっていますが、その方々には他の担当もありますので、おそらく今日はこの日本でまだ半世紀も過ごしていない者が博士について語る方が適しているのかもしれません。

私が最初にフルベッキ博士にお会いしたのは 37 年前のことでした。それは、私が日本に着いて間もない頃、博士の家にゲストとして招かれた時です。博士はこの時既に名の知れた存在で、恐らくこの国で最も影響力のあった外国人だったのではないでしょうか。しかし、そんなことに気づいているそぶりも見せませんでした。その時から私は親しくさせていただき、彼の人生の最後の 25 年間、親密な交流を深めていくこととなりました。

ギドー・フリドリン・フルベッキは 1830 年 1 月 23 日に、オランダのユトレヒト地方にあるツァイストで生まれました。彼の父は傑出した人で、ギドーの生まれた時から数年間ツァイスト市長を務めていました。ギドーは最初の教育を出生地にあるモラビアン・アカデミーで受け、その後はユトレヒト工業学校の校長と個人的な学びを続けました。

フルベッキ博士の出生地や若き頃の人生を見れば、神はご自分の計画に用いようとされた人々に対して、詳細な時間においてまでも準備されているということがはっきりと分かります。彼の両親はルター派でしたが、何らかの理由でモラヴィアン教会に出席するようになり、息子をモラヴィアン学校に入れたのでした。若き頃のこうした経験が、宣教師として指名されるための準備をもたらしていたのです。博士は召命をアメリカで受けましたが、その召命は彼がオランダ生まれだったからこそでした。私はよく博士からこのモラヴィアン学校での様子や、そこから受けた影響について、他の人にも書き送っていたように、聞かされました。つまり「本当の宣教師としての精神は何であるかを、私は若い頃に吸収し、生涯持ち続けた。私は若い時に参加した宣教師の集会のことを今でも覚えていて、宣教師の報告や演説から受けた強い印象を鮮明に思い出す。中でも、中国への使徒ギュツラフの話は強烈だった」。

モラヴィアン学校で受けた教育もまた、後々日本でしなければならなかった様々な難しい仕事を行う彼に、特別な適応力と能力を授けた最善のものでした。その教育のうちでとても重要だったのは、ドイツ語、フランス語、英語、オランダ語の徹底的な学びであり、それぞれの言語は各国の出身者によって教えられていました。こうして、少年ギドーは4つの言語を同じように話したり書いたりすることができるようになりました。フルベッキ博士が日本での最初の25年間とても有効に過ごせたのは、これら4ヶ国語の完璧な知識を持っていたからで、これらの言語はどれも折に触れて彼の仕事で直接用いられたのです。中でも彼の母国語（既に4ヶ国語話せることをお話しましたが、敢えて1つ選ぶとすれば）のオランダ語は欠くことのできないもので、長崎に住み始めた最初の時期に、オランダ語を知っている学者、中でも医師たちとの交際に大変役に立ったのでした。当時の医師は医学教育をオランダ語で受けており、最も進歩的な存在でした。後の時期に日本政府で公務に就くようになってからも、重要なドイツ語、フランス語、英語の書物を日本語に翻

訳することが日常の仕事の大半であり、このような仕事にあたるためには少年時代の徹底的な語学訓練が必要不可欠だったのです。

彼の生れた1830年は、ヨーロッパで最初の鉄道が建設された年で、この年が機械エンジニアにおける新たな時代の始まりと言われています。数年後、少年ギドーが将来の職業について決断しなければならない時に、家族会議が開かれたのですが、全員一致でエンジニアが「有望な職業」であると合意に達し、ギドーもその道に進むべきだということになったのでした。

1852年に学業を修了してからすぐにアメリカに渡り、エンジニアとしてウィスコンシン州のグリーン・ベイで３年間、アーカンソー州で１年間働きました。しかし彼は十分に満足せず、福音を語るよう神から示されたと感じてニューヨークのオーバン神学校に1856年に入学、同校を1859年に卒業しました。ちょうどその時、我々の教会の海外伝道局が日本にミッションを設立する計画を立てていました。この計画は強く推し進められていました。何故なら、日本とオランダの長く続いた関係はオランダ改革教会の宣教師たちにとって特別な機会を開くと考えられたからです。S.R. ブラウン博士が既に行くことを申し出ており、受け入れられていました。そして、ミッションのメンバーのうち１人はオランダ生まれの者を選ぶべきで、その者は完全にオランダ語を話せることが望ましいと考えられました。しかしそのような条件に該当する人物は私たちの神学校にはおらず、調査を広く行ったところ、オーバンの卒業を控えたクラスからフルベッキ氏が選ばれたのです。彼は即座に我々の教会の宣教師になって日本へ行くという誘いを受け入れました。彼は卒業の際カユガの長老より按手を受け、次の日にカユガの中会に転籍しました。このように、彼は自分でもよく述べていたように、「一夜限りの長老派牧師」でした。

1859年４月、彼はフィラデルフィアのマリア・マンヨン嬢と結婚し、５月７日にニューヨークを出帆、ちょうどその６ヶ月後の11月７日に

長崎に到着しました。フルベッキ博士が長崎に足を踏み入れた頃と比べると、今の日本は大きく変化し、交通の便も遥かによくなりました。

今もそうですが、その時新たにやってきた宣教師のまずしなければならないことは、言語の勉強でした。しかし、当時は今とは全く違う条件下で行われました。このことについて 1883 年、フルベッキ博士はこう言いました。「別に言うまでもないことだが、最初来た頃は、言語の習得は今とは全く違った大仕事だった。それは大概は探究と発見の作業で、今日の学習者が得られる多くの参考書や助けなどなかった」。

現在は、直接的な宣教活動を行う機会を見付けることは困難ではありません。却って、直接的な宣教にのめりこみすぎて、言語の学習を妨げていると言う点に本当の困難があります。しかし当時は、宣教師は嫌疑の目で見られ近くから監視されていたため、最初の努力は言語の習得に制限されていたのです。1883 年に開かれた大阪での会議のために準備された講演「日本プロテスタント伝道史」の中で、フルベッキ博士はヘンリー・スタウト宣教師に書き送った何年も前の手紙を引用しました。それは以下のような内容でした。「私たちは、この国の人たちが宗教的な事柄には全く触れようとしてこないことに気付きました。そのような話題が日本人のいるところで持ち上がると、その人はほとんど無意識のうちに手を喉に当てて、非常に危険な話であることを示そうとします。もしそのような場面で２人以上の者がいたとしたら、彼らの表情に嫌悪感が自然に且つはっきりと表れてきます。あなたは人と人の間に余り信頼関係がないことに気付くでしょう。というのも、秘密裡に偵察されている忌まわしいシステムが広くいきわたっているからです。私たちは最初に上陸した時も、そして確かに数年後でもこのシステムは盛んに行われていました。私たちがなすべき仕事に取り掛かろうとする前に、２つのことをまず達成しなければならないのは明らかです。すなわち、私たちは人々から広く信頼を勝ち得ること、そして彼らの言語を習得することです。第一の点についてですが、多くの人たちから、我々は人々の『神

の国』への忠誠心をそそのかし堕落した倫理へと導く人物として疑われています。このような間違った認識は私たちの努力で彼らの心から払拭しなければなりません。親しい交わりにおいても仕事上や義務的な場合であっても、あらゆる機会において、いつも変わらない親切心と寛容な心によって、私たちは良いことだけをしに来たことを示す必要があります。キリスト者にとっては単純な務めです。仕事が成功するために必要不可欠な条件は言語の習得ですが、我々は多くの点において好ましい状況ではなく、私たちの進展はそれと呼応してゆっくりでした」(1)。

1872年にまとめられた宣教師の活動報告で、彼はこう書いています。「プロテスタント宣教は一体として、人々から信用と敬意を得るようになりました。人々の心が自由になってきたこと、偏見が取り除かれていったこと、彼らの極端過ぎるほどの臆病な心が外国人と付き合いたいという望みへと変わってきたこと、これらの変化は宣教師でない人たちの協力によって生み出された結果です。しかし、人々の信頼を勝ち得たのは神の祝福の下で忍耐強く働いた結果であり、キリスト者の品位と振る舞いや宣教師たちの教えによるのです。後年、政府がプロテスタント宣教師たちの街や地方における働きに、信頼と自由を認めたケースが広範囲にあったことも言及しておきます」。

人々や、特に政府から信頼を得たことについては、博士は最初にやってきた信仰深い宣教師たちのおかげだと考えていましたが、実は博士自身が他の宣教師たちよりも信頼を勝ち取るのに貢献したのです。 博士は、彼を知る全ての役人から絶対的な信頼を得たことが、どれだけ自らが絶えず標榜していた宗教への信頼を促すことになったか、私たちはおそらく絶対に知りえないでしょう。私は彼の葬儀の日に、ある日本人キリスト者知識人が「この人にのみ、我々は今日謳歌している宗教の自由についての恩義がある」と言うのを聞いたのです。そして、キリスト教への迫害が終わったのも彼の影響であることは明らかです。

1872年になるまで、キリスト教に対するあからさまな敵意があり、

「『外からやってきた野蛮人』の排除は野心のある愛国者にとって格好のテーマ」でした。このことについて彼はこう書いています。「こうした厳しい感情は、主に身分の高い人たちや役人クラスの人たちが持っていることを指摘しておくべきでしょう。街や地方にいる一般の人々はほとんど敵意など見せたりしません。中流や下層の人々は、キリスト教を敵意よりも恐れをもって見ているのです」。

多くの困難に取り囲まれていたにも関わらず、フルベッキ博士は到着してすぐに、教養のある日本人が読めるように、聖書の御言葉のコピーやマーティンの『啓蒙天道遡原』(2)、その他中国語の宗教書を配り始め、長崎に滞在した10年間に相当な数の文書を配りました。ニコデモ(3)が夜にやってきたように、ある年老いた医者がやってきては話をし、国のあらゆる地域にいる友人のために書物をもらっていきました。 ある時は、肥後から僧侶らが本をもらいに来たのですが、その時フルベッキ博士は一冊も持っていませんでした。中国から４ケース送ってもらっているところだと知ると、彼らは全て購入する契約をしたので、フルベッキ博士は新たな注文をすぐに出さねばならなくなりました。おそらく、これらの本の多くは主としてキリスト教に反対する目的で読まれたでしょう。しかし、購入者の動機はどうであれ、多くの種が広く蒔かれたのです。

やはり肥後から来たある年老いた僧侶は、この初期の頃彼のもとにやってきて、キリスト教の勉強を始めるには自分は年をとりすぎたと言い、彼の弟子３人に教えてくれないかと尋ねてきました。この若い僧侶たちは３年ほど勉強を続け、年老いた僧侶に学んだことを報告しました。老僧侶はしばしば感謝の意を伝えに博士のもとを訪れたので、ある時フルベッキ博士は彼に言いました「あなたは今となっては、あの若者たちからキリスト教について多く聞かされよく分かったことでしょう。あなたはそれを受け入れるか否か、決断すべきです」。その老人はすぐに落ち着きを失いました。彼にとってそれを決断するのはとても難しか

ったのです。多くの宗教について勉強したためにどれが優れているのか混乱していました。その若者たちなら、疑いなく決断をすることができたでしょう。このように個人的に尋ねた後、この老人は二度とやって来ませんでした。

フルベッキ博士が長崎に到着して２年後、２人の若者が英語の聖書を勉強しにやってきました。これが、後々日本政府との重要な関係を築く小さな一歩となったのです。この若者たちが１年ほど彼と共に学んでいたのですが、ある日大変喜びながら、博士への感謝の気持ちとして２匹の黒子豚を連れてきました。彼らは、幕府の試験で全受験者を凌駕し、最高の賞をいただいた、と言いました。この若者たちが成功したことで、長崎で開設されようとしている英語学校にフルベッキ博士を呼ぶことを役人は思い至りました。最初彼はこの話を断っていましたが、強く要請されたため、海外伝道局の許可を得ることを条件に、その要請に応えることにしました。結局その許可が下りたので、14 年もの間彼は政府の仕事に従事し、伝道局との関わりは持ち続けましたが、伝道局からの支援は受けずに仕事にあたりました。

西日本で最初のプロテスタント信者になった人物として知られている村田若狭守を通してフルベッキ博士は肥前の中心地である佐賀で知られるようになり、しばしば藩士たちが彼のもとを訪ねて来ました。

明治維新直前の数年の間に、フルベッキ博士は薩摩、長州、土佐やその他多くの藩士の訪問を受け入れました。彼らはかわるがわる長崎を経由してひっきりなしに旅行をし、1868 年に遂に起きた出来事[(4)]について互いに意見を交し合うのでした。彼ら訪問者の多くは以前に外国人と接触したことのある者たちですが、中でも小松［帯刀］、西郷兄弟［隆盛、従通］、副島［種臣］などの者たちは激しい議論の横行する時代において、際立った存在と述べていいと思います。

1866 年、肥前の大名が長崎に学校を開き、フルベッキ博士には同校と幕府の学校とを交互に教えるよう調整されました。肥前の学校にいた

生徒の中には、現在の岩倉［具定］公と彼の兄弟［具経］がいました。倒幕と王政復古の影響は長崎の学校には特に関係なく、幕府が新政府に変わったことも授業を１日たりとも休ませることにはなりませんでした。

1869 年３月フルベッキ博士は東京へと移り、４年間開成所に関わりました。これが今の帝国大学へと成長していきました。彼は教師と外国語学部の教育に関する全ての事柄についての監督者であり、外国人教師と政府との関係を全てとりもつ仲介者でした。この組織全体が満足のいく形で運用されていくことに責任があっただけでなく（軽んじてよいような仕事は１つもありませんでした。何故なら４カ国から来ている外国人教師には査定がありました。彼らのほとんどは教師を専門職としていたのではなく港で声をかけられたのです）、博士は絶えず太政大臣に仕える政府高官から、外交に関する全ての種類の事柄について助言や説明を求められました。実は、グリフィス博士がフルベッキ博士の死後数週間たってから私に手紙をくれましたが、そこには「彼は、後に集められた専門家集団が担う仕事の全てを１人でこなすために､新政府に仕えた」と書いてありました。

これら全ての様々な要求に応えるために、彼は夜な夜な読書と勉強にふけなければなりませんでした。彼はかつて私にこんなことを言いました。「自分は乏しい文士である、何故なら政府で働いている間、自分は本を読むのと読んだ結果を口頭で発表するのに忙しく、文章を書く時間も機会もなかった」と。博士の読書法について、長男のウィリアム・フルベッキ大佐がこう言っています。「私の父は多読家で、読んだものは全て覚えているというすばらしい才能の持ち主でした。何年も前に読んだ本を引用する時も、どのページを探しているのか正確に開くことができ、ページの何処に書いてあったかさえ覚えているのでした。彼は記憶術によって様々なアイディアを関連付けておけると強く信じていて、注意深く本の余白に書き留められた内容を用いることで、一般情報の巨大

な蓄積を思い出したり体系付けたりしました」。1873 年に彼は開成所での働きを止めて、最初は太政官に、後に元老院と学習院の仕事に従事するようになりました。太政官は、現在ではいくつかの省に分かれている業務のほとんどを取り仕切っていました。太政官でも元老院でも、彼の主たる業務は翻訳で、ここでも少年時代の多言語訓練が大いにものを言ったのでした。これらの翻訳の中でも最も重要なものは、箕作［麟祥］、加藤［弘之］、細川［潤次郎］ら諸氏との協力で行われたナポレオン法典、ブルンチの「国法汎論」、森林法、ヨーロッパ数カ国の憲法、2,000 のローマ法格言注釈付きです。公的な仕事以外に、彼は機会を見付けては政府の要人たちに教育、宗教の自由その他の話題についての短い建白書を送りました。彼の助言はこの時期に政府が着手したいくつかの重要な事柄にも影響を与えました。これらの建白書の中でも、彼自身が最も政府にとって価値ある提言を行えたと感じるものがあります。それは、1872 年に岩倉［具視］公を中心とした使節団を海外に派遣することになった建白書です。この使節団派遣は、彼の提出した建白書の結果と言ってよく、岩倉公は最初ためらっていましたが、次第にこの使節団こそ日本の大事な一歩であると考えるようになって、フルベッキ博士は信頼を得たのでした。フルベッキ博士の亡くなった後で、『ジャパン・メール』の編集者は書きました。「興味深いことに、正にフルベッキ博士が亡くなる日の夜に、現在の総理大臣と大隈伯爵は話題にしている人物があと数時間の命であることも知らずに、互いに維新の時に彼によって書かれた建白書について思い出していた。その建白書で彼は、おそらく日本で他のいかなる施策よりも自由な考えを促進し、日本が長いこと無視をしていたヨーロッパやアメリカから文明を学ぶため、政治関係者を派遣するよう働きかけた人物である」。

政府の公務に就いている間も、フルベッキ博士は機会あるごとに直接宣教の働きをしていました。そしてこの時期の後半には、毎日曜に少なくとも 1 回、時には 2 回以上説教をしていました。直接伝道できる道が

開かれ、政府にも各分野の専門家が増えて、もはや以前のようには彼を必要としなくなったので、これからはもっぱら宣教活動に自分をささげていくのが義務だと感じていました。そして彼は1879年に、積極的に活動するためミッションへ復帰しました。

ヘボン、S. R. ブラウン、グリーンの各博士と日本人協力者たちによって新約聖書の翻訳がほぼ完成に近づいた時、フルベッキ博士は改訳委員のメンバーに選ばれ、新約聖書のほとんどの改訳を担当しました。また後には旧約聖書全体の担当もしました。旧約聖書翻訳の全ての作業は聖書翻訳常置委員会主導で行われていました。全てを改訳する以外に、フルベッキ博士は大いに喜びながら、特別に松山［高吉］牧師の詩篇の翻訳にも協力して取り組みました。聖書翻訳については、ここでは僅かしか触れられませんでしたが、この全ての仕事をなし遂げるのに何年もかかりました。しかしその数年間、博士はこの作業だけをしていたのでは決してありません。彼は聖書翻訳を自身の主要な仕事と捉えていましたが、他にもトラクト協会委員会の出版物改訂にも多くの時間を費やしましたし、説教や講演も頻繁に行っていました。

聖書翻訳が完成した後、彼は明治学院神学部で10年ほど教えましたが、その仕事を楽しんではいませんでした。代わりに教える人がいない時にだけ教えました。博士が最も楽しみ、自分に一番適していると考えた仕事とは、講演と説教でした。日本語を上手に話せるという持ち前の才能と努力によって、博士はこの手の奉仕にはこの上なく見事に適応していました。晩年は、東京でもその他の場所でもひっぱりだこでした。東京にいる時は、週平均２回は説教をし、講演も頻繁にしていました。そして国の方々から誘いがない日はなく、時には他の教派からも数週間の期間来てほしいとの要請がありました。このような仕事を彼は喜んだのであり、１日に２、３度、毎日のように説教をして、１つの約束の場所から次の場所へと渡り歩いていく時ほど幸せに感じたことはありませんでした。

博士の日本語を話す能力については何度も語られていますから、ここにいらっしゃる聴衆の皆さんには特に、私がそれについて話す必要もないでしょう。博士の話す能力が卓越していることに関しては、１つ印象的なことがあります。それは、私たちが一緒に、ある役人で古くからの友人である方を訪問した時のことです。ちょうど彼の亡くなる１年前の話です。その紳士は不在で、短い伝言を残さねばなりませんでした。私はよくフルベッキ博士の演説や会話を耳にしましたが、あの時ほど博士の日本語と私たちの話す日本語が違うと思ったことはありません。それは私も簡単に伝えられるくらい平凡な伝言で、博士の伝えた内容を理解することに何の困難もありませんでしたが、しかし博士のしたのと同じように私ができるかと言われるとまず無理でしょう。何年か前に、その時アメリカにいた日本人が『ニューヨーク・トリビューン』誌に「外国人宣教師で日本語を話せるのは３人しかいない」と投稿しました。このことについて何人かの人からコメントを聴いたのですが、全員がこの３人のうち１人はフルベッキ博士だ、という点に同意していました。しかし、残りの２人については、誰も確信がありませんでした。

フルベッキ博士のしてきたことに日本政府は謝意を示し、1877 年に勲三等旭日章を授与、また 1891 年には特別のパスポートを譲与しました。これにより、博士と博士の家族は「日本国臣民と同じように、国内何処でも旅をしたり滞在したり住んだりする」権利を得たのです。再び博士の亡くなった時の話ですが、彼が政府の仕事から離れて何年も経っていたにも関わらず、兵士の一団が彼の遺体に墓まで付き添い、多くの役人からも、天皇からも哀悼の意が表され、500 円が下賜されました。

しかし、私はこの親愛なる兄弟について、公的な関係を離れて語ることをせずに終えるわけにはいきません。彼に寄って来る人たちは、多くは元来よりあるいは訓練によって疑い深くなった人たちでしたが、その関わる全ての人たちから絶大な信頼を勝ち得たのは、博士の卓越した才能と完璧なまでに信頼のおける人柄によってであることは明らかです。

たとえ人々がこのような才能や人柄を持っていたとしても、博士のように、多くの人たちから愛されている謙虚で愛に満ちて親切な友人は他にはいません。彼が有名人との理由で彼と知り合いになりたいと願う人も多くいました。しかし、彼をよく知る人たちは誰もが、彼のことを特出した教育者で宣教師であると考えるよりも、心の優しい親しみのある人だと考えていました。彼をよく知る全ての人にとって、彼は名声以上に素晴らしい人でした。

彼は非常に謙虚な人でした。謙虚と言うのは、自分を卑下して見せるのではありません。というのも、彼はそうすることに満足していなかったのではなく、そのような態度が厳格に拒否されうる場面において自分を謙虚に見せようという考えが全くなかったのです。彼は、自分の仕事が誠実によく成し遂げられていることを知っており、決してそうでないかのようなふりをしませんでした。しかし彼はその仕事が「自らの義務だからしただけ」と感じていました。我々は彼自身がもっと自身の仕事について語ったり書いたりしてくれたらよかったのに、と思いがちです。しかし、彼は一度コブ博士[5]に長期伝道旅行の報告書を送った際に、「私は歴史を書くより作る方がいいと考えています」と書き記しています。私たちは、主のしもべである博士が歴史を作ることを許されたことを神に感謝したいと思います。

1874 年のある日、私は横浜のある大きな洋書を扱う本屋にいたところ、フルベッキ博士が本を買いに立ち寄りました。何らかの理由で、おそらく彼ははっきりと物を見ることができなかったのでしょう、横にいた若い男性に持っていた日本の紙幣を見せて、それがいくらなのか尋ねていました。その若い男は博士に答え、更に、男が 1 週間か 10 日ほどの観光と買い物で得たありったけの知識を伝え始めました。フルベッキ博士は彼の言うことに強い興味を持って聴いていました。数分後本屋の店主と私は、その若者が、今日本について色々と教えてあげた親しげな紳士の名前を聞いて驚くのをすっかり楽しんだのでした。

彼は寛大な人でした。才能においても、他者の感情や意見に対する態度においても。重要な真実や原理が疑問視された時は、彼は動じずに信念を持ち続けました。しかし、他の意見を考慮する余地があった時は、大多数の声に委ねる心構えでした。ささげることに関しては、私たちは彼が惜しみなく与える人であること以外には、ほとんど知りません。というのも、彼は右手のしていることを左手に知られないようにしていたからです[(6)]。私は彼のささげた物について、それを受け取った人から聞いて知っています。一度、彼の行動をすぐ近くで見る機会があって、彼はその時自分のしたことを隠すことができなかったのです。私が彼の家を訪ねた時、ドアのところで職を失い何も買えなくなった青年と話をしていました。その日は寒い日で、その若者は上着を1枚着ていただけでした。私は先に家の中に入って待っていると、数分してフルベッキ博士が上着を着ないで入ってきました。彼はそのことについて、「あの男性が余りに薄着だったので、古い上着を処分しようと思っていたからちょうどよかった」と説明しました。

彼は愛に満ちた人でした。そのことは彼の友人全てが知っていることですが、その愛の溢れる心の深さを全て知っているのは家族でしょう。「子どもたちが彼のそばにいた」時、私たちはすぐ近所にいました。私はその家での愛情溢れる家族生活に強く印象付けられました。他の誰よりも家族に愛された父親である彼は、長女以外の子どもたちはみな家族を離れていったのですが、10年以上にわたり喜んで父親としての務めを果たし続けました。彼はいつもそこにいない家族のことを考えてはその家族のことを語るのを喜んでいましたが、不平は一切言いませんでした。そして、私たちの家族の話を聴くことにも関心がありました。

楽しい家族生活の様子を描くのには、息子のフルベッキ大佐の言葉を紹介することが最善でしょう。彼は父の死後数週間して、私に手紙をくれました。そこにはこう書いてあります。「家族で過ごした時間は、私にとって幸せな日々でした。私の親愛なる父は私の子ども時代と少年時

代を、他の誰よりも幸せな時期にしてくれました。彼は私たちにとって父であり大きな兄であり仲間でした。この国の子どもの遊びや子ども同士と交流する機会がありませんでしたが、父は私たちにとって想像以上の存在でした。父は理想的な遊び相手でした。まるで運動選手のように私たちを走らせたり跳躍させたりすることができました。彼は美しい語り部で、オランダのおとぎ話とドイツのシュヴァルツヴァルトの盗賊の話が得意でした。皆さんもよく覚えているかと思いますが、彼は美しいバリトンの声をしていました。とても共感できる声でしたので、私たちは父の歌を簡単には忘れることができません。私は、長崎にいた時に父が歌ってくれた子守唄を今でも覚えています。父は私たちとチェスやチェッカーをして遊び、私たちを楽しませることなら何でもしてくれました。そして私たちは父の遊んでいる様子からもいつも何かを学んでいました。父は科学的な玩具に大きな情熱を持っていて、いつも私たちにそれらの玩具をどっさりと与えてくれました。私たちの遊び仲間として父と一緒にいると、遊んでいる時間は学校のようなもので、父の指導はまるで一般教養的な教育でした。これらの様子をお知りになって、私たちが父を失ってどれだけ喪失感があるかお分かりになるでしょう」。

盗賊の話について触れると、私はフルベッキ博士が亡くなる数ヶ月前に私に話したことを思い出します。それは、私たちが東京の第一国立銀行の古い建物前を通り過ぎようとしていた時でした。皆さんの中でも覚えていらっしゃる方がおられると思いますが、それは東京にある最も古い洋風建築の１つで屋根にタワー状の部分があり、いくつかの屋上部が特徴的で、その都市にある如何なる建物とも違って際立ったものでした。彼はこう言いました。「私は子どもたちと、いつもあのビルのことを『盗賊の城』だって呼んでいたんだよ。この辺りに来るとあのビルが見られるから、ここは子どもたちのお気に入りの場所だったんだ」。

彼は朗らかな人でした。忙しい日々の中で社交的な事柄には余り関われませんでしたが、彼はいつも友達と会うことが好きで、彼らとの交流

を楽しんでいました。このように彼と交流のあった人たちは、彼の幅広い才能に驚いていました。博士は彼らと自由に彼らの母国語で会話することができただけでなく、非常に優れた音楽家でもあり、求めのあった時はいつでも演奏や歌で人々を喜ばせる準備がしてありました。彼には強烈なユーモアのセンスがあり、冗談好きでもしゃれ好きでもありませんでしたが、奇妙でばかげたようなことでもとても好意的に受け止め、彼の経験や印象で人を楽しませる能力がありました。それが、彼を最も一緒にいて楽しい仲間と人々に感じさせたのです。霊的な生活や経験については多くは語りませんでしたが、彼の率直で簡潔な祈りから、あるいは日々の生活の様子から、彼を導く聖霊が本当にいつも存在していたことを知るのは難しいことではありませんでした。

彼の召天に関して、我々は、日本に忌憚なく与えられた偉大なる人生の記憶にほのかな影を落とすことにもなりうる力の衰えや精神的虚弱になることもなく、彼が「現役のままで」取り去られたことに感謝だけを感じています。彼の同僚で最も付き合いの長い J.H. バラ宣教師は彼についてこう書いてます。「彼の死は彼の人生の如く簡素で美しかった」。我々の海外伝道局書記官であるコブ博士から受け取った手紙には、このような言葉がありました。「考えれば考えるほど、失ったものの大きさを感じています。彼にいつまでも生き続けることを期待することはできませんが、今回のような召天は衰弱と苦痛が長引くよりははるかによかったのです。この貧しき世界が知る『生きたままの召天』に最も近いものです」。この文面を読んで、私はすぐに聖書の中の最初の「生きたままの召天」に関する御言葉を思い出しました。そして、その御言葉は正にフルベッキ博士のことを述べるのに最適だと感じたのです。「彼は神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった」(7)。

訳注

（1）G.F. フルベッキ『日本プロテスタント伝道史』上、日本基督教会歴史編纂委員会、1984 年 27 ～ 28 頁。なお、翻訳は同書に拠らず、原文から訳者が独自に訳し直した。

（2）原題は *Martin's Evidences of Christianity*。1882 年に横浜の耶蘇教書類会社からフルベッキ撰、高橋吾良訳で出版されている。

（3）ヨハネによる福音書３章１節から 15 節に登場するユダヤ人指導者。イエスのところに夜訪ねにきた。

（4）明治維新のことと思われる。

（5）ヘンリー・コブ。アメリカ・オランダ改革教会海外伝道局主事のこと。

（6）マタイによる福音書６章３節「施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない」を用いた表現。

（7）創世記５章 24 節。聖書で最初に生きたまま召天したとされている人物はエノクである。

S.R. ブラウン伝

T.C. ウィン著
辻　直人訳

私にこの原稿を書くようにと誘ってくれたシュネーダー博士はこう言われました。「何年か前、私が編集長だった時、『ジャパン・エヴァンジェリスト』にブラウン博士の回想について書いてくれたことがあったね。改めてもう一度、似たようなお願いをさせてくれないか」。そう言われて、私は以前そのような記事を書いたことを思い出しました。しかし今となっては何を書いたのかよく覚えていないのです。だから、もしその時の記事で書いたことをもう一度繰り返さねばならないならば、私は謝らなければなりません。もしお許しを乞えるならば、私は今回新たな話をしてみたいと思います。というのも、ブラウン博士は私にとって実に親愛なる叔父なので、個人的な経験談がこれからの話にはよく登場するでしょう*。ブラウン博士をよく知る方もこの小伝をご覧になるかと思いますが、全てにおいて、寛大にお願いします。

1858年の春、私の父はジョージア州からイリノイ州へと引っ越しました。私は当時7歳くらいの少年でしたが、この引越しの時の様子を今でもいくつか覚えています。その次に私の思い出す重要な記憶と言えば、私の母がイリノイ州の家から、ただ一人の兄が日本へ旅立つ際にお別れを言いにニューヨークへ行ったことです。その兄こそが、日本へ派遣されることになった最初の宣教師であり、この小伝の主題でもある人物です。母が帰宅する際、自分の母であるフィーベ・ヒンスデイル・ブラウ

＊（原注）近親者である者がこの原稿を書くことは、ある面で不適当でないかと感じています。

ンを連れてきました。フィーベは賛美歌「わずらわしき世を」[1] の作者であることで知られていますが、他にも作品があります。私はどの賛美歌も同じくらいの価値があると思うのですが、他の曲は余り知られてはいません。ブラウン夫人は私たちの隣の家屋であるブラウン博士の妹の家に、亡くなるまで住むことになりました。

ブラウン夫人は愛の心を持った女性であり、世界への祈りを欠かさない女性でした。まだ福音の伝わっていない国々のためになら何でもする気持ちを持った人でした。自分の息子が生後 13 日の時、「アメリカン・ボード」が組織されたと言うニュースが届きました。彼女がずっと祈り続けてきたことを、教会が実行できるように、神が道を開いてくださったのです！異教徒の国々に将来福音を伝えられるという喜びで、彼女は赤ん坊を抱き上げ、息子を外国宣教師として福音を伝えるために、神に献げたのでした。きっと叔父は、自分が成人するまで、母によって自分が神に捧げられていたことを夢にも思わなかったでしょう。しかし、叔父が自分について、次のような趣旨のことを語っていたことをよく覚えています。「自分が思い出せる限りの早い時期から、私は大学で教育を受け、どこか遠い場所で福音を伝える教職者として人生を過ごすことが自分の務めだと感じていたように思う。他の目的で自分の人生を使おうと思ったことは一度もなかった」。

叔父に最初に会う恩恵にあずかったのは、叔父が 1867 年に休暇で日本から戻ってきた時でした。私は叔父と、私の将来について語り合いました。私には将来しなければならない仕事への迷いがあると話したところ、叔父は自分の若い頃のことを語り、そのような疑問で将来への気持ちを曇らせたことはないと述べました。叔父は、自分の生涯に対する確信と、それを選んだ強い意思を持って歩んでいるように見えました。永遠なる福音を語るようにとの使命を与えられた主イエス・キリストの僕であることを叔父は知ったので、人生の終わりまで彼を心底喜ばせるものは他に何もなかったのです。生活の支援に関しては、何も心配してい

ないように見えました。叔父は、支えは主から与えられるものであり、自分は主の命令に従っていると確信していました。キリストの御言葉「私に従いなさい。その他のことはあなたに何の関係があるのか」(2) に従うことが、神への服従に関する彼の気持ちを表しています。叔父は自分の仕事に特別熱意を持っており、愛していました。その熱意は、彼と僅かな時間接触しただけの人でも感じることができました。別にその熱意をひけらかしていたのではなく、彼の心の中で燃えている献身的な気持ちが自然に表れてくるのでした。

叔父は貧しい大工の息子で、彼が高等教育に進学するための金銭的余裕もありませんでした。実際、父は家族を支える助け手であった息子の労働を失うことを喜ばしくは思いませんでした。若き青年ブラウンがエール大学へ入学を志願するためにニュー・ヘィヴンに着いた時、ポケットに僅かの小銭しか入っていなかったことを知ったなら、皆さんも、どれだけ金銭的に苦労していたか想像できるでしょう。どうやって学費を支払っていくか、その方法ははっきりしていませんでした。しかし、叔父のしたことは、文字通り大学時代に彼なりに歌うことでした。彼は優秀な音楽家で、２人の姉同様良い歌い手だったのです。歌を教えたり村の聖歌隊に参加したり、あるいは小さな礼拝でも歌い、エールを卒業する頃には、多くの自己資金を持っていました。年老いても彼の声は音楽的質の高さを維持しており、自宅や集会で歌って友人たちを喜ばせました。

視力は幼い頃からよくありませんでした。長いこと、彼の目にどんな問題があったのか分かりませんでした。眼科医も今日のようには多くない時代です。しかしある日、ふざけて祖父の眼鏡をかけてみますと、なんと、未だかつて見たことのないほど世界が鮮明になったのです！もはや、何の苦痛も感じずにはっきりと見ることができたのでした。彼は自らの発見で飛び上がるほど大喜びしました。これ以降、彼は眼鏡をかけるようになり、他の子どもと同じくらい読んだり勉強したりできるよう

になりました。 彼は、生涯変わらない強さのレンズを使っていたように思います。彼の眼は、生まれたときからまるで年老いた人のようでした。しかし、彼は自分の目をよく用いました！三ヶ国にいる叔父の多くの教え子たちは、彼らから賞賛を受け取ることは喜ばしいが、叱責をこうむるのは嬉しいことではないと私が述べることに賛同してくれるでしょう！

少年 S. R. ブラウンはニュー・イングランドで成長し、マサチューセッツ州のモンソン・アカデミー・カレッジに入学しました。同校を卒業する以前に、ニューヨーク市の聾唖施設の教師の職を得ました。ここで３年ほど過ごしましたが、この間彼は稼ぎの大半を実家の両親に送っています。おそらく卒業後すぐの頃は家でも、父の隣で大工の身なりをして働いていたのではないかと思います。叔父は自身の手で父の家を塗り、また他にも仕事をこなすことによって、両親から感謝の念を得ることになりました。また、聾唖施設で働いたことが、他の人には見られない生命力と活力を、彼の説教に与えました。彼の顔の表情と身振りは、まるで手話をしながらの説教のようで、彼の話し言葉を強める上で効果的でした。彼は心優しく、他者の喜びや悲しみに共感していました。私が 10 代だった頃、彼は私の父に、１，２年の間父の息子の１人を家の手伝いとして預からせてくれないかと申し出てきました。そこで私はブラウン家に身を寄せ、日々の日課である家事と引き換えに食事等をまかなってもらいました。その頃、彼は日本に行くために辞任した教会の講壇に戻っていました。牧師としての仕事はニューヨークのオワスコ湖の沿岸一帯で繰り広げられていました。叔父は、数年前に自身の影響によって建てられ且つ彼自身がデザインした教会堂で、安息日の朝の説教を行いました。午後には、数マイル離れた学校内での集会にも参加しました。これらの集会では時には涙を流しながら人々に勧めたり戒めたりして、聴衆に熱心に訴えていました。その光景が、教会での話よりもっと鮮明な記憶として思い出されます。時には裁きの日の悲しみが彼の顔に浮か

ぶこともありましたが、主と共にいる喜びの表情にすぐ戻るのでした！

ブラウン博士の人生は、本当に宣教師の人生と呼ぶにふさわしいものでした。その精神こそが、彼の人生を大きく支配していました。外国宣教師としては、その人生は中国と日本の２箇所に分断されます。叔父がまだ若かった頃、日本はまだ宣教可能な土地とは考えられていませんでした。何故なら、当時日本は世界に門戸を閉ざしていたからです。一方の中国では１，２の港が開港しており、この場所なら神の御用のために働くことができると、叔父は考えたのでした。

しかし中国への派遣任命を願い出ても、アメリカン・ボードは叔父を派遣することはできませんでした。他の応募者たちと一緒に、財政的にボードが好転する時を待たねばならなかったのです。ところが、待っている間に、予期せぬところで中国へ行く道が開かれました。

幾人かの高潔なクリスチャン商人たちが、1834 年に亡くなったモリソン博士の栄誉を称えて「モリソン教育協会」を設立しました。アメリカにいたこの協会の代表者たちは、ブラウン氏に、協会における教師の地位を提供してきたのです。こうして、彼は望んでいた仕事に向かうことができたのです。マカオで、後に香港で、彼は担当する中国人生徒たちを教えながら、中国語の学習に並々ならぬ熱意を抱きました。彼は読み書きともに高い言語知識を獲得したに違いありません。彼はこの伝記の筆者に、日本に来て漢字の勉強をしなくてすんだ、と語ったことがありました。中国で既に学んできた漢字で十分だったのです。彼は中国語を話すのにはとても長けていて、少なくとも月に一度は、彼の話を聞こうと家が満杯になった､ということも書き添えておきます。このことを、彼の様々な活動の一面として付け加えます。モリソン協会の設立のために労したことは、著しい成功をもたらしました。教えることは彼にとって芸術のようであり、彼の大好きだった職業でした。彼のその教授法は哲学的で博識高いものでした。若者はいつも彼に魅了されていました。彼らを教えながら、彼ら及び彼らの国にとって最善のことを成し遂げる

可能性を、彼は見出していました。彼は知性を磨くだけでなく、心も磨くことを決して軽視しませんでした。ここで、クリスチャン教育者であり開拓者である彼について、生徒の１人によって描かれた人物像を紹介しましょう。「教室内では、ブラウン博士はくつろいだ様子だった。博士は教えるこつを心得ており、生徒に忍耐強く、優しく接していた。彼は生徒たちと同じ目線に立って考えることができたので、みんなから容易に信頼を勝ち得た。ある教師たちは、自らの浅はかさや教育方法の欠如を隠すために子どもたちに近寄らないで、厳格さや偽物の気高さばかりを示そうとするが、博士にはそのような態度は全くなかった。 博士は、教え子たちに影響を与え、人間形成を促すことのできる稀な人物の１人だった。博士の教えを受ける特権に預かった生徒たちは皆よく育てられ、その後の人生において、いかなる教師にとっても賞賛に値するような働きを成し遂げた。博士は教え子たちを誇りに思っていたし、教え子たちも深遠なる感謝と敬意を持って、博士や労苦を共にした婦人のことを記憶にとどめている」。

モリソン協会の学校は成功した地位を確立し、確かな未来へと進みつつありましたが、ブラウン夫人が健康を害してしまい、アメリカに帰るしかない状況となってしまいました。ブラウン博士にとっては最も不可思議に思えた神の摂理に従って中国で８年過ごしてきたのですが、自分の計画を断念して、長いこと大事にしていた望みをあきらめねばならなくなりました。

他の人と同様に、全く新しい人生計画を作るようにと召しだされた時、彼は特定の範囲内の仕事に導かれたように思えました。しかし彼の場合、大抵の人がなしうるよりも広い範囲を任されていたことが判明しました。時間の関係で、中国から帰国後の仕事について１つだけお話しましょう。彼はかつて牧師をしていた教会近くにあるオワスコ湖のほとりで、私塾を開き成功を収めました。しかし「世界への関心や熱望をかきたてる」はずの給与は僅かしかもらえず、彼の教会での奉仕はほとん

ど無償のようなものでした。彼が給与について言及する時は、いつも人がよさそうな物言いをするので、人々の良心をなだめてしまい、彼らのしていることの通りでいいと思わせてしまうのです！彼は、彼らに対して余りに寛大過ぎました。彼は、より良いものを献げようという方向に彼らの心を喚起することなく、彼らの与えるものをそのまま受け取っていました。私が今述べたことは、彼をよく知る人物にも同様に証言されています。「彼は、大半の牧師たちが受け取るような、働きに十分見合う収入を得ることはなかったのに、この件に関して絶対に不満を抱かなかった」。彼自身実際、様々な働きに直接関わっていました。というのも本当に彼は、挑戦できることは何でもする宣教師であったからです。

彼は横浜で最初の英語教会堂(3)を設計した人物でした。彼は日本でカメラを使った最初の人物の１人で、その使い方を最初の日本人写真家に教えました。日本から初めて帰国した時、人物や風景の興味深い写真を見せるためにたくさん持ってきたので、この国について人々に伝えることができました。というのも、私はブラウン博士が日本での仕事を再開した後も父の家でしばらく行われた礼拝を覚えていますが、これらの写真は家でとても重宝されました。

彼は人々と知り合いになるのと同じように、言語や人々の考え方についての知識を身に付けるのに熱心でした。

彼の家は、かつてはヨーロッパ人のための別荘としても使われていて、安息日には彼らに説教する声が最初に聞かれました。全ての国の水兵たちは彼に親しみを覚えていましたし、彼も彼らの霊的な徳を高めようとしました。

中国及び日本の両方で、彼は頻繁に本を出版し、余り知られていない東洋について世界に情報を伝えました。

日本に来て早々に、彼は若者に英語を教え始めました。それが彼の同僚たちよりも早い時期だったのかどうか、私は知りません。彼のところに来た最初の生徒たちは、ほとんどが幕府の役人でした。開国により世

界と友好関係や通商関係を結んで間もないこの国で、博士は若者に教えることの価値を十分過ぎるほど認識していました。この点について、今となってはよく知られたことですが、中国での経験が活かされたのです。というのも、中国では「少年たち」が英語教育を受けることによって、有名人になりました。彼らは英語習得と共に精神面での訓練を受けることによって、国民に対して大いなる恩恵をもたらす人物となっていきました。彼らのうちの１人、おそらく彼らの中でも最も偉大な人物と言える人について語りましょう。1872 年に私はコネチカット州ハートフォードで、その頃中国から研究を委託され渡米していた高官容閎[4]閣下と会ったことがあります。実は、中国政府が若者をアメリカの最良の機関に留学させるという件も含んだ全ての計画は、容閎の意向から生れたのでした。多くの重大な困難に直面はしましたが、容閎がこの計画について中国政府にしつこく願い出ていたことで実現しました。ところがこの計画の立案者の意に反して間違った報告がされたために、よい結果が実現するための時間が十分かけられる前に断念されたのでした。容閎は母国を発展させようと目に見えないところで静かに活動しており、今でも高く敬意を払われ卓越したクリスチャン紳士であると私は思っています。彼こそが、1879 年にブラウン夫妻が日本から遂に戻ってきた時、ワシントンで中国公使館の書記官として夫妻をもてなした人物です。ここにあるブラウン夫妻の写真は、今ではよく見かけられるものです。二人はとてもよく似ていますね。

ブラウン博士が日本の若者に教えた結果は、中国で教えた結果よりも遥かに大きなものとなりました。日本での時間は、中国にいた時よりもより神に用いられた時でした。博士は中国でよりも長く日本で過ごしたので、国民に強い影響を及ぼし、彼らが進んで博士から知識を受け取り、それを善用しようという気にさせました。『ジャパン・エヴァンジェリスト』の記念号でも記者が次のように述べています。すなわち、「ブラウン博士の教え子たちは卓越しており、日本のキリスト教界で、学校

長、教授、編集者、牧師などにこれからなるか既になって活躍している。その他にも法律、医学、ジャーナリズム、外交やビジネスといった分野で活躍している教え子もおり、彼らの名を全て書き出すには余りに多すぎる」。

ブラウン博士は日本アジア協会の創始者の１人で、最初の副会長でした。彼はよく集会の司会を務め、時には「研究発表によって提示された論点やそれをめぐる議論に対して、豊富な知識から知見を加えた」と言われています。

この宣教師がなしたことを、他の人が全て成し遂げることができたでしょうか？これらのことは、この人のもう１つの性格と能力を特徴づけるものです。彼は、自分の行っていることを素早く終わらせるだけの手腕を持つと同時に、疲れを感じないほどの忍耐力も持ち合わせていました。仕事に打ち込みすぎて食事や睡眠の時間を忘れたこともしばしばでした。

聖書翻訳については、彼は他の初期来日宣教師同様、できる限り早く開始されるようにと考えていました。彼は時間を割いて、実際宣教に出る前からずっと、この大いなる目的を達成するための努力を重ねました。彼が最初にこの目的に向かって挑戦し始めたのがいつなのかは、はっきりしません。1867 年に彼の家が火事で燃えてしまいました。その時の様子は、白髪の宣教師が燃えて煙の充満した家の中を、でき上がった聖書翻訳の貴重な原稿を守ろうと努力し、さまよった悲しみの場面として伝えられています。でも、翻訳のほとんど全てが燃やされてしまいました。この火事で多くの物を失い不便になりはしましたが、翻訳原稿を失ったことと比べれば大したことではありませんでした。常設翻訳委員会が組織された時、彼は委員長となり、日本にいる間は同職を続けました[(5)]。

今まで話してきたのは、白髪になった人物のことです。彼が日本に来た時年齢は既に 50 に達しており、白髪混じりでした。彼くらいの年齢

になってから、新しいミッションを引き受けたり新しい言語の勉強を始めたりするのが耐えられると考えられる人はほとんどいません。彼の仕事は多種多様で根気のいるものでしたが、彼はいつも真に神に用いられた人のようであったので、50 歳から 70 歳の間は驚くほど有益な人生でしたし、全ての若い人にとっていい参考になるものです。

海外宣教師としてブラウン博士が働きを始めた頃は、今とは大部分において状況が異なっています。最近のミッションは、徹底的な弾圧を受けることはありません。現在の多くの宣教地域はほとんど例外なく、キリスト教の導入に抵抗することを封印しています。しかし最初に来日した人たちは、真の神であるキリストを無視するこの国が開放されるようにと、神に祈り求めねばなりませんでした。全ての政治権力は迷信や異教の教えによってキリスト教に敵意を抱き、土着の宗教を破壊しかねない外来の教えが入ってくるのを阻んだのです。国際法は、外国人宣教師の生命を保護できるほど十分に発達していませんでした。国同士の話し合いも不定期でまれでした。外国人宣教師であると言うことは、全ての親近感溢れる物事から隔離され、危険や受難、時には殉教といった困難に直面することを意味しました。これ以上予期しうるような恐ろしい状態はありません。しかしブラウン博士はパウロの言葉を用いてこう言うでしょう、「自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません」(6)。そして、誤った宗教によって心を暗くしている人たちに福音を伝えよう、そう思ったのです。

衰えることのない奉仕の気持ちと多様な経験を経た生涯を通して、ブラウン博士は友好的な気質と陽気な性格を持った人物として知られていました。彼は若い人にも年老いた人にも、魅力的な相手でした。彼は身分の高い人とも低い人とも、どうつきあえばいいのか知っていました。真の人間は、彼を友と考えていました。助けを必要としている人に対し

ては、惜しげもなく手を差し伸べました。東洋において住んだ地域では、彼は最善で最も偉大な住民の１人と考えられていました。彼はその生涯と高潔な性格によって、社会に栄光や恩恵を与える人物と考えられたのです。キリスト者として、そのような地位を保持し続け、且つ人々に良い影響を与えることのできることは、明らかに些細なことではありません。

いくつかの偉大な栄誉が彼に与えられました。彼は謙遜な心を持っていたので、本来ならもっと称えられるべきところでしょうが、それを避けていました。彼はいつの時代も著名な人物と広く認められてきました。彼らはいつもブラウン博士の価値を理解し、彼を高い地位に位置付けてきました。

色々な国の人々との共同生活には、色々大変なこともあったかもしれません。しかし苦労があったにせよなかったにせよ、ブラウン博士は包容力のある精神と愛の人と知られていました。彼は日本のプロテスタント諸教派を統一する方向へ大胆に働きかけた人でした。彼は望ましい結果を得るためにできることをしました。もしそこに率直な信仰がなければ、そして教派ごとに分断されることから自由になって、１つのキリスト教会を日本に建てるという彼の努力がなければ、私たちはここに存在しているような合同組織を恐らく知らなかったでしょう。私たちはこの宣教師協議会で共に座っていることはなかったでしょう。一方で、このような動きが、「日本基督教会」は国内全ての教派を含むものという考えを広めることとなりました。残念に思うのは、この考えが我々の働きを始めるための考えとなっておらず、その代わりに今これから始まる働きが目指す理想として、いつの日か達成されるであろうものであるかのように考えられていることです。

私の生涯において、この主に従った者を知ることが赦されて、彼に愛されていたことを感じられたのは１つの特権でした。既に述べたように、私の最も古い思い出は彼が最初に日本へ行こうとする頃のものです。そ

の頃、彼の一時休暇の間に、私が彼の家族と共に短い時間を過ごすことができました。もちろん、私の少年時代も青年になってからも、彼は頻繁に私の家に手紙をくれました。おそらく、こうした関わりが私を日本へと向かわせるのにどれだけ影響を与えたのか、知り尽くせません。私たちが日本で22年近く過ごす間も、ブラウン博士の記憶が頭からずっと離れないでいます。彼が如何に偉大な人物だったかという証拠です。彼はまれなる善人でした。彼を知る全ての人は、私の意見に賛成してくれるでしょう。彼は敬虔な人で、神の大義の成功に関して高遠な望みを持った人でした。主に忠実な人で、彼の人生において主に栄光が帰するようにと願って生きた人、私たち大部分の誰よりも成功した人でした。

＊病気が進行したために、69歳2ヶ月の年齢で、このキリストの使徒は悲しみながらアメリカ合衆国へともう1度向かうこととなりました。彼は、これが日本との、そして可能な限りにおいて喜んで新たな命を与えた人々との別れであることは重々承知していました。いつも燃えるような魂と若い心を持っていましたが、彼は日本でなすべき仕事は終わったことをしぶしぶ認め、母国に帰って愛する家族や友人たちに会いにいくことしました。彼らにとっては、これからはずっと彼が一緒にいてくれることが祝福となるように、と長いこと持ち続けた望みでした。彼は故郷に戻ってきて数ヶ月のうちは友人との親交を新たにしたり、親しくしてくれた人たちを訪ねたりしました。この期間に、何処よりも訪れたい場所が一箇所ありました。それは、若き日の家、彼の両親と姉が埋葬されている場所です。そこが、彼にとって最も神聖な場所でした。抵抗もできず引きつけられるように、1880年7月、マサチューセッツ州モンソンを訪れました。それは、70歳の誕生日をお祝いされる2日前のことでした。彼は1日のうちでできる限り多くの友人を訪ね、もちろん、

＊（原注）最後の部分は、軽井沢でこの原稿を読んだ後に、友人からの助言で加えることにした。（T.C. ウィン）

墓地にも行きました。その夜床に就くと、地上から天国へと旅立っていきました。それは実に簡単にまた突然だったので、ブラウン夫人も自分の夫が大きく１，２度呼吸をしたこと以外には気付かないほどでした。献身的な姪がこの善人の召天のことを、次のように述べています。すなわち、彼女の知っている他の死に方と比べてもより美しかった、と。「神は愛する者に眠りを与えた」とその様子を描いています。まるで１日の終わりに太陽が沈むように死んでいったというのは、彼にしてみれば真実だと思われます。そして彼の亡くなった日は普通とは違った愛らしく魅力的な日であることは確かです。

訳注

（１）『讃美歌』日本基督教団出版局、1954 年、319 番に収録

（２）ヨハネによる福音書 21 章 22 節

（３）ユニオン・チャーチのことと思われる。

（４）ようこう（Rong Yong)。1828 年 11 月生、1912 年 4 月没。ブラウンが中国からアメリカへ戻る時に同伴した中国人青年の１人で（最初の中国人アメリカ留学生)、後に中国高官として活躍。在米時の呼び名は原文にあるように Yung Wing だった。

（５）原文ではほぼ同じ内容の文章が２度繰り返されているが、翻訳では２つ目の文章を削除した。

（６）使徒言行録 20 章 24 節

J. C. ヘボン伝

D. タムソン著
辻　直人訳

今からジェームス・カーティス・ヘボン博士の生涯、仕事、そして人柄について述べていきますが、今回は主に 1863 年から明治元年の頃、すなわち 1867 ～ 9 年の頃までの間に話を限定しようと思います。何故なら、この期間に私が博士と最も親しくおつきあいさせていただいたからです。しかしながら、彼の人生を振り返る際、まず始めに、その誕生から前述した時期の始めまでの様子と、また明治時代の夜明けの後、1892 年にこの国を去るまでの間に彼が日本で何をなしえたのかを少し見ておくことが必要でしょう。

ヘボン博士は 1815 年 3 月 13 日に、ペンシルヴァニア州ミルトンで生まれました。博士の両親は教養のある人物であり、知人たちから尊敬され信頼されていました。父は卓越した弁護士且つ裁判官で、母は早くから宣教師としての熱意を抱いており、周囲から女性のリーダーと考えられていました。18 歳にまだならないうちの 1832 年、ジェームス・カーティスはプリンストンを卒業し、その後医学の道へと進んで、1836 年にペンシルヴァニア大学を卒業しました。

1840 年にクララ・メリー・リートと結婚しました。彼女は若い女性でコネチカット州知事リートの家系の出です。知事のリートはチャールズ二世 (1) の時代に逃亡した国王殺害者 (2) を支持しかくまった、と伝えられています。２人が結婚する直前の 1839 年に、長老派海外伝道局はシャム (3) にミッションを設立することを決めました。最初、それはシャム人に対してではなく中国人のために作られたのでした。中国は

まだ開国していませんでしたので、近隣の国やバタヴィア[4]、バンコク、シンガポールといった都市で見付かった多くの中国人移住者たちのための宣教拠点を支援する方針を伝道協会は採ったのです。1841 年 7 月、ヘボン夫妻は長老派伝道局のシャムに派遣される宣教師として任命され、シンガポールに到着しました。その際、後に中国宣教団に加わる許可を得ていました。２年ほど赤道付近で過ごし、1843 年 10 月に夫妻はシンガポールからマカオで数ヶ月過ごした後、コロンス（胡老嶼）というアモイ近くの小さな島に移りました。３年もの間中国及び沿岸地域で過ごした間に、夫妻の同僚には、改革教会の マッカーティ博士とデヴィッド･アビール、ロンドン・ミッションのストローナック兄弟２人、中国の海賊の手によって命を失った若きウォルター・ローリーなどがいたことがよく知られています。彼らの名前は尊敬に値する名として触れておくべきでしょう。1846 年に、ヘボン夫人の健康を考慮して、彼らはニューヨークへ戻らねばならなくなりました。中国でと同様に、ニューヨークでも彼らは家族の病気や子どもの早世[5]といった試練に会わねばなりませんでした。1858 年までの 14 年間、ヘボン博士はニューヨーク市で医院を開業し成功しました。この年の暮れまでに、長老派伝道局は再び彼と仲間を、その頃商業世界に開国したばかりの日本で計画された宣教活動を始めるために選びました。このような指名に対して夫妻は即座に応答し、ニューヨークを 1859 年 4 月 25 日に出発しました。145 日の航海の後、同年 10 月 18 日に神奈川に到着し上陸しました。この新しく開港した港で、夫妻は住居として成仏寺という寺を確保しました。ここを修理して彼らは２年以上もの間家として使いました。ここでヘボン博士は、医療宣教活動を始め、一種の施療所を開設したのですが、程なくして時の政府からの命令があり閉鎖しました。そしてついに、神奈川の外国人居留地は幕府の指示によって、湾を越えて横浜へと移ることになりました。ここの土地が払い下げられ分配されることになって、ヘボン博士は 39 番を獲得しました。ここに、彼は自分の手で半分が平

屋になっている丈夫な造りの家を建てました。その家は、大きく街が変貌した今でも残っています。この家がまだ新しかった頃、筆者は初めてヘボン夫妻にお会いしました。1863年5月、今から46年以上も前のことです。お二人ともその時が人生最良の時であったかのようで、年齢も50を過ぎていたのにとても精力的かつ活動的で、苦労なく立ち上がり、いつもきれいな身なりをして落ち着いた振る舞いをしていました。新しい家のインテリアもきれいに落ち着いていて、装飾も美しく施されていました。この家で、予期もしなかったことでしたが、私は夫妻のゲストとして1年ほど一緒に住みました。私が日本に来て最初の1年でしたが、彼らの普段の日常生活を見る機会となりました。私は自分の家を別の場所に見つけた後も、数年間にわたり、横浜で極めて親密な関わりを続けました。

この時点から以降6，7年間の明治時代の幕開けまで、私はできる限りにおいて、ヘボン博士の日常生活を描こうと努力しています。もしこれが完成すれば、彼が日本での働きを終えるまで如何に有効な仕事を続けてきたかを示すのに十分なものとなるでしょう。これをするためには、しかしながら、私は当時彼が置かれていた環境や、彼を取り巻いた友人同僚との中での彼の様子を描かねばなりません。横浜は当時発展し始めていました。実のところ、既に慌しい場所へと成長していて、今日のような密集した人口過多ではなかったのですが、ほとんど都市のようでした。住民たちの要求で、ヘボン博士は外国人街の通りを区画整理したのですが、これが完了する前に多くの土地が売買され市民によって家が建てられていきました。これは考慮されねばならなかったのです。さもなくば、通りは狭く、捻じ曲がって不規則なものになってしまったのです。当時、居留地にはまだ外国人の家も日本人の家もありませんでした。日本人居住地である本町通り、弁天通りとその他の地域は今日もそのままですが、余り裕福そうには見えず、しっかりした造りではありませんでした。公園のようなものはなく、ただ「沼地」と呼ばれる場所が

ありました。都市の外国人居住区域に建てられた多くの家は最初平屋の一軒家でしたが、その多くは後に２，３階あるいはそれ以上の高さの大きい建物に取って代わられました。一体を水路が囲み、道の入り口や橋など都合のいい場所に監視小屋があり、徳川の侍が袴を着て２本の刀を挿し、一列に座って行きかう旅行者を見ていました。以上が、かつての横浜の大まかな様子で、引き続き英国兵士の連隊が居留地内にキャンプを張っており、港の軍艦から乗組員や水兵たちがよく訪れました。ここでの生活は変わってきています。慌しい場所には独特な雰囲気があり、興味を引いたり刺激を与えたりする出来事が起こります。そのような雰囲気は主として、頻繁に起こる暗殺行為やそれに伴う大規模な葬儀、逮捕された犯罪者への刑執行といった理由によるものです。維新の起きた時、このような騒々しい状況下ではありましたが、ヘボン博士は静かに手を休めることなく自分の仕事を続けました。しかしながら、彼の家にはその家独自の関心事がありました。ヘボン夫妻はいつも、初期宣教師たちや、横浜にいた多くの高官やビジネスマンと親しい交流を持っていました。その上、まだ鉄道もホテルもなく観光客もいないこの時、中国やその他の地域から多くの訪問者が保養あるいは商用目的で、定期的に日本にやって来ました。彼らの多くはヘボン夫妻の客として歓迎され、温かくもてなされました。この他にも、大阪で自分の本務とされる仕事の最中に溺死したベル提督についても触れておくべきでしょう。また、アメリカ海軍のワトソン大佐、中国にいるワード将軍の仲間であるバーガヴァイン将軍、上海にいるブーン主教の妻であるブーン夫人など、みな興味深い人たちでした。このような人たちに囲まれ、仲間との交わりの中で、ヘボン博士は毎日着々と仕事を続けていきました。39 番にある家の横に彼はちょうどよい大きさの施療院を建てました。前方の部屋には 100 人以上の患者のための座席がありました。後方の部屋には 棚があって薬と中国語の聖書とトラクト［伝道用文書］が置いてあり、患者のためのテーブルといくつかの椅子が用意されていました。患者は治

療のために１人１人、前の部屋から呼ばれました。最初の頃は、長いこと前の部屋は日曜を除いて毎朝早い時間から診療を待っている患者で満杯でした。平日は早朝の朝食とお祈りの後、ヘボン博士は後方の部屋に入り自分の場所に着くと、多くの彼の医学生か助手の中から１人が即座に患者をこの後方の部屋か手術室へと案内します。そこで彼らはすぐに治療を受け本の薬瓶と共に、多分、時々はトラクトか聖書の一部も渡されて送り出されました。遠くからも近くからも大勢の人が治療を受けにやって来るので、午前中に診療を終えるために、重大な事態にも３，４分で対処しなければなりませんでした。日本人の益となるこの医療行為は15年ほど続けましたが、患者の要求に十分対応できる能力のある日本人医師が活躍するようになってからは辞めました。彼は外国人開業医の苦情には理解があったため、外国人に対しては絶対に治療をしませんでした。

午後には、博士は最初の注目すべき日本語辞書の編集作業や聖書のいくつかの箇所の翻訳を再開しました。この仕事を彼は勤勉に午後４時か５時まで［日本語］教師と取り組み、残りの時間は居留地内を散歩したり、家で友人たちとの交わりを楽しんだりしました。これが、今我々が語っている時期における彼の日々の生活の様子で、間違いなくこのような生活は彼の日本での働きを終えるまで続いたのです。博士の物静かなエネルギー、節度のある生活、規則正しさ、機敏さ、几帳面で勤勉な態度が、自らに課せられた仕事を完成させることを可能にしました。医療の仕事の他に、博士は旧約新約聖書を最初から最後までの翻訳を分担し、その上に、新約聖書の一部及び聖書全体のローマ字版を作成する作業の多くを担当しました。博士は自身による日本語辞書を４版出版し、そして彼の聖書辞書も出版しました。更に便利なトラクトやリーフレット数種をも刊行しました。日々の生活は､既に描いたような様子でした。博士の信仰生活も規則正しく途切れることがありませんでした。彼は積極的に横浜で英語の礼拝ができる場所を設け、現在のユニオン・チャー

チが今のように組織される以前の数年間そのような場所を保ち続けました。安息日には、教会に毎週出席しました。家では、家庭礼拝を守っていました。毎週の祈祷会と毎月のコンサートはしばしば彼の家で開かれ、たびたび彼が会を敬虔に、献身的に進行し、参加者の啓発を促しました。博士は強調するよりも悔悟の気持ちで話しました。感情の高まりを見せたことはなく、激しい態度も見せず、いつも厳粛で物静かで落ち着いて、穏やかで、全ての宗教的日課において深く真面目な態度を取っていました。彼の専門的な働きや執筆活動による大きな成果の他にも、仕事への博士の生涯にわたる献身的な姿勢を表す不朽の記念碑があります。東京の明治学院には１つの住宅とヘボン館がありますが、これは彼の出版物で得た収益が如何に利己的でない形で費やされたかを示しています。横浜にある指路教会は日本で最も高価で価値のある教会堂を有する教会の１つですが、獲得された土地も、建てられた会堂も彼の尽力によるものでした。これら全ての建物は彼の寛大さと行動力を示す記念碑として長く残るでしょう。しかし、特に彼の仕事に適したその人柄は、建物よりも長らえて、これから来る時代に書かれる歴史において一層輝きを増すことでしょう。

もし私が、彼のキリスト者としての最も著しい特徴を挙げろと言われたら、彼の柔和で揺らぎのない信仰を述べることを躊躇しません。この信仰が彼の行いや生き様を可能にしました。よく彼は口にするのですが、95 歳になる今に至るまで辛抱強く希望を持ち、救い主が来られて彼を天国にある家に呼んでくれることを待ち望みながら、生きてくることができたのです。日本の教会で記念日に話された奨励は、とてもよく知られている使徒の御言葉「わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にはならないことを、あなたがたは知っているはずです」(6) と共に、後に海を越えて伝えられました。全ての教会がこの奨励を心に留めるようにと願います。

訳注

（1）チャールズ一世（注２参照）の長男でピューリタン革命時はオランダに避難していたが、クロムウェルの死後 1660 年イングランド王位に就いた。在位 1660 年から 1685 年まで。

（2）イングランド国王チャールズ一世は 1625 年から 1649 年まで王位に就いていたが、ピューリタン弾圧など圧政を行ったのでイングランド各地で反乱が起き（ピューリタン革命）、1948 年反国王派との対立に敗れ、翌年公開処刑された。

（3）現タイ王国

（4）現ジャカルタ

（5）ヘボン夫妻はニューヨーク滞在中、３人の子どもが生れたが、いずれも赤痢などの病気にかかり、3 人とも 5 歳、2 歳、1 歳で他界している。（W.E. グリフィス著、佐々木晃訳『ヘボン　同時代人の見た』教文館、74 頁）

（6）コリントの信徒への手紙第一 15 章 58 節

回　想

ジェームス・H・バラ著
辻　直人訳

1909年の軽井沢における宣教師協議会年次総会のための原稿あるいは講演として割り当てられた主題は「回想」ということでしたが、余りに主題が漠然としていることを残念に思っています。ある特定の主題について想定する必要があります。この題では余りに一般的ですので、全くの個人的な話でまとめていくのが、おそらく１つの案でしょう。私の心には、異教徒に対する使徒の働きについて、また使徒たちが自らの召命をどうとらえてきたかについて考えてみたいという気持ちがあります。聖書における彼らの言葉には、私自身が宣教師になる召命を受けた時の気持ちや望み、この仕事に就くという栄誉や特権への思い、そして大きな責任をとても担えきれない自分の力不足といった心情がよく表現されています。

２つの聖書箇所で、これらの見方が表現されています。その１つが第一テモテ１章12節「わたしを強くしてくださった、わたしたちの主キリスト・イエスに感謝しています。この方が、わたしを忠実な者とみなして務めに就かせてくださったからです」。そしてもう１つ、エフェソ３章８節「この恵みは、聖なる者たちすべての中で最もつまらない者であるわたしに与えられました。私はこの恵みにより、キリストの計り知れない富について、異邦人に福音を告げ知らせており…」。このように、使徒たちは自分に委ねられた期待の大きさと、その期待を十分に成し遂げられないという自らの不十分さ、更には彼らに使命を委ねた崇高な根源的存在を感じていました。このような認識はどれも、私自身が宣教師

として召命を受けた時の気持ちに当てはまるもので、私は喜んで日本という国に、キリストの福音という尽きることのない富を分配する人になりたいと思ったのでした。

私の回心は、異教徒たちに接した偉大な使徒たちの経験からは程遠いものでしたが、人間の営みの孤独さや自立性を際立たせるものでした。それは安息日の午後、1849年の夏の日に、線路の上を歩いている時に起こりました。当時私は、私の雇い主[1]の３歳になる娘さんリビー・コウ・テン・アイクが亡くなったことに遭遇していたのです。このような不本意な生涯を目の当たりして、その時私は17歳でしたが、真剣に死にたいと思うようになりました。でも、私は死に対して自分が何も準備していないことに気付きませんでした。私は長老派の厳格な家庭で育ち、知る限りの表面的な倫理悪や違反をしたこともありませんでしたが、にも関わらず天の御国に入るためには生まれ変わって新しい命を得る必要があることさえ知らなかったのです。この時、私は『クリスチャン･インテリジェンサー』に載っていたコラムを読みました。それは、ある家族が全員『バクスターの回心していない人への呼びかけ』[2]という小さな本を読んで回心したというお話でした。私は回心とはどんなものなのだろうか、と疑問に思いました。そのような単語は聞いたこともなかったし、心に思い浮かんだこともありませんでした。正にその時私は６～８マイル離れた自宅を訪れて、妹マーガレットの机の上にその小本が置いてあるのを見つけたのです。その本には、私たち家族と親しくしていた人、かつて祖父家族の召使をしていていた人で、その後ニューヨーク市でまじめなクリスチャンの御者になったロビン・アームストロングという人からのプレゼントと書かれてありました。本の冒頭に、エゼキエル書33章11節「彼らに言いなさい。わたしは生きている、と主なる神は言われる。わたしは悪人が死ぬのを喜ばない。むしろ、悪人がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ。立ち帰れ、立ち帰れ、お前たちの悪しき道から。イスラエルの家よ、どうしてお前たちは死んでよい

のだろうか」に関する解説が書かれていました。 この箇所は、私の死にたいと言う心境とは正反対の内容で、神からの私への個人的で間違いのない呼びかけに聞こえました。その本のまえがきと序章を読むとすぐに、慈悲深い神は私の目を見開かせて、如何に私が失われた存在で、生まれ変わっていない存在であるかを気付かせてくださいました。もし私の願いが聞き入れられていたなら、とっくに「苦痛で天に目を上げ」ていたことでしょう。私は何年か前に犯してすっかり忘れていた罪をはっきりと思い出し、まるで保安官であるかのように正義を振りかざして、パウロのようにこう言ったのでした、「律法が『むさぼるな』と言わなかったら、わたしはむさぼりを知らなかったでしょう」[3]！はっきりと罪を自覚した私は、どちらの方向へ助けや援助を求めればいいのか分かりませんでした。私の悔い改めの感情は自然に寡黙になっていき、誰のもとへ行けばいいのか、誰を信頼すればいいのか、分からなかったのです。この時、ある言葉が聞こえてきて、私の記憶に残りました。それはまるで天からの声が私の魂に響いたかのような、奇妙な出来事でした。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。この声がとても力強く聞こえ、私は自問しました。「これは聖書の言葉だろうか？」すると記憶が蘇り「マタイ 11 章 28 節だ」と気付きました。私は福音に立ち帰り、そこに喜びを見出しました。そして、私の魂へ主イエスから直接語られたメッセージであると思うようになりました。しかし、魂に敵対する考えはいつでも攻撃の手を緩めません。イエスのもとに行くことはイエスに祈ることであり、神に祈りで呼びかけるのです。他の何者でもなく、神にのみ祈ることが正しく理にかなったことなのだろうか？イエスは本当に神の子で、イエスに祈るのは正しいのか？これこそが、私にとって、今までに神学上でぶつかった問題で最大唯一の難問でした。私はどのように解決したのか？赦されていない罪の重荷で押しつぶされ、キリストによって神の御許に招かれる―私は何をすべきなのか？私は最初、神が与えた全ての証言、すなわち

彼の独り子について、主の誕生、主の洗礼、主の宣教、そして神が主を死からよみがえらせ天における神の右の座で主に与えた力についての証言を熟慮してみました。これら全ての考察を経て、もしキリストが神でなかったとしたら、彼を崇めるのは間違いであり、そうしたところで私が責められるのではない、という結論に達しました。神自身が責められるべきなのです。何故なら、神はキリストの神性についていくつもの証拠を示されており、私は神の命ずるとおりに信じたのですから。そこで私は熱心に主キリストの名を呼び求めました。しかし、休ませてくれるという約束は一日経っても一週間経っても、一ヶ月経っても叶いませんでした。三ヶ月が過ぎ、読んでは祈りつつ、あの「小さな本」を、特に巻末の結論部を私は何度も読み返しながら、前に述べた日曜の午後まで過ぎていきました。本を読み祈りながら私は線路の上を歩いていると、構脚橋のところまでやってきました。3,40 フィートの高さで、枕木を踏みながら渡っていきました。その時、私の心にある疑問が浮かんできました。「もしこの下の峡谷と流れの中に落ちたら、どこに行くのだろう？」すると、正反対のことを言うことを全く許さないほどの力のこもった答えが返ってきたのでした。すなわち「地獄へ落ちる！」と聞こえたのです。私は余りの興奮で、実際に橋にたどり着く前に足を踏み外してよろめき、帽子を土手に落としてしまいました。私は急いで帽子を拾い上げ、私自身が落ちなかったことを心から神に感謝しました。私は慎重に橋を渡り、再び主に感謝をしました。罪は私にとても重くのしかかってきていましたし、約束された救いは未だに程遠く思えていたので、私は、バクスターの好きな表現を用いるとすれば「今かあるいは絶対にないか」のように感じていました。そして、熟慮した結果、もう一度祈って、それでもしキリストが今私を救ってくださらないのなら、私には助けは来ない、私は永遠に迷い出た存在なのだろう、という考えにいたりました。主要道路にたどり着くために橋を渡って近道をし終えるまであと少しでした。私は線路から道路へ入り、サファーンズへ行く途中で

した。そこで、私は橋の下に降り、私の創造者以外には誰も私に目を留めない場所で祈り始めました。どのようにあるいは何をすればいいのかよく分からなかったのですが、しかし、私は肩から罪という重荷が落ちていくのを感じ始めました。私の魂は喜びで満たされ、これ以上求め続ける必要もなく、ただただ「私は主を見つけた！主を見つけた！主を見つけた！」と叫びました。こうして私の祈りも終わったのです。しばらくして、私は「おや、これは奇妙だ。これは単なる心酔か間違いではないのか。もっと祈った方がいいのではないか」と考えました。私は長いこと祈りました。兄弟姉妹８人の名前を１人１人思い出しながら。いとこや他の親族についても同様にしました。このようなことを意識的にしたのは初めてでした。そして「おや、これは奇妙だ。自分自身については一言も祈らなかった。」ということに気付きました。そして、ある考えが心に沸き起こりました。「あぁその通りだ。私は生まれ変わった。今や私は罪から解放され、人々が赦され救われるためのお手伝いをする自由を手にしたのだ」。

私が宣教師の働きという召命を受けたのはこの出来事と似たような感じで、そんなに時間をおかないうちに起こりました。その出来事が起きた日を確定できることを嬉しく思います。それは 1909 年の『ミッショナリー・レヴュー』６月号に載っていた「ジョン・スキューダー博士とその末裔」の話を読んでいる時でした。これは７人の息子たちの話で、彼らは全員インドの宣教師となるのですが、その話の中にはサミュエルという息子の亡くなった日にちについても書かれてあります。このサミュエルもいずれ宣教活動に出るために準備をしながら勉強を続けていたところでした。彼は 1846 年 11 月 16 日に亡くなりました。私が宣教師になるという召命を個人的に最初に受けたのは、『クリスチャン・インテリジェンサー』に載っていたサミュエル・スキューダーの死亡記事を読んでいる時でした。私の考えでは、その死亡記事はマンシアス・H・ハットン博士（現在の米国改革教会伝道局局長であるマンシアス・H・

ハットン博士の父）によって書かれたものと思われます。 その記事は「一体誰が彼の意思を継ぐのであろうか？」と締めくくられていました。私の心は、全ての思いをこめて激しく応えました、「私です、主よ、私が受け継ぎます」。 私は宣教についてはギュツラフの中国伝道の話を『クリスチャン・インテリジェンサー』で読んで以来、早い時期から関心を持っていました。私は弟のジョンと共に、誕生以来母によって与えられていた大義（母はそのことを特に公言はしてきませんでしたが）に身をささげるものと思い込んでいました。母はかつてヒンズー教徒に伝道した初期の宣教師ジェイン・ホチキスについて語ったことがあり、そのことから母の気持ちを推測していました。この宣教師は母の友達で、一緒にインドに行こうと熱心に誘った人でした。しかし母は彼女に「いいえ、私は結婚するわ。そして宣教師を育てるの」と答えたのです。母の予言は実現し一時に４人もの子どもが日本に来日しました。みんなが力を合われば、外国人宣教師の一世紀分の活動を凌駕するほどです。私は明の星宣教団に対する最初の出資者でもあり、ボストンにあるアメリカン・ボードにも給料の 10 分の１を毎月献金していました。サミュエル・スキューダーの後継者となるという私の召命が実現するのは数年後、ニューヨーク州ハーヴァーストローにおいてでした。ここで、私は神にささげられた人である宣教師のアマサ ·S・フリーマンの集会に参加しました。この頃の私はアメリカ・トラクト協会の発行するトラクトや本、例えばリー・リッチモンドの『貧者の１年』などを買っては啓発されるという日々でした。その時私は、インド・マドラスの宣教師ジョン・スキューダー医学博士によるトラクト『働き手の不足による収穫の消滅』に心囚われました。私は、この人物はサミュエル・スキューダーの父に違いないと気付き、さっそくそのトラクトを買って読んでみました。私は強い衝撃を受け、当時、私は自分にとって最初であり敬愛する雇い主から、共同で事業をしようと誘われていたのですが、ビジネス・マンとして成功するという計画はあきらめなくてはならなくなりまし

た。私は事業への思いを断ち切り、私自身を神に仕える宣教師として差し出さねばならないと感じました。これはある夜、乾物の箱を貯蔵しておく小屋で本当に起きたことで、私はスキューダー博士の本のカバーに自分の決意を書きとめました。この時は、大学教育を受けて福音を伝える使者になるべきかどうか、まだよく分かりませんでした。私はただ、死にかけた異教徒たちを救うために働きたいと考えていました。でも、どのようにすればよいかは、全く分からなかったのです。私はフリーマン博士の牧会するハーヴァーストローの長老中央教会に集うことで、この決意を実現する最初の一歩を踏み出すことができました。その数ヶ月後、私は教会籍をコルネリウス・ブロヴェルトが牧するスクラーレンバーグの改革教会に移し、ニュージャージー州ニュー・ダーラムに住むW.V.V. マーボン博士のお世話で、大学に入る準備ができました。私がラトガース大学に入学したのが 1853 年[4] で卒業は 1857 年です。ニューブランズウィック神学校を卒業したのは 1860 年でした。同じ年に私は、愛する級友レナード・W・キップとアモイ宣教師としての任命を受けました。しかしあるきっかけにより、それが神意によることは明らかですが、派遣が 1 年ほど延期されることにはなったものの、私の予定されていた派遣先は中国から日本へと変更になったのです。この話は、とても自然な形で進んでいきました。私はこのことが神の摂理によるものと信じています。大学の課程に在学している間、まだ日本に宣教師が送られるずっと以前のこと、私はタルボット・M・ワッツ医学博士の書いた、日本人の歴史に関する小さな本[5]を読みました。この本を読み終わって、「この国が、私の学びが終わった頃に開国してくれたら素敵ではないか！」と思いました。この時、私の願いは明確な表現によって明らかになったのです。そして数年後、なんと驚いたことにニューヨークにある我々のボードから日本への宣教師募集があったのでした。ボードからの呼びかけは東洋にいた 3 人の違う教派の宣教師たちからの要望によるもので、彼らはかつて長崎にいたオランダ代表団の記録を読んで、オラ

ンダ［改革］教会に、日本にミッションを作るよう呼びかけたのです。この呼びかけに教派として応えることとなり、特に私の神学校のクラスのうち何人かが強くこの話に心をかきたてられました。我々は自発的に関わる準備はできていました。しかし、まだ学科課程の中途にいたために私たちは待ちました。一方で、宣教師になる求めは最も満足のいく形でブラウン、フルベッキ、シモンズの諸氏が応じることになりました。ブラウン博士が日本への出発直前に神学校を訪れて学生たちに講演した際、私は率直に私たちも既に身をささげる準備ができていると伝えました。彼は「失望する必要はない。私はあなたに場所を提供するつもりだ」と答えました。今となってはミッションが十分に整えられて結局は実現したのですが、この時の博士の答えは、親切にも私の希望が［すぐに］実現する望みは少ししかなかったことを示していました。延期される時期が延びるほど、日本への思いは強くなっていきました。私が中国をためらう要因は２つあります。１つは、中国語の発音を聞き分けるだけの音楽的な才能がなかったこと、２つ目は、暑い気候に耐えられなかったことです。これらの困難が日本へ行く上でも立ちふさがりました。しかし、これらが決め手ではなかったのです。何故だか私にもよく分かりません。私の最も親しくしていた友人はその時中国にいました。しかし私は日本に行きたいと言う願いを抱きました。決断に達したのは 1861 年の新年になる前のことでした。いつも惜しみなく私へ援助をくださるハーヴァーストローのフリーマン博士を訪ねた際、博士の励ましによって益々宣教の地へ行く思いが強められたので、ニューヨークの局長を訪ね、もし私を宣教師として派遣していただけるのであれば、来年行かせてほしいと伝えました。局長は、私の要求はかなえられるだろうと述べて私を安心させました。その後私はキップ兄のところへ出発の見込みについて相談しに行ったのですが、その夜のうちに家に帰ることができなくなってしまいました。翌日家に帰る時に、私はフェリーで局長に出会ったのですが、彼は嬉しそうな顔をして、私にニュースがあると言いな

がら迎え入れました。何のことかと尋ねると、「あなたは日本に変更になったよ！」と答えたのです。私はほとんど気を失いそうになりましたが、どうにか言いました「私が心配していたせいで、そう決まったのでなければいいのですが」。彼は「いやいや、全く関係ないよ」、そう答えながら列車に急いで乗り込みました。私は深く瞑想しつつ家に帰ったのですが、私は全くこの事実を理解することができませんでした。母にこの話をしたら、母は残念そうな様子をしました。何故なら、私の友人は全て中国にいて日本には誰１人いなかったからです。私は答えました「ねえ、お母さん、僕は友達のために宣教に行くんじゃないよ。それが目的なら、僕は出かけない。僕は自分が何か成し遂げることのできる場所に行きたいんだ」。私の反応を聞いて、母は反論するのを控えたように見えました。私は急いで自分の部屋に入り、聖書を開きました。すると、使徒言行録 26 章 17 節から 18 節「わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのもとに遣わす。それは、彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち帰らせ、こうして彼らがわたしへの信仰によって、罪の赦しを得、聖なる者とされた人々と共に恵みの分け前にあずかるようになるためである」という箇所が私の目に入ってきました。迫害を続けるサウロに現れてご自身の指令（イザヤ 43 章６～７節）をお与えになったように、私も同じように命じられたのですが、私はその主をどうして疑うことができましょうか。私は頭を下げて、感謝を持って主を崇めました。

そして今、約 50 年がたって、この記録を書いていることが不思議に思えないでしょうか？あぁ、私は心から謙遜したいと思います！任務は不十分にしかなしえませんでした。主が私に示してくださった高貴な特権と助けをくださる保証に対して、どれほど私は不相応な者だったでしょう！私はキリストの計り知れない富の不信仰な管理人でした。私は数人の魂に福音を述べ伝えてきましたが、私には栄光も何もありません。何か成功したことがあったとすれば、それは神を信じる人たちや仕える

人たちの祈りと希望と期待に主が応えてくださった恵みに他なりません。私は、自分を楽しませてくれた高貴な望みを考えてみる時、謙虚な気持ちになります。というのも、その望みを私に抱かせたのは、大学や神学校の教授たち、本土や宣教地にいる聖職者の仲間たち、選ばれた女性宣教師たちの心でした。なんという軍勢なのでしょう！それは日本人も外国人もいます！逆に、私はなんて不相応で深く恩義を負わされた者なのでしょう！主よ、全てを理解することはできないのですが、あなたはどうしてそんなにまで恵み深く忍耐と愛を示されるのですか？あなたの忠実なしもべであるパウロが、自分自身の魂に対して、更には高きも低きも全ての人類に対して投げかけられた呪いの言葉「主を愛さない者は、神から見捨てられるがいい。マラナ･タ（主よ、来てください）」[(6)]を私が受け入れることができますように。ある有能な牧師、私はその人と一緒に数年間住んだことがあるのですが、ジェームス・ローメイン牧師が亡くなる際にこんな約束をしてくれました。「もしも死んだ者の魂が生きている人と共にいることが許されるのなら、私はあなたを守る天使になりましょう」。私はこの約束を忘れたことがありません。そして、私はいつもハッケンサックにある彼の墓を訪れては、彼が示してくれた信仰と、手本となる姿を神に感謝するのです。彼の墓石には、彼の最後の説教からの引用である「30 年も私は神聖な神の福音を語ることが許されてきました。それで十分です！それで十分です！」という言葉が刻まれています。

即座に［日本へ］出発しなければいけなかったため、急いで私はヴァージニア州を訪れて親族や友人たちにお別れをしました。そこで、私はある若いヴァージニアの少女とロマンティックな出会いをすることになりました。それが数ヶ月後に私の妻になる人です[(7)]。２週間後の 1861 年６月１日、私たちは上海へ向けて、「キャセイ」という優れた船に乗って出航しました。航海、到着、その後数年間に起こった様々な出来事については、私の妻が書いた『古き日本の瞥見』に書かれています。こ

の本では日本で最初のプロテスタント信者となった矢野隆[8]の洗礼についても触れられています。日本で最初のキリスト教会が組織されたのは1872年3月10日ですが、土地の取得及びその場所に会堂を建築したことと同様、この件については既に多く語られていることですので、ここではこれ以上触れません。

現時点においては、1点のみを強調するのが重要です。つまり日本基督一致教会を作るための諸教派協力の起源及び目的はここにあったのです。このことを強調したのは、[超数派による一致協力という] 誠実 [な行い] を時代を超えて貫いていくことが重要だからであり、最近言い出されたことでも、日本だけに限られた話でもありません。共通した教会を立て上げるためにミッションが協力することは、私の知る限りにおいてですが、中国のアモイにおける2つのミッションの調和のとれた行動に端を発しています。その2つのミッションとは、アメリカ改革教会と英国長老教会のことで、2つは同じ地域にありました。最初から、この2つのミッションは別々の教会に集まってはいましたが、「大会」と呼ばれる共同の集会において1つになりました。宣教師は教会のメンバーではありませんが、長老会の顧問として、彼らと同じ権限を持って参加していました。

あるミッション・ボードは、宣教師たちをそれぞれの教会ごとに分断し、本土の教会籍に登録しようと強いてきました。しかしながら、宣教師たちはこれらの指図を実行することを拒み、登録も拒否しました。このことから、賢明にも、これらの指図を実行するかどうかは宣教師の裁量に任せるべきだと決められたのでした。この中国における [宣教] 協力に関する例は、日本でも同じことを示唆しています。[オランダ] 改革教会のメンバーと米国長老教会のメンバーは共に、長老制の形態による1つの日本教会を作るべきだということに同意しました。この同意は初めからずっと続いてきました。いくつかの教会や1つの長老会がこの計画の下で組織された後に、あるミッション・ボードがこの同意を破棄

して、日本の教会の一部を本土のボードに属す教会と登録しようとしました。しばらくの間は、実際教派ごとに分断されている状態でしたが、この動きに疑問を持っていたミッションのメンバーの多くによって考え直されて、新たに合同した教会はしばらくの間、日本基督一致教会と呼ばれました。他のミッションも、次々とこの合同に加わり、本国の７教会を代表するミッションが宣教師協議会として協力しあい、日本に１つの基督教会を立ち上げるために共に働いています。日本に強力な１つの教会を立て上げるための合同は、他の関連あるミッションに彼ら自身の信仰とその他の者たちの信仰による教会を作るための連合組織を形成する方向へと促しました。監督教会、メソジスト、組合派、バプテストといった様々なミッションが、日本でそれぞれ彼ら独自の組織として立ち上がってきました。このような活動の合同や連合の結果として、５つのプロテスタント団体がこの国の全てのプロテスタント教会を包含するのに十分であることが望まれます。仕事の分割や職務の効率性から見て、この数は「神の右手の５本指」と適切に呼ばれています。より崇高で完璧な統合が、宣教師たちや日本における最初のキリストの体に連なる人々によって最初のうちから熟慮され熱烈に求められていたことは否定できません。その実現は、いかなる信仰の本質を曲げることなく、また教会機構を変更することなく、実現可能であると信じられてきました。その望みは現在に至るまで実現が遅れましたが、聖霊の大々的な出現とキリストが人格を持ってに現れたことにより、確実に実現することになったのです。キリストは「すべてのものの頭として教会に与えられました。教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場所です」[(9)]。「主なるわたしは、時が来れば速やかに行う」（イザヤ 60 章 22 節）。

訳注

（1）貧しい境遇だったJ.H.バラは、10代の頃から店などで働きつつ既に学校に通った。当時の雇い主はJ･ウェスレー･テン･アイク。詳しくは井上平三郎『濱のともしび』キリスト新聞社、1983年、61～62頁参照。

（2）井上平三郎『濱のともしび』62頁では、同書と思われる*Baxter's Call*という本が『バクスターの召命』と訳されている。しかし、この回想録では書名が*Baxter's Call to the Unconveted*となっている。残念ながら訳者はこの原書について未見であるが、前後の文脈から推察すると「召命」と訳すよりも、「回心していない人への呼びかけ」と解釈する方が自然と思われるので、今回はこのように訳した。

（3）ローマの信徒への手紙7章7節

（4）原文では1853年となっているが、1852年の誤り。 井上平三郎『濱のともしび』67頁。中島耕二・辻直人・大西晴樹『長老・改革教会来日宣教師事典』新教出版社、2003年、199頁。

（5）井上平三郎『濱のともしび』70頁によれば、同書は『日本のスケッチ』という題であったとされる。

（6）コリントの信徒への手紙一16章22節

（7）すなわち、マーガレット・テイト・キニアのこと。

（8）本名は矢野元隆（もとたか)。日本初のプロテスタント信者。玄隆または隆山とも呼ばれる。この回想録によれば､バラ自身は彼のことを矢野隆（りゅう）と呼んでいたようだ。亡くなる1月前の1865年11月に、ヘボン立会いのもとバラより受洗した。

（9）エフェソの信徒への手紙1章22節～23節

あとがき

本書は宣教師ジェームス・L・アメルマンによるアメリカ・オランダ改革教会の日本宣教報告『日本宣教の概観』（*Sketch of the Japan Mission*）と、1909年に軽井沢で開かれた宣教師協議会での講演をもとに編集された『宣教師小伝』（*Biographical Sketches*）の翻訳である。

アメルマンの宣教報告『日本宣教の概観』は、恐らく本邦初の翻訳である。これは本土の教会に向けて日本の宣教状況を報告し、更なる献金や援助を要請するための文書と考えられる。同じ内容でオランダ語による *Schets der Japan-Zending* も存在する。恐らくオランダ改革教会には、オランダ移民で英語が不自由な教会員もいたのであろう。彼らにも日本の現状を理解してもらうために、このようなオランダ語版も出されたと推測できる。なおオランダ語版は、アルバータス・ピータース（A. Pieters）による翻訳である。

個人的な話だが、この史料との出会いについて記しておきたい。この史料のことは、私が中島耕二氏、大西晴樹氏と『長老・改革教会来日宣教師事典』（新教出版社、2003年）を刊行するための準備をしている時に、調査によって存在を知った。同書で私はオランダ改革教会宣教師たちの小伝を担当し、アメルマンもその中の１人だった。アメルマンは日本の神学教育や教会及び明治学院の発展において重要な人物の１人であるにも関わらず、研究自体がほとんどない。彼の著作については井深梶之助によって多数翻訳されてはいるものの、それらは全て東京一致神学校時代か明治学院神学部時代に書かれた神学教科書で、それ以外の著作は全く注目されてこなかった。この史料はアメルマンにしてみれば神学書以外の珍しい著作であったので、私は是非一度目にしてみたいと長らく思っていた。しかし、日本で唯一所蔵している同志社大学人文科学研究所

に問い合わせてみたものの、史料が古い上に装丁がしっかりしていないという理由で館外貸出しができない状態だった。あいにく、当時は京都に史料を見に行く時間も作れなかったために、結局『宣教師事典』はこの史料を未見のまま書くことになったのである。

そんな心残りをいつかは果たそうと思い続け、遂に2005年、歴史資料館の史料調査旅行で播本館長（当時）、職員の原さんと３人で京都に行くチャンスがめぐってきた。私たちは同志社大学を訪れて、念願の史料を直に見る機会に恵まれたのだ。書庫の奥から史料を出していただいた時は、遂に宝を見付けたかのような気分になった。

出てきた史料は、聞いていたとおり装丁が弱く慎重に扱わなくてはならないために、コピーはできないとのことだった。その時は、史料を撮影できるようなデジカメも持ち合わせていなかった。でも、せっかく目の前に出てきた史料を逃すわけにはいかないと「歴史家」根性に火がつき、原さんにも手伝ってもらって史料を手で書き写していくことにした。20頁ほどの小さな本ではあるが、流石に書き写すとなると２人がかりでもかなり時間がかかる。大の大人が２人で一生懸命にノートに史料を書き写している様子を見るに見かねてか、司書の方が、特殊な複写機（上から史料を写して撮影するタイプの複写機）を使って全頁コピーしてよいと許可してくださった。この時の措置に対して、改めて同志社大学人文科学研究所に謝辞を申し述べたい。

こうしてようやく私たちはこの史料を手にすることができたのである。今でも、史料を途中まで手書きしたノートが手許に残っているが、それを見るたびに、あの時の苦労が昨日のことのように思い出される。その時以来、いずれこの貴重な史料を翻訳し発表しようという話が持ち上がっていた。しかし、翻訳作業というものは中々の曲者で、始めてみてもうまい具合に進まず、予想以上の時間がかかってしまった。今回、こうして長年の念願をようやく果たすことができ、胸をなでおろしている。

アメルマンの『日本宣教の概観』は表紙や本文末にもあるように、1889（明治22）年にニューヨークのアメリカ改革教会海外伝道局が出版したものである。当時アメルマンは来日13年目で、明治学院神学部教授を務めていた。この史料では、アメリカ改革教会の立場から見た日本の宣教状況や宣教協力の様子が描かれており、当時の宣教師が担っていた宣教、教育、翻訳出版といった活動領域と内容を確認することができる。内容としては、宣教師たちが直面していた宣教の難しさを想像させる内容も含まれているものの、全体を通して希望的な論調が目に付く。本土への支援要請のためという理由を考えれば、当然のことであろう。例えば、人数や教会数を具体的に示して活動の順調な成長を強調している点や、日本人信徒や牧師たちとの協力が功を奏していると説明している点などを挙げて、日本での宣教活動の様子を前向きに描こうとしている特徴があると言える。活動が全国展開していくことに伴う困難（長崎や盛岡の活動が全体の動きから独立して地域限定の活動に変化していく様子など）も触れられてはいるが、それも活動の拡大に伴う人材不足といった、嬉しい悲鳴のように聞こえる。

また、米国改革教会の立場として特に強調されているのは、教派合同に関する記述であろう。これは後述の『宣教師小伝』でも触れられている話だが、教派を超えた一致教会を作っていくのは改革教会の念願であり、組合教会との合同も積極的に推し進めていた様子が伺える。

このように、全体的に積極的な評価で語られている点は多少差し引いて考えなければならないが、オランダ改革教会の活動を広く概観している叙述は、同教会の初期活動を研究する上では今後欠かせない史料であることは間違いない。

明治学院の創設期の記事も貴重な内容となっている。当初は邦語神学部の他に英語による教授を行っていた課程があったが、それを３年経って検討した結果後者を廃止した点など、当事者でしか分からない内容が含まれている。

もう１冊の『宣教師小伝』は、ちょうど100年前の1909年に、軽井沢で開かれた宣教師協議会の席上で開かれた講演を基にしてまとめられたもので、フルベッキ、S.R.ブラウン、ヘボンといった先人たちの業績を回顧した人物伝と、J.H.バラ自身が自らの宣教師人生を振り返った回想の４つの話で構成されている。これらの小伝は既に先行研究でもたびたび紹介されてはきたものの、部分的にしか扱われてこなかった。今回は全文を紹介しているので、改めて各宣教師の生涯や働きに対して、新たな面を見出せるのではないかと思う。

どうしてもこの手の回想録は、先人のことを顕彰する目的が強い点は否定できない。しかし、宣教師協議会という超教派の集会で、特に教派の垣根をなくそうとしていた長老・改革教会の宣教師たちが、先人の功績を肯定的に受け止めて今後の活動に弾みをつけたいという思いも強かったであろう。また、近くで共に行動を一にしていた者だからこそ語れる事柄も多く含まれており、通常は知りえないようなエピソードや、それを通して見えてくる人柄に触れることができるのは、同時代の人物による回想ならではの魅力がある。つまり、これらの小伝は血の通った生身の宣教師像を浮かび上がらせ、人間的な理解を促すことにもなるので、この点で貴重と言える。

フルベッキの小伝では、後半部分でワイコフが先輩宣教師との私的な交流を通じて感じたことを語っている。家族の話を紹介しているくだりは、公的な宣教師としての、あるいはお雇い教師の立場を離れて１人の父親としての姿が描かれていて、人間味を感じさせるエピソードである。

トーマス・C・ウィンによるS.R.ブラウン伝にも、自分の叔父について、近親者だからこそ語れる記述が多数見受けられる。ウィンによるブラウン伝は既に中沢正七編『日本の使徒　トマス・ウィン伝』（長崎書店、1932年）にも部分的に紹介されているが、全文を読んでみると、改めて叔父から受けた影響が如何に大きいかが分かる。

ウィンは日本では主として石川県金沢市を中心に伝道活動を展開し、1883（明治 16）年に男子のための愛真学校を、翌 84 年に金沢教会を設立した。また、女子教育の必要性を感じて女性宣教師ヘッセルを大阪から呼び寄せ、金沢女学校（現・北陸学院、1885 年設立）を作る道筋を作った。『東京一致英和学校規則』（1884 年）には、同校のための予備校を「（東京）府下神田区淡路町」と「石川県下加州金沢高岡町」の二箇所設置すると記載されている。すなわち前者は神田予備校で、後者が愛真学校である。つまり、明治学院に入学するための予備校の 1 つとして愛真学校が位置付いていた。1885 年に愛真学校から北陸英和学校と改称した後も、明治学院神学部へ進学し牧師になった者もいる。このような両校のつながりは、同じ長老教会ミッションであることは勿論だが、宣教師同士のネットワークも協議会等を通して機能していたことを示していると言えよう。

ヘボン伝は、後輩宣教師タムソンが実際に来日して近くで直接接した経験を織り交ぜながら綴られたもので、仲間だからこそ語れる内容を含んでいる。一漁村だった横浜が段々と発展していく様子が視覚的に綴られている部分は、実に興味深い。そのような急速な発展の中にあって、ヘボンがじっくりと腰をすえて、キリストから委ねられた使命を全うしようと忠実に歩んでいた様子や日常の姿が描かれている部分などは、本人に肉迫していくようである。

一方、ジェームス・H・バラの「回想」は、聖書の使徒たちを引き合いに出しながら、自分の半生を振り返っている点でまた興味深い。特に青年時代にキリストとの個人的出会いを経験し、宣教師への熱意を掻き立てられた様子が、バラ特有の感情のこもった表現で綴られている。今のような交流も情報もない時代に敢えて宣教師として日本へ出向こうとするには、相当の覚悟と決心がなければならない。この回想では具体的な場面を紹介しながら、バラ自身の日本宣教への情熱が力強く語られているのが印象的である。

こうして4人の小伝を読んでみると、開国間もない頃に危険を承知でやってきて、人々の信頼を勝ち得ていった彼らの人となりや、まっすぐな信仰者としての姿にある種の共感さえ覚える。

アメルマンの著作はマクロの視点から宣教を概観するものであり、4人の小伝は個々人の宣教師の活動をミクロの視点から検討するもので、両者をお読みいただければ、当時の改革・長老教会にまつわる動きを広く深く理解することができるだろう。

横浜開港150年、ヘボン、ブラウンらによるプロテスタント宣教150年の節目の年にこのような資料集を刊行できて、本当にタイムリーだった。本書が、初期宣教師たちの働きを振り返るきっかけとなれば幸いである。不十分な点も多々あるかと思うが、お気づきの点があったらお知らせ願いたい。

今回の翻訳編集にあたり、歴史資料館の原豊さん、野田和志さん、小杉義信さんには大変お世話になった。資料館の皆さんの作業がなければ完成しなかったであろう。心から感謝申し上げる。また、翻訳作業中数多くの方から訳語に対するアドバイスをいただいた。 重ねて感謝したい。

なお、附録の*Sketch of Japan Mission*については同志社大学人文科学研究所より、*Biographical Sketches*については明治学院大学図書館より、それぞれ掲載の許可をいただいた。

2009年1月

雪の金沢にて

辻　直人

Sketch of the Japan Mission, by James Lansing Amerman.（復刻）

Biographical Sketches.（復刻）

凡例

1．この附録の底本は James Lansing Amerman, *Sketch of the Japan Mission*（同志社大学人文科学研究所所蔵）と *Biographical Sketches*（明治学院大学図書館所蔵）である。掲載に関しては両所蔵先より許可をいただいた。

2．内容は原文のまま収録したが、明らかな誤りは以下の通り。

【Sketch of Japan Mission】

92 ページ下から 9 行目　in the early days　→　In the early days

101 ページ上から 6 行目　Master System　→　Mastery System

【Biographical Sketches】

《Guido F. Verbeck》

108 ページ下から 11 行目　and and　→　and

110 ページ下から 4 行目　themasses　→　the masses

116 ページ上から 6 行目　Buntschli's　→　Bluntschli's

120 ページ上から 13 行目　wouldrather　→　would rather

《S. R. Brown》

138 ページ下から 1 行目　loneliness　→　loveliness

《 J. C. Hepburn》

140 ページ下から 15 行目　Mssion　→　Mission

141 ページ上から 8 行目　Yokohama, Here　→　Yokohama. Here

《Reminiscences》

151 ページ上から 17 行目　aud　→　and

156 ページ下から 12 行目　both Japanese and foreign!　→　Both Japanese and foreign!

157 ページ上から 6 行目　it is enough!　→　It is enough!

Board of Foreign Missions of the Reformed Church in America.

SKETCH

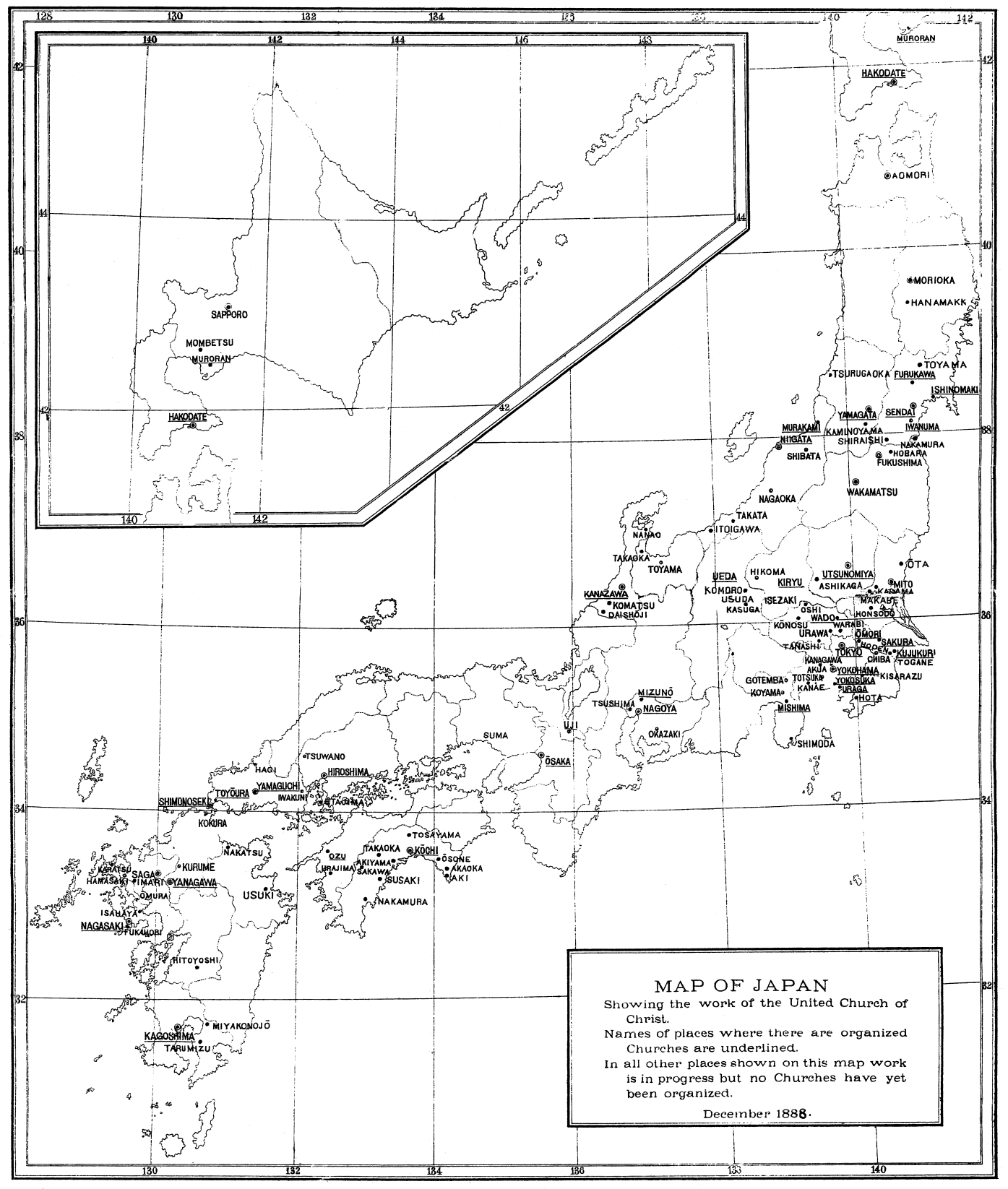
OF THE

JAPAN MISSION,

BY

J. L. AMERMAN, D. D.

NEW YORK
PUBLISHED BY THE BOARD.
1889.


MAP OF JAPAN
Showing the work of the United Church of Christ.
Names of places where there are organized Churches are underlined.
In all other places shown on this map work is in progress but no Churches have yet been organized.
December 1888.
SAPPORO
MOMBETSU
MURORAN
HAKODATE
MURORAN
HAKODATE
AOMORI
MORIOKA
HANAMAKK
TOYAMA
TSURUGAOKA
FURUKAWA
ISHINOMAKI
YAMAGATA
SENDAI
IWANUMA
MURAKAMI
NIIGATA
KAMINOYAMA
SHIRAISHI
NAKAMURA
HOBARA
SHIBATA
FUKUSHIMA
WAKAMATSU
NAGAOKA
TAKATA
ITOIGAWA
NANAO
TAKAOKA
TOYAMA
ŌTA
UEDA
HIKOMA
UTSUNOMIYA
KIRYU
ASHIKAGA
MITO
KOMORO
USUDA
ISEZAKI
MAEBASHI
KASUGA
OSHI
KANAZAWA
KOMATSU
DAISHŌJI
HONSODO
WADO
KŌNOSU
WARABI
URAWA
ŌMORI
SAKURA
TANASHI
TOKYO
KUJUKURI
KANAGAWA
CHIBA
TOGANE
AKUA
YOKOHAMA
GOTEMBA
TOTSUKA
YOKOSUKA
KISARAZU
KOYAMA
KANAE
URAGA
HOTA
MISHIMA
MIZUNŌ
TSUSHIMA
NAGOYA
UJI
OKAZAKI
SUMA
SHIMODA
ŌSAKA
TSUWANO
HAGI
HIROSHIMA
YAMAGUCHI
TOYŌURA
IWAKUNI
SHIMONOSEKI
TAGAMA
KOKURA
TOSAYAMA
NAKATSU
TAKAOKA
KŌCHI
ŌSONE
OZU
AKIYAMA
AKAOKA
KURUME
URAJIMA
SAKAWA
SAKI
KARATSU
SAGA
HAMASAKI
IMARI
YANAGAWA
SUSAKI
ŌMURA
USUKI
NAKAMURA
ISAHAYA
NAGASAKI
FUKUOKA
HITOYOSHI
MIYAKONOJŌ
KAGOSHIMA
TARUMIZU
128
130
132
134
136
138
140
142
144
146
148
42
40
38
36
34
32

JAPAN MISSION OF THE REFORMED CHURCH IN AMERICA

The right of foreigners to reside in Japan was secured by treaty in 1858. Measures were taken immediately by three American churches to establish mission stations in this Empire, and before the close of 1859 the missionaries of these churches had arrived. Of the Reformed Church missionaries Rev. Guido F. Verbeck, D. D., settled at Nagasaki, and Rev. Samuel R. Brown, D. D. and D. B. Simmons, M. D. settled at Kanagawa [Yokohama]. Dr. Simmons withdrew from the mission in the following year, and in 1861 Rev. James H. Ballagh settled at Kanagawa.

EARLY EXPERIENCES.

The opportunities for Christian teaching were few. The people were suspicious of foreigners; preaching was not allowed; Christianity was hated; and edicts of the government forbade the people's acceptance of it, imposing sanguinary penalties on all the subjects of the Empire who should disobey. Besides these things, the lack of knowledge of the language and habit of thought of the Japanese people was an effectual barrier to evangelistic effort. The principal objects of the first few years work, therefore, were the acquisition of the language and winning the confidence of the government and people in the religion and aims of the missionaries. During these first years there were dangers and difficulties unknown to later times, and the experiences of those then in the field were exceedingly trying. But the Lord was their helper, and not only delivered them out of

their trials but gave to them and to the home churches unmistakable indications of future possibilities in this part of His vineyard. From very early times individual inquirers were instructed in the Bible at the missionaries' houses, and when confidence was gradually established, and the severity of the operation of the government edicts began to be relaxed, small Bible classes were gathered. The first baptism was in 1864, and there were two in 1866. Dr. Verbeck, whose "History of Protestant Missions in Japan" was presented to the Missionary Conference at Osaka in 1883, speaks of this period as "the period of preparation and promise" and "with the exception of one joyful day of harvest near its close a time of learning and sowing."

BIBLE TRANSLATION.

Like other early missionaries those of the Reformed Church attempted something in the way of Bible translation, but very little of the results of this early work was published. It was difficult at that time to find Japanese who were willing to publish the Christian scriptures or even to assist in the work of their translation. In consequence of the attitude of the government towards Christianity, men could only undertake such work at the risk of liberty and perhaps of life.

In 1865-66 Dr. Brown prepared translations of some portions of the New Testament, but all his manuscripts perished in the fire which destroyed his house in 1867. In 1867 Mr. Ballagh shared with others the work of preparing a first draft of the gospel of Matthew. This was revised and published in 1873. In the meantime Dr. Brown had assisted in the revision of the Gospels of Mark and John which were published in 1872. After this time there was no difficulty in arranging for the publication of the Scriptures or of any other Christian books. The edicts against Christianity were removed from the notice boards, but otherwise the government did not

withdraw its proclamations; nevertheless it tacitly permitted the extension of Christianity and the publication of any books which were directed to this end.

Organized effort at Bible translation was begun by a Convention of Missionaries in 1872 when a committee was appointed to translate the New Testament. Dr. Brown gave himself almost entirely to the work of this committee for five years. Shortly before the work was completed he was obliged by failing health to cease his labors and return to America where he died in 1880. Dr. Verbeck left Nagasaki in 1869 and entered the service of the Japanese government. He rejoined the mission in 1879, and devoted himself largely to the work of the committee appointed by the Convention of missionaries in 1878 to translate the Old Testament and to have charge of the whole future work of Bible revision. The completion of the translation of the entire Bible was celebrated in February 1888.

THE FIRST CHRISTIAN CHURCH.

The way was prepared for the organization of the first Christian church by long and faithful labors with a few men who had been instructed individually or in classes. The event which immediately led to the organization was a series of prayer meetings. "In January 1872 the misssionaries at Yokohama and English speaking residents of all denominations united in the observance of the Week of Prayer. Some Japanese students connected with private classes taught by the missionaries were present through curiosity or through a desire to please their teachers, and some perhaps from a true interest in Christianity. It was concluded to read the Acts in course day after day, and that the Japanese present might take part intelligently in the service, the Scripture of the day was translated extemporaneously into their language. The meetings grew in interest and were continued from week to week until the end of February. After a week

or two the Japanese, for the first time in the history of the nation, were on their knees in a Christian prayer meeting entreating God with great emotion, with tears streaming down their faces, that He would give His Spirit to Japan as to the early church and to the people around the Apostles. These prayers were characterized by intense earnestness." [Address of Rev. J. M. Ferris, D. D., at the Mildmay Conference, October 1878. Proceedings of the Osaka Conference, page 52.] As a direct fruit of these prayer meetings a church was organized at Yokohama March 10, 1872. It consisted of nine young men who were baptized on that day and two men of middle age who had been baptized previously. The members chose for themselves the catholic name "The Church of Christ in Japan." This is the one day of joyful harvest referred to near the beginning of this sketch, the forerunner of many similar days experienced in the later history of Christian work in this land.

This church, now known as the Kaigan Church, has had a career of almost uninterrupted spiritual prosperity, and at the date of this writing [1889] numbers in its membership five hundred and eighty-three adults and thirty-eight children. It has contributed largely of its membership and means for the formation of other churches: maintains a mission work of its own; and has contributed during the past year for its own support and for benevolent work the equivalent of more than $1,000.00 United States gold.

Mr. Ballagh was the acting pastor of this church for several years and under his supervision and through his efforts it was provided with the first church building erected in Japan. This is of brick and seats nearly five hundred people. It was dedicated July 10, 1875. (The sum of $1,000, contributed by native Christians in the Sandwich Islands, was used in the erection of this building.)

THE UNITED CHURCH OF CHRIST.

From very early times it was earnestly desired that the separate missions although representing different church organizations should labor together for the establishment of one Japanese church, which should have no organic connection with any church in another land. The subject was fully discussed at the time of a convention in 1872, when steps were taken to secure similarity of organization in the churches that should be formed, in order to their union in one body when the proper time should come. It was not, however, until 1876 that definite action was taken resulting in the coming together of the missions of the churches of the Presbyterian order in one council. These missions were those of the Reformed Church in America, the Presbyterian Church in the United States of America [North], and the United Presbyterian Church of Scotland. The purposes of the union at that time were but two, viz., the fostering care of a Japanese church and the maintenance of a Theological school. In all other matters the missions continued their separate work.

The churches under the care of these missions took as their name "The United Church of Christ in Japan." The Doctrinal Standards were the Westminster Confession of Faith and Shorter Catechism, the Heidelberg Catechism, and the Canons of the Synod of Dort. The form of government was strictly Presbyterian. From the beginning the success of the union was assured. This is testified by the rapid growth of the church. At the date of the organization, October 3, 1877, there were eight churches and six hundred and twenty-three members. These were united in one Chu Kwai [Classis]. By 1881 the number of churches had increased so largely that the supervision of their work, the examination of candidates for licensure and ordination, and other ecclesiastical business, required more time and labor than one Chu

Kwai could conveniently give. Some of the churches also were situated at a great distance from the original center, and the time consumed in traveling made even the two stated sessions of the year a great burden. In this year therefore the original Chu Kwai was divided into three, and the Dai Kwai [Synod] already provided for in the Constitution was formed.

In 1885 the mission of the Presbyterian Church in the United States of America [South], and in 1886 that of the Reformed Church in the United States joined the Council. In 1886 two additional Chu Kwai were formed. It should be mentioned here that the Mission of the Women's Union Missionary Society although not represented in the Council of the United Missions, has co-operated with the United Church from the beginning, and has contributed by sympathy and labor not a little to its successful progress.

At the close of the last year the statistical tables showed one Dai Kwai; five Chu Kwai; sixty-one churches; 8,690 members, of whom 7,551 are adults; and contributions during the past year for church maintenance, missionary work, etc., which exceed $15,000 United States gold. A glance at the map will show how widely the churches are scattered through the country.

EVANGELISTIC WORK.

Systematic evangelistic work by our Mission was begun in 1875 with the assistance of Japanese Christians. The restrictions on foreign travel beyond the narrow limits defined in the treaties were a serious obstacle. But as opportunity offered the work was carried on. The measure of success and the rapidity of results differed greatly in different places, but there was some measure of success everywhere, and soon stations began to be established and churches organized in widely distant parts of the country.

Later the co-operating missions united a large part of

their evangelistic work under the direction of an Evangelistic Committee. This was chosen by the Council and included some of the missionaries and a number of Japanese ministers and elders. Some important parts of the work could not be brought under this Committee on account of their distance from Tokyo where the meetings of the Committee were held. This was the case with all that work which centered at Nagasaki. The Committee continued its work for two years, and made distinctly apparent the benefit of the association of the Japanese brethren with the missionaries in the direction and responsibility of the work, and thus prepared the way for a great advance in the development of the United Church.

This advance was made in 1886 when the Dai Kwai organized a Mission Board [Dendo Kyoku], and directed the appointment of Mission Committees [Dendo Iin] in the different Chu Kwai. Under the direction of these the evangelistic work of the church and a large part of that of the missions have been carried on to the present time. In the Board and in each Committee one-half the membership is foreign and one-half Japanese. The churches are urged to make their contributions to the Board monthly, and the missions connected with the Council supplement these contributions by the gift of three times the amount. The Board makes an annual appropriation to the Chu Kwai Mission Committees, payable in monthly installments, and these Committees direct the work each within its own bounds. This method has passed beyond the period of experiment. As rapidly as the contributions make it possible for the Committees to extend their labors the missions are passing their separate evangelistic work to their care. The Committees meet at stated times to receive reports from the ministers and evangelists in their employ, settle cases of difficulty, arrange for popular "Lecture Meetings," and

special gatherings for preaching, and devise ways and means for the more effective prosecution of their work. Among the evident advantages of this arrangement are these: The foreigners and Japanese work together on equal terms; the leaders in the work of the church understand and confide in one another more and more largely; the field is better understood; its wants are more easily and quickly met; the helpers are more thoroughly supervised than they could be by the foreign missionary alone; and the church is educated to the support and management of the work of evangelizing the Empire.

There is a portion of our mission's evangelistic work that has not been transferred to the care of this Mission Board and these Mission Committees, viz.: that in Ueda, Nagoya, Mishima, Hota and their vicinities. In all these places there are organized churches, and some of them present unusual difficulties. For both these reasons it has been thought best that they remain for the present under the supervision of the Mission. At Morioka, also, 360 miles north of Tokyo, a new station was opened in 1887, and Mr. Miller removed there last year to take charge of it. It will be seen, therefore, that while the church is encouraged and educated to care for evangelistic work as far as it has the power to do so, the scope of the mission's separate labors is in no way restricted.

EDUCATIONAL WORK AT YOKOHAMA AND TOKYO.

In the early days of Christian work in Japan the members of the mission were sometimes engaged in teaching in the government schools. Dr. Verbeck was so engaged at Nagasaki for several years, and on his removal to Tokyo was the government's trusted adviser in the organization of the Imperial University, of which he was the first Superintendent. Dr. Brown also taught in the government school at Niigata for a year, and after his return to Yokohama had a class of young men under his

care from which have come some of the most trusted ministers of the United Church, and some valued assistants of missionaries of other denominations. The care of this class was afterward shared by several members of the mission and it was removed to Tokyo in 1877 on the organization of the Union Theological School. During the following year an effort was made to carry on a boys' school at Yokohama but the Synod's Board could not supply the means for sustaining it and it failed. Professor Martin N. Wyckoff arrived in 1881 and organized a school known as the Sen Shi Gakko. This was well sustained and successful. It was removed to Tokyo two years later and united with the Tsukiji Dai Gakko of the American Presbyterian Mission, the two becoming the Union College.

On the union of the three missions in 1877 [see page 3] the Union Theological School had been organized. This was carried on for nine years by one representative from each of the three Missions.

THE MEIJI GAKUIN.

In 1886 the educational work of these missions was further unified by the organization of the institution known as the Meiji Gakuin; "Meiji" being the name of the era of the present Emperor and meaning "Enlightened Government," and "Gakuin" meaning "a hall of learning." In this institution the Union College became the Academic Department, and the Union Theological School the Japanese [*i. e.*, vernacular] Theological Department. A special department was added providing instruction through the medium of the English language in Theology and other special studies for the graduates of the Academic Department. Gathering wisdom from the experience of three years this plan has been recently modified, so that there are now but two departments in the Meiji Gakuin, viz.: the Academic and the Theological. The instruction in the Academic Department is for the

most part in English, and that in the Theological Department in either English or Japanese at the discretion of the several professors. A series of optional post-graduate courses has been provided for the graduates of the Academic Department to which the theological students, ministers residing in Tokyo, and others are to be admitted subject to suitable regulations.

The aim of the Meiji Gakuin is to provide for its students a thorough education under Christian influences, and especially to train young men for the Christian Ministry. Hebrew is not taught, and in Greek instruction has thus far been given only in the elements. Apart from these studies the curriculum of the Theological Department does not differ widely from that of our Theological Seminaries at home.

The general government is lodged in a Board of Directors composed of seven foreign and seven Japanese members. The immediate administration is under the direction of a Faculty which includes all the professors. These are appointed by the Board of Directors. Our mission is represented in this Faculty by Professors Wyckoff and Harris of the Academic Department, and Dr. Amerman of the Theological Department.

The building containing the class rooms of the Academic Department is the gift of Mrs. G. A. Sandham of New York City. A piece of property in the Foreign Concession has been donated by Rev. E. Rothesay Miller, and the proceeds of the sale of this will be used for the erection of a chapel.

The students for the current year are classified as follows:

Theological Department,		
Senior Class	4	
Middle Class	21	
Junior Class	17	
		42
Special Students		2

Academic Department,		
Senior Class	15	
Junior Class	18	
Sophomore Class . . .	36	
Freshman Class . . .	45	
Preparatory Class A . .	55	
B . .	22	
C . .	23	
	—	214
Total		258

Of this number 154 are Christians.

A plan for a training school for evangelists is in preparation. There are men who give promise of becoming successful evangelists who, by reason of age or some other disability, cannot pursue a full course of theological study. A two years' course of study and practical work will be provided for these men under the direction of the professors in the Theological Department and some of the Tokyo pastors.

THE FERRIS SEMINARY.

In 1870 Miss Mary E. Kidder began teaching at Yokohama with a class of four pupils, and soon after opened a girls' day school under the patronage of the governor of the port. Before the close of 1872 the number of pupils was twenty-two. A few of the pupils were converted and the school was on the whole satisfactory, but from a missionary point of view a thoroughly successful day-school seemed impossible. The parents of many of the pupils resided in the vicinity but a short time, and during this time the pupils were in the school only a portion of each day. There was little hope, therefore, that the impressions made would be lasting. A boarding school was needed. After some delay the lease of a lot of ground

on the Bluff at Yokohama was obtained in 1874 and a school building erected. Miss Kidder had been married in July 1873 to Rev. E. Rothesay Miller and thenceforward conducted the school with her husband's assistance. An interesting account of the early history of the school may be found in the "Manual of the Missions of the Reformed Church in America."

Mr. and Mrs. Miller, returning to America on furlough in 1879, resigned the care of the school which passed to Miss E. C. Witbeck. In 1881 Miss Witbeck returned to America and Rev. Eugene S. Booth, who had come from Nagasaki in search of health, undertook the care of the school at the request of the mission. Prior to 1881 the number of pupils in attendance at any one time had not exceeded forty, but the opportunity of broadening the influence of the school was presented in the rapidly growing desire among the Japanese people for the education of women, and the accommodations for pupils were increased by the enlargement of the building in 1882. The number of pupils soon exceeded a hundred. The desire for still further enlarging the work was placed before the Church at home by Mr. Booth during his visit to America in 1886, and funds were provided for the purchase of an adjoining lot and the erection of an additional building. This new building, Van Schaick Hall, is nearly completed. The school is thus provided with a much needed chapel, additional recitation rooms, and dormitory accommodations, and can soon receive about two hundred boarders. The grade of the school has been advanced beyond what was desirable in the former period of its history and is fully equal to that of any other girls' school under mission direction.

The members of the mission engaged in the Ferris Seminary are Rev. and Mrs. Eugene S. Booth, Miss M. Leila Winn, Miss Anna De F. Thompson, and Miss Mary Deyo.

The pupils are classified as follows:

Academic Department,		
Senior Class	1	
Junior Class	2	
	—	3
Grammar School Department,		
A Class	4	
B Class	4	
C Class	11	
D Class	29	
	—	48
Preparatory Department,		
Second year	35	
First year	35	
	—	70
Total		121

Of this number fifty-one are Christians.

EDUCATIONAL WORK AT NAGASAKI.

Rev. Henry Stout arrived at Nagasaki in 1869, just prior to Dr. Verbeck's removal to Tokyo, and for more than three years engaged in teaching in government schools. This work was relinquished as soon as it was thought that the time had come for direct mission work, and a boys' school was opened at the mission residence. The Bible was the principal text book and instruction in English was offered as an inducement for young men to attend. Mrs. Stout began a school for girls also at the mission residence in 1873. The pupils soon became so many that they could not be accommodated. An arrangement was therefore made by which both these schools were removed to the native town. In the course of a few weeks about fifty girls and thirty boys were in attendance. Difficulties soon arose, however, on account of the use of the Bible, and the Japanese patrons caused

the school to be closed. The work was resumed at the mission residence. Afterward, through the kindness of a Christian foreigner, a school-house was built on the mission property and the school was removed to it.

From this time until 1886 school work both for boys and girls was carried on amid alternations of hope and disappointment. Toward the end of 1875 it was arranged that Rev. Mr. Wolff should take charge of the boys' school, but after a few months he left the mission. In 1881 Rev. Mr. Booth opened a boys' school and Mr. Stout began to teach a theological class of four students. Two of these are now most effective ministers of the gospel. Mr. Booth's removal to Yokohama before the close of the year left all the work where it was before. In 1884 Rev. Mr. Harris took up the work, but he was transferred to Tokyo and it passed to the care of Rev. Mr. Demarest, who gave to it such time as he could spare from other duties.

THE WILLIAM H. STEELE, JR., MEMORIAL SCHOOL.

Meantime the Synod's Board had received from its president a gift for the establishment of the William H. Steele, Jr., Memorial School, and under the care of Rev. Albert Oltmans and Mrs. Oltmans, who arrived in 1886, the mission educational work for boys in Nagasaki began a career of prosperity which continues at the present time. In October 1886, there were nineteen students on the roll. Before the next summer vacation the number had increased to forty. A suitable location had already been chosen, and the erection of buildings for class rooms and dormitories begun. These were formally opened in the autumn of 1887. A gymnasium has since been added and is an attractive feature of the institution. There are two departments, a preparatory and an academic. The former comprises a two years' course and has at this time fifty-four students. The latter comprises a four years' course and has thirty-five students.

Twenty-five of the students are Christians. The school has proper accommodations for sixty boarders, but just now seventy find room by crowding.

Instruction is given in the Academic Department in English, Japanese, Chinese, Arithmetic, and some other common English branches, as Geography and Physiology. There is daily instruction in the Bible for all the students, and a weekly singing class. The theological classes are carried on with the assistance of a Japanese minister. There have been in all, from the beginning, thirteen students, four of whom have graduated. The number of students last year was six. Instruction is given in Theology, Sacred and Church History, the Bible, Homiletics and Singing. The course of study extends through three years. The theological classes and the William H. Steele, Jr., Memorial School are under one Faculty which includes Rev. Henry Stout, Rev. Albert Oltmans, Mr. H. V. S. Peeke, and several Japanese teachers.

THE JONATHAN STURGES SEMINARY.

The Misses Farrington were sent to Nagasaki in 1878 and began teaching a class of girls with the hope that it would be the nucleus of a school, but they were obliged by sickness to relinquish the work and returned to America the following year. As far as time and strength permitted, Mrs. Stout had before this been teaching such girls as she could gather about her, and now she again taught a small class, hoping that other ladies might be sent from home to revive the school. Several years elapsed before the expected reinforcements arrived, and then, on account of the necessity for studying the Japanese language, several years more passed before anything could be done beside the teaching of a small class. In 1887 the school building for the Jonathan Sturges Seminary was completed, and in September the school was opened with seven pupils. The first term closed in

December with seventeen in regular attendance. At the close of last year there were twenty-six pupils, of whom twenty were borders. Nine of these were Christians, and six others had requested baptism. Instruction is given in the common English branches, Japanese, Chinese, Music and Needlework. There are also Bible lessons daily. The school is in the care of Miss Mary E. Brokaw and Miss Rebecca L. Irvine.

WORK FOR WOMEN.

The ladies connected with the Ferris and Jonathan Sturges Seminaries do such work as time and opportunity allow in the families of the pupils. Miss Winn also goes every Saturday by steamer to Yokosuka, a few miles from Yokohama, and teaches the Bible to a large class composed mostly of the wives and daughters of naval officers. To make her work more effective she has recently begun among them a class in foreign cooking.

The wives of our missionaries are not idle. They too where possible have their Bible, Sewing and English classes, generally connected with some church or school in the cities where they reside. Women's work, however, as organized and provided for in the appropriations of the Board is for the most part confined to the Ferris Seminary at Yokohama and the Jonathan Sturges Seminary at Nagasaki.

PUBLICATIONS.

Various tracts have been prepared by members of the mission. Their number cannot be exactly ascertained. Some have served their purpose and have not been republished. Others are constantly used by Christian workers throughout the Empire. Some of these have had a circulation of from twenty to forty thousand copies. The mission has also been well represented in the Christian periodicals of Japan by sermons, magazine articles, and other contributions.

Beside these, and the books prepared by Dr. Verbeck while in the service of the government, the works published by the mission or by other publishing agencies for members of the mission are as follows:

By Dr. Brown, a work on "Colloquial Japanese" in 1863, and subsequently his "Master System" for the study of the Japanese language. Of the former there were two editions.

By Dr. Verbeck, a paper on "The Best Method of Acquiring the Japanese Language," and a "Synopsis of all the Conjugations of the Japanese Verbs."

"A Child's Catechism," under the supervision of Mr. Ballagh, three editions.

A translation of the "Heidelberg Catechism," the joint work of several members of the mission.

A translation of "Milk for Babes," and "The Gospel of Mark" in colloquial, under the supervision of Dr. Amerman.

By Mr. Miller, a translation of the "Liturgy of the Reformed Church in America."

By Mr. Stout, "A Manual of Sacred History," and "Church History" two volumes. These are for the most part translations of lectures by Rev S. M. Woodbridge, D. D.

A translation of Dr. Woodbridge's "Systematic Theology," under the supervision of Mr. Demarest.

By Dr. Amerman, "The Theology of the New Testament," based on the work of Dr. Van Oosterzee, two editions; "An Introduction to Systematic Theology;" "The Argument for the Being of God;" two editions, "The Attributes of God and the Trinity;" "The Decrees of God;" "The Creation of the Universe;" "Anthropology;" "Soteriology;" and a translation of Dr. Woodbridge's notes on "Church Government."

Since 1881 Mrs. Miller has edited and published the *Yorokobi no Otozure* [Glad Tidings], a monthly paper of

fourteen pages, and for several years also an illustrated leaflet. The monthly issue of these at this time is 3,300 copies of the paper, and 2,800 of the leaflet.

For several years past the mission has been represented on the Publishing Committee of the American Tract Society's Committee for East Japan by two of its members, who have done a large share of the Committee's work. The circulation of the publications of this Committee during the past year has been

Of books	4,283
Of tracts	171,774
The pages in these tracts number . .	1,565,481

A NEW MISSION.

What has been until this year the Nagasaki Station of the mission has been made a separate mission. The church has now therefore two distinct missions to sustain in Japan.

A PROPOSED UNION.

It is proposed to bring together into one the "United Church of Christ" and the Congregational churches in Japan. The matter has been before the people for two years, and the union is greatly desired. It will probably be consummated in a few weeks. We hope and pray for it. The chief benefits of this proposed union are two: co-operation instead of rivalry, one work instead of two, in all the important towns of the Empire; and larger and more effective plans for preaching the gospel to the whole people.

CONCLUSION.

The thirty years labor of the Japan Mission of the Reformed Church in America for Christ and His Church is but imperfectly indicated in this brief sketch. It is the lifetime of a generation, but what generation has witnessed such changes in any land as God has wrought here through this and other agencies? The bitter

hostility to Christianity has given way, Christ may be freely preached in every town and village, and the people are ready to listen. The dense darkness of ignorance is flying before the advance of civilization and the light of God's truth. The government which made death the penalty for conversion to the Christian faith has proclaimed perfect freedom for religious belief to all its subjects, and some of the publications mentioned above have been printed at the government press. Less than a score of years ago there was not a Christian church in the Empire. Now there are more than two hundred and fifty. And of these nearly a hundred are entirely self-supporting. The yearly increase in the membership is such that the church at large is counted as doubling itself every three years. On January 1, 1883, the whole number of professed adult believers was less than 4,400. During the one year 1888 alone the number of adults baptized was nearly 7,000, and the total membership at the close of that year [including children] was more than 25,000.

The work is not yet done. The population of Japan is 38,000,000. The dangers have not all been passed. The difficulties have not all been overcome, Those of twenty years ago have given place to others no less real and no less great. The prayers and gifts of the church at home are needed now as much as they ever were. We need more workers. In 1886 we asked for large reinforcements. They have not come. Shall we have them? Will the church, encouraged by God's blessings on past labors, strengthen our hands and hearts for labors yet to come?

The present work of the mission is threefold, evangelistic work, Christian education, and the publication of Christian books. Our prayer to the church is; Make us strong on these lines. Avoid the half-way support of any part of our work. Sustain thoroughly all you per-

mit us to undertake. We shall then labor with gladness in the hope that the end of this century will see foreign mission work in Japan completed, and the abundance of these islands turned unto the Lord. May the Lord cause this prayer to be answered and to his name shall be the praise.

TOKYO, JAPAN, April 26, 1889.

MISSIONARIES OF THE REFORMED CHURCH IN AMERICA SENT TO JAPAN.

	Joined the mission.	Retired.
Samuel R. Brown, D. D.,* and Mrs. Brown,	1859	1880
D. B. Simmons, M. D.,* and Mrs. Simmons,	1859	1860
Guido F. Verbeck, D. D., and Mrs Verbeck,	1859	
Rev. James H. Ballagh, and Mrs. Ballagh,	1861	
Rev. Henry Stout, and Mrs. Stout,	1869	
Miss Mary E. Kidder [Mrs. E. Rothesay Miller],	1869	
Rev. Charles H. H. Wolff, and Mrs. Wolff,	1871	1876
Miss S. K. M. Hequembourg,	1872	1874
Miss Emma C. Witbeck,	1874	1882
Rev. E. Rothesay Miller,	1875	
James L. Amerman, D. D., and Mrs. Amerman,	1876	
Miss Harriet L. Winn,	1878	1887
Miss Elizabeth F. Farrington,	1878	1879
Miss Mamie J. Farrington,	1878	1879
Rev. Eugene S. Booth, and Mrs. Booth,	1879	
Miss Carrie E. Ballagh,	1881	1885
Prof. Martin N. Wyckoff, and Mrs. Wyckoff,	1881	
Miss M. Leila Winn,	1882	
Rev. Nathan H. Demarest, and Mrs. Demarest,	1883	
Rev. Howard Harris, and Mrs. Harris,	1884	
Miss Mary E. Brokaw,	1884	
Miss Clara B. Richards,	1884	1885
Miss Anna H. Ballagh,	1884	1887
Rev. Albert Oltmans, and Mrs. Oltmans,	1886	
Miss Anna De F. Thompson,	1886	
Miss Rebecca L. Irvine,	1886	
Harman V. S. Peeke,	1888	
Miss Mary Deyo,	1888	

*Deceased.

BIOGRAPHICAL SKETCHES

Read at The Council of Missions

1909

I. GUIDO F. VERBECK
By Prof. M. N. Wyckoff, D. Sc.

II. S. R. BROWN
By Rev. T. C. Winn

III. J. C. HEPBURN
By Rev. David Thompson, D. D.

IV. "REMINISCENCES"
By Rev. J. H. Ballagh, D. D.

Rev. Guido Fridolin Verbeck, D. D.

BY PROF. M. N. WYCKOFF, SC. D.

Dear Friends: I count it a privilege to speak to you at this time of Dr. Verbeck — to recall him to the memory of those who knew him, and perhaps to add something to the interest of those of you who have only known about him. I realize my inability to tell fittingly of this dear friend who was so long the senior and the pride of our mission. There are others here who knew him longer than I, but they have other parts, and it is perhaps suitable for one not quite so near the end of a half century in Japan to tell of him to-day.

I first met Dr. Verbeck thirty-seven years ago, and it was as a guest in his home that I spent my first few days in Japan. He had already made a name and was then probably the most influential foreigner in this country, but there was nothing in his manner to suggest that he was aware of the fact. From that time I enjoyed a friendship that grew and strengthened with the increasing intercourse and intimacy that we had during the remaining twenty-five years of his life.

Guido Fridolin Verbeck was born on January 23rd, 1830, at Zeist in the Province of Utrecht, Holland. His father was a prominent man and at the time of Guido's birth and for many years afterward was burgomaster of Zeist. Guido's early education was received at the

Moravian Academy in his native town, and was afterwards supplemented by private study with the principal of the Polytechnical Institute at Utrecht.

The birthplace and early life of Dr. Verbeck afford a plain example of how God prepares, even to minute details, those whom He will use in his service. Though his parents were Lutherans, they for some reason attended the Moravian church and sent their son to the Moravian school. It was no doubt due to these early associations that he was so ready to hear the missionary call when it came; and though that call came in America, it came to *him*, because he had been born in *Holland*. I often heard him speak of those old days in the Moravian school, and to their influence he ascribed, as he wrote to others, "whatever of true missionary spirit I imbibed in youth and retained through life. I still hold in dear remembrance my early attendance at missionary meetings, and can vividly recall the deep impressions received in hearing missionary reports and addresses, among others especially those of Gutzlaff, the Apostle of China."

The kind of instruction too that he received at the Moravian school was the very best to give him the special fitness and ability which he afterward brought to the performance of the varied and difficult work that he had to do in Japan. A very important part of that instruction was the thorough study of German, French, English and Dutch, each language being taught by a native of the country to which it belonged. Thus the boy Guido grew up speaking and writing these four languages with about equal facility. Much of Dr. Verbeck's usefulness during the first twenty-five years of his life in Japan depended upon this thorough

2

knowledge of these four languages, all of which were at some time or other directly connected with his work. His mother-tongue (if we may use the term of one who had, as we have heard, four mother tongues), the Dutch, was the least indispensable, but even that was of very real service to him in the early years of his residence at Nagasaki in enabling him to make the acquaintance of scholarly men who knew Dutch and especially of physicians, who at that time had mostly received their medical instruction in the Dutch language and many of whom were among the most advanced men of the time. In his later service of the Japanese Government a large part of his regular work was the translation into Japanese of important German, French and English books and for this work the thorough linguistic training of the boy was the essential equipment of the man.

The year of his birth, 1830, was signalized by the construction of the first railway in Europe and marked the beginning of a new era in mechanical engineering. A few years later, when the time came for deciding upon a future profession for the boy Guido, a family council was called and and it was unanimously agreed that engineering was the "coming profession" and the one for which he should be trained.

Soon after completing his studies, in 1852, he came to America, where he worked at his profession for three years at Green Bay, Wisconsin, and one year in Arkansas. He was not however well satisfied, and feeling a call to preach the Gospel, he entered the Theological Seminary at Auburn, N. Y., in 1856 and graduated from that institution in 1859. It was at this time that the Board of Foreign Missions of our Church

was planning to establish a mission in Japan, having been urged to do so, because it was thought that the long continued relations of Japan with Holland would have opened special opportunities for missionaries of our Dutch Reformed Church. Dr. S. R. Brown had already volunteered to go and had been accepted, and it was thought important that one member of the mission should be a person who had been born in Holland and who was thoroughly familiar with the Dutch language. As there was no such man then available in our own seminary, inquiries were made elsewhere, and Mr. Verbeck was found in the graduating class at Auburn. He at once accepted the invitation to become a missionary of our Church to Japan. He was at graduation ordained by the Presbytery of Cayuga and on the following day transferred to the Classis of Cayuga. He was thus, as he used to remark, "for one night a Presbyterian minister."

In April, 1859, he was married to Miss Maria Manion of Philadelphia, and on May 7th they set sail from New York, arriving in Nagasaki on November 7th, just six months after their departure from New York. Great changes have been made in facilities for travel and in the condition of Japan itself since the day when Dr. Verbeck first set foot in Nagasaki.

Then, as now, the first business of the new missionary was the study of the language, but it was done under very different conditions. Telling of this in 1883, Dr. Verbeck said: "It is perhaps needless to say that the study of the language was in those early years a work very different from what it is now. It was largely a labor of exploration and discovery, unassisted by the many guides and helps the student of

to-day finds himself supplied with."

Now also there is no difficulty in finding opportunities of doing some form of direct missionary work. The real difficulty is to keep the new missionary from doing too much of it and thus interfering with his study of the language. But in those days the missionaries were regarded with suspicion and closely watched, so that at first their efforts were mostly confined to language study. In the History of Protestant Missions in Japan prepared for the Osaka Conference held in 1883, Dr. Verbeck quoted from a letter that he had written to Rev. Henry Stout many years before, as follows: "We found the natives not at all accessible touching religious matters. When such a subject was mooted in the presence of a Japanese, his hand would, almost involuntarily, be applied to his throat to indicate the extreme perilousness of such a topic. If on such an occasion more than one happened to be present, the natural shyness of these people became, if possible, still more apparent; for you will remember that there was then little confidence between man and man, chiefly owing to the abominable system of secret espionage, which we found in full swing, when we first arrived and, indeed, for several years after. It was evident that, before we could hope to do anything in our appropriate work, two things had to be accomplished: We had to *gain the general confidence of the people*, and we had to *master the native tongue*. As to the first, by the most knowing and suspicious we were regarded as persons who had come to seduce themasses of the people from their loyalty to the "God-country "and corrupt their morals generally. These gross misconceptions it was our duty to endeavor to dispel from their minds by invari-

able kindness and generosity, by showing them that we had come to do them good only and on all occasions of our intercourse with them, whether we met in friendship, on business, on duty, or otherwise. A very simple Christian duty, indeed. As to the other essential prerequisite a to successful work, the acquisition of the language, we were in many respects not favorably situated and our progress was correspondingly slow."

In summing up the results of the labours of missionaries up to 1872, he wrote : "The Protestant missionaries, as a body, had gained the confidence and respect of the people. That the people's minds had become liberalized, that their prejudices had been removed, and that their excessive timidity had given place to a desire to associate with foreigners, were results to the production of which many non-missionary factors had co-operated. But this gaining of the people's confidence was a consequence, under the blessing of God, of the patient labor, the Christian character and conduct, and teaching of the missionaries themselves. This too was the case, to a large extent, with reference to the measure of confidence and liberty which the Government has in later years accorded to Protestant missionaries in their labors among the people in town and country."

To this gaining the confidence of the people and especially of the Government, which he credited to the faithful missionaries of that first period, he himself contributed more than any other. We shall probably never know how much the implicit confidence reposed in him by all the officials who knew him had to do with inspiring confidence in the religion which he never for-

got to represent : but on the day of his funeral an intelligent Japanese Christian layman was heard to say, " To that man alone we are indebted for the religious liberty we enjoy to-day ; " and it is no secret that it was through his influence that the persecution of the Christians was stopped.

Even up till 1872, there was confessed hostility to Christianity and the " expulsion of the ' outside barbarians' was a favorite theme of ambitious patriots. " Of this he wrote : " It should be mentioned here that these bitter feelings were chiefly among the higher and official classes The common people in town and country hardly ever showed this animosity. The middle and lower classes regarded Christianity with fear rather than hatred. "

In spite of the difficulties that surrounded him, Dr. Verbeck soon after his arrival began to distribute copies of the scriptures, Martin's Evidences of Christianity and other religious books in Chinese, as these could be read by educated Japanese, and during his ten years' stay in Nagasaki he disposed of large numbers of them. An old doctor used to come, like Nicodemus at night, to talk and to get books for friends in all parts of the country. Once some priests from the Province of Higo came to get books at a time when Dr. Verbeck had none on hand. When they learned that four cases of books were on the way from China, they contracted to take the whole lot, and he was obliged to send on a new order at once. Probably many of these books were studied mainly for the purpose of opposing Christianity, but, whatever the motives of the purchasers, much seed was widely sown.

An old priest, also from Higo, came to him in

those early days, saying that he was himself too old to begin the study of Christianity, but asking that three of his pupils might be taught. These young priests kept up this study for about three years, reporting what they learned to the old priest. The latter used frequently to come to express his thanks, and on one occasion Dr. Verbeck said to him: "You have now heard much about Christianity from your young men and must be well informed about it. You ought to make a decision as to whether or not to accept it." The old man at once became restless and said it was very hard for him to decide, as he had studied so many religions that he was confused as to their merits; but that the young men would no doubt be able to come to a decision. After this attempt at a personal application he never came again.

About two years after Dr. Verbeck's arrival in Nagasaki, two young men came to him to study the Bible in English, and this was the small beginning from which arose his important relations to the Japanese Government in later years. After these young men had been studying with him about a year, they came one day in a state of great delight, bringing with them two black sucking-pigs as a thank-offering for his teaching. They said that they had surpassed all competitors in an examination before the Governor and had received the highest prizes. The success of these young men led the official to seek for Dr. Verbeck's services in the English school about to be opened in Nagasaki. At first he declined, but, being strongly urged, he consented to their request, subject to the approval of the Board of Foreign Missions. This approval was given, and for fourteen years he was in government

8

service, and self-supporting, though retaining his connection with the Board.

Through Murata, Wakasa no Kami, whose story as the first Protestant Christian in South Japan is well known, Dr. Verbeck became known at Saga, the capital of the Province of Hizen, and was often visited by men of that clan.

During the years immediately preceding the Restoration Dr. Verbeck received numerous visits from clansmen of Satsuma, Choshu, Tosa and other provinces, as they were then continually travelling back and forth via Nagasaki, engaged in discussing with one another what was eventually realized in 1868. Among these visitors, most of whom had never before met a foreigner, may be mentioned such men as Komatsu, the elder and younger Saigo, Soyejima and many others, who distinguished themselves in those critical times.

In 1866, the Daimyo of Hizen opened a school in Nagasaki, and it was arranged that Dr. Verbeck should teach in both this and the government school, going to each on alternate days. Among the pupils of the Hizen school were the present Prince Iwakura and his brother. The overthrow of the Shogunate and the restoration of the Imperial power did not much disturb the Nagasaki schools, as the transfer from one Government to the other did not stop the classes for even a day.

In March 1869, Dr. Verbeck removed to Tokyo and was for four years connected with the Kaiseijo, from which the present Imperial University has grown. He was superintendent of all matters relating to teachers and instruction in the foreign department of the school and was the medium for all relations between the for-

eign teachers and the Government. Besides the responsibility of keeping all this machinery moving satisfactorily (no slight task, for there were a score of foreign teachers, of four nationalities, most of them not professional teachers but men picked up in the ports), he was constantly called upon by Government officials, from the Premier down, for advice and explanation about all sorts of matters relating to foreign intercourse. In fact, as Dr. Griffis wrote to me a few weeks after Dr. Verbeck's death, "He stood to the new Government in place of the great corps of advisers which they afterwards assembled."

To meet all these varied demands, he was obliged to spend his evenings in hard reading and study. He once told me that he was a poor penman, because during his years of government service he was so busy reading and orally giving out the results of his reading to others that he had neither time nor occasion to write much. Of his reading habits his eldest son, Col. William Verbeck, says: "My father was an omnivorous reader with the wonderful faculty of remembering all he read. In referring to books read many years before, he could turn to the exact page of which he was in search, even associating the location on the page. He was a great believer in association of ideas in mnemonics, and a careful system of marks on the margin assisted him in both remembering and systematizing his vast stock of general information." In 1873 he ceased his connection with the Kaiseijo and was engaged first in the Dajokwan and afterwards in the Senate (Genroin) and the Nobles' School. The Dajokwan performed most of the duties that are now divided among the several Departments of State. Both there and in the

Senate his principal duties were those of a translator, and it was then that the polyglot training of his boyhood was invaluable. Among the most important of these translations, made in connection with Messrs. Mitsukuri, Kato, Hosokawa and others, are The Code Napoleon, Buntschli's Staatsrecht, forest laws, constitutions of various European countries and Two Thousand Legal Maxims with comments. Outside of his official duties he had opportunities of sending to one and another of the members of the Government brief memorials on education, religious liberty and other topics. His advice and influence were also felt in several important matters undertaken by the Government during these years. One of these memorials he himself considered to have been his most valuable service to the Government. It was the one that brought about the sending abroad in 1872 of the Embassy under Prince Iwakura. That this embassy was almost entirely the result of his memorial he was frequently assured by Prince Iwakura himself, who, though at first he hesitated, later came to consider it the most important forward step that Japan had made. On the day after Dr. Verbeck's death the editor of the *Japan Mail* wrote :—" Curiously enough, on the very night before he (Dr. Verbeck) died, the present Prime Minister and Count Okuma, little thinking that the subject of their conversation had only a few hours longer to live, reminded each other that in a memorial penned by him at the time of the Restoration he recommended the measure which probably contributed more than any other to promote the spread of liberal ideas in Japan, the despatch of publicists to Europe and America for the purpose of studying the civilization on which Japan

had so long turned her back."

During all the time of his government service Dr. Verbeck did direct missionary work as opportunity offered, and during the latter part of this period he was accustomed to preach at least once every Sunday and frequently two or more times. He therefore felt that, as there were open doors for direct missionary work and as the Government was so well supplied with specialists that his services were no longer so important as before, it was his duty to devote himself exclusively to the active work of a missionary. He rejoined his mission as an active member in 1879.

At this time the translation of the New Testament made by Drs. Hepburn, S. R. Brown, and Greene and their Japanese co-workers was about completed, but Dr. Verbeck was at once elected a member of the Revising Committee, and thus he had a share in the revision of a large part of the New Testament, as he had afterwards had in that of the whole of the Old Testament. All the work of translating the Old Testament was done under the auspices of the Permanent Committee on Bible Translation. Besides revision of the whole, Dr. Verbeck's special work, in which he took great delight, was the translation in connection with Rev. Mr. Matsuyama of the Psalms. All this work, though told almost in a sentence, represents the labor of several years; but it was by no means all that he did during those years. He considered Bible translation his chief work, but besides he gave much time to the revision of matter for publication by the Tract Society's Committee and preached and lectured constantly.

After the completion of the translation of the Bible,

he taught in the theological department of Meiji Gakuin more or less continually for about ten years, but he never enjoyed that work, and did it only when there was no other to take the place. The work that he most enjoyed and to which he rightly believed himself to be best adapted was lecturing and preaching. He was most admirably fitted for this kind of service both by his natural and acquired gifts as a speaker and his wonderful mastery of the Japanese language. During his later years he was in great demand both in Tokyo and elsewhere. When in Tokyo, he preached at least twice a week on an average and lectured almost as frequently, and he was never without invitations from various parts of the country, and from other missions than his own, urging him to come for tours of several weeks' duration. This was the kind of work in which he particularly delighted, and he was never happier than when preaching two or three times a day, for day after day, and tramping from one appointment to the next in the intervals between services.

His ability in speaking Japanese has been told so often that it is not necessary for me to speak of it, especially to this audience. As to his mastery of fine distinctions of speech, I was much impressed in a call that we made together on an old official friend about a year before his death. The gentleman was not at home and it was necessary to leave a short message. I had often heard Dr. Verbeck in both discourse and conversation, but I was never so much impressed with the difference between his Japanese and that of the rest of us as on that occasion. It was an ordinary message that I could have easily delivered and I had no difficulty in understanding and appreciating his delivery of

it, but it would have been utterly impossible for me to deliver it as he did. Several years ago a Japanese then in America wrote to the *New York Tribune*, "There are only three foreign missionaries who can speak Japanese well," and of several persons whom I heard comment on the statement all were agreed that Dr. Verbeck was one of the three, but none felt sure about either of the other two.

That Dr. Verbeck's services were appreciated by the Japanese Government was shown by its honoring him in 1877 with the Third Class Decoration of the Rising Sun, and again in 1891 by its action in granting him a special passport, which gave to him and his family the right to "travel, sojourn and reside in any part of the Empire in the same manner as subjects of the same." Again at his death, though many years had passed since he had been connected with the Government service, a company of soldiers was sent to escort his body to the grave, many officials, and His Majesty, the Emperor expressed his sympathy by a gift of five hundred *yen*.

But I must not close without a few words about this dear brother himself, apart from his public relations. Of his surpassing ability and the perfect trustworthiness which won for him the complete confidence of all with whom he had to do, though many of them were by nature and training suspicious men, the evidence has already been given; but a man might be possessed of all this and yet fall far short of the modest, loving and genial friend whom so many of us knew and loved. Though many were led to desire his acquaintance because of his fame, I am sure that all who knew him even fairly well thought of him less as the distinguished educator and missionary than as the kind-

hearted, friendly man. To all who knew him well, *he* was greater than his *fame*.

He was an exceedingly *modest* man, and his modesty was shown not by self-depreciation, for in that he never indulged, but an entire lack of reference to himself whenever such reference could properly be avoided. He knew that his work was well and faithfully done and never pretended that it was not, but he felt concerning it that he had done "only that which it was his duty to do." We could wish that he had said and written more of himself and his work, but, as he once wrote to Dr. Cobb, when giving an account of one of his long evangelistic tours, he "wouldrather *make* history than *write* it;" and we thank God for the important history that this servant was permitted to make.

One day in 1874 I was in the principal foreign bookstore in Yokohama, when Dr. Verbeck came in to make a purchase. For some reason, perhaps because he did not see clearly, he turned to a young man beside him and holding out a piece of Japanese paper money asked how much it was. The young man told him, and then, in the fullness of knowledge obtained during a week or ten days of sightseeing and shopping, proceeded to give other information, to which Dr. Verbeck listened with apparently the greatest interest. A few minutes later the bookseller and I thoroughly enjoyed the surprise of the young man, when he learned the name of the friendly gentleman to whom he had been so glibly giving information about Japan.

He was a *generous* man, both in his gifts and in his attitude towards the feelings and opinions of others. Where important truth or a principle was at stake, he

15

was immovable, but where there was room for difference of opinion, he was ever ready to yield to the voice of the majority. Of his giving we know little except that he was a generous giver, for he never told his left hand of the doings of the right. I have known of his gifts from those who received them, and once I caught him so nearly in the act that he could not conceal it. I called at his house and found him at the door talking with a young foreigner who was out of employment and unable to get any. It was a cold day and the young man had on only a single coat. I passed on into the house and a few minutes later Dr. Verbeck came in coatless and explained his condition by saying that he had taken advantage of the chance to "get rid of an old coat, as the man was too thinly clad."

He was a *loving* man. All his friends knew that, but it was his family who fully knew the depths of his loving heart. We were near neighbors during part of the time when his "children were about him", and I was impressed by the affectionate family life of that home. And yet that loving father, to whom his family meant more than to many men, willingly kept at the post of duty for more than ten years, though separated from all his family except his eldest daughter. Yet no one ever heard a murmur, though he was always pleased to tell of his absent ones, who were ever in his thoughts, as he was interested to hear of ours.

I can best give a picture of their pleasant family life in words of his son, Col. Verbeck, which were written to me a few weeks after the death of his father. He wrote: — "Those were happy days to me. My dear father made my childhood and boyhood days more happy and beautiful to remember than it is the lot of

many people to have. He was father, big brother and chum to us all. Shut off from the amusements and companionships of children in this country, our father was more to us than can be imagined. He was an ideal playmate. Athletic as he was, he could outrun and outjump us. He was a beautiful story teller, and he was charged with Dutch fairy tales and German Black Forest robber stories. As you undoubtedly remember, he had a beautiful baritone voice. He had such a sympathetic voice that we could not easily forget his songs. I even remember the lullabies that he sang to us in Nagasaki. He played chess and checkers with us and did everything to amuse and interest us, and in his play we always learned something. He had a great passion for scientific toys and always kept us loaded down with them. With him as our playmate our playtime was school, and our schooling under his tutelage was a liberal education. Knowing these things as you do, you can appreciate what we have lost in losing such a father."

The reference to robber stories recalls what Dr. Verbeck said to me one day a few months before his death, as we were passing the old building of the First National Bank in Tokyo. As some of you will remember, it was one of the oldest foreign style buildings in Tokyo and it had a tower on the roof and several peaks which made it a great contrast to any other building in the city. He said, "The children and I used to call that 'The Robbers' Castle,' and it was one of their favorite rides to come this way that they might see it."

He was a *genial* man. Though his busy life left little time for social matters, he was always fond of meeting his friends and enjoying their society. Those who thus met him were astonished at the wide range

of his gifts.Not only could he converse freely with most of them in the tongue " wherein they were born," but he was a musician of much excellence and was always ready, when called upon, to give pleasure by rendering a piece of music or singing a song. He had a strong sense of humor, and though he was neither a joker nor a punster, he had a keen appreciation of the odd and the ridiculous, and ability to relate his experiences and impressions with a rare flavor that made him a most delightful companion. Of his spiritual life and experience he did not talk much, but there was no difficulty in learning from his direct and simple prayers and from his daily life that the Spirit who led him was a very real and constant presence.

As to the manner of his departure, we can only feel thankful that he was taken "in the harness", without any failing powers or mental weakness to cast even the faintest shadow across the memory of the great life which he gave unreservedly to Japan. His oldest colleague, Rev. J. H. Ballagh, wrote of him, " His death was as simple and beautiful as his life. " In a letter that I received from Dr. Cobb, the Secretary of our Board of Foreign Missions, are these words : "The more I think of it, the greater the loss appears. Yet we could not expect to keep him always, and such a departure is ever so much better than protracted feebleness or suffering. It is the nearest to 'translation' that this poor world knows." As I read these words, immediately the words of Scripture concerning that first " translation " came into my mind, and I felt that they were most fitting to be said of dear Dr. Verbeck :

" He walked with God : and he was not; for God took him. "

18

Rev. S. R. Brown, D. D.

By Rev. T. C. Winn.

Dr. Schneder, in inviting me to write this paper, said: "Years ago you wrote a sketch of Dr. Brown for The Japan Evangelist, when I was editor. Now let me ask you for a similar service once more." His words recall the fact that I wrote such an article, but very little of what I wrote remains with me now, so that if I should repeat some things that were in that article, I hope I shall be pardoned. In the way of craving your indulgence, I would like to make another statement, viz., Dr. Brown was a very dear uncle to me and therefore the personal element is very apt to appear in what follows.* But I am sure those who knew Dr. Brown will overlook this. And I ask for the same forbearance on the part of all.

In the spring of 1858, my father moved from the state of Georgia to Illinois. As a boy of nearly seven years old, some incidents connected with that event remained in my memory. The next important thing that I remember was, that my mother went from our Illinois home to New York to say good-bye to her only brother who was starting to Japan, he having been the first Protestant missionary to receive appointment to Japan. That missionary was the subject of this sketch. On my mother's return, she brought

* I feel that this fact in a way unfits me for writing this paper.

back with her, her mother, Mrs. Phoebe Hinsdale Brown, the author of the hymn, "I love to steal a-while away," and other hymns of almost equal merit but not so well known. Mrs. Brown thereafter lived at the house next to ours, the home of Dr. Brown's youngest sister, until her death.

She was a woman with a heart of love and prayer for the world, long before she could do anything for the unevangelized nations. But when her son was thirteen days old, news reached her of the organization of the "American Board." Here was a way God had opened for the church to perform what she had been praying for! In her joy that there would hereafter be a way by which to send the Gospel to the heathen nations, she took her babe into her arms and dedicated him to God for preaching the Gospel as a foreign missionary. I think he did not dream of that act of dedication by this mother, till he had reached manhood. But I remember his words about himself to this effect: "From as early a time as I can remember, my feeling was that it would be my duty to get a college education and spend my life as a minister of the Gospel in some far away land. I never had any other desire or purpose for myself."

When it was my privilege to meet him for the first time, he had returned from Japan on furlough in 1867. He talked with me about my future. When he heard expressions of doubt from me as to what I ought to do, he spoke of his own youth as having never been clouded by any thoughts of that kind. He seems to have walked in the clear light of conviction and choice about the matter, all his life long. There was nothing that so thrilled him with joy to the end

of his days, as to know that he was a servant of the Lord Jesus Christ, commissioned to preach the everlasting Gospel. As for his support, he seemed not to know what it was to be anxious about that. He was sure that would be provided by Him whose command he was following. Obedience to Christ's words, "Follow thou me. What is that to thee?" express his habit of mind concerning the surrender of himself to God. He loved his work with peculiar fervor which every one felt who came into contact with him though only for a short time. It was not an ostentatious show of zeal, but a natural self-evidencing devotion that burned in his heart.

He was the son of a poor carpenter who could not render him any aid in securing a higher education. Indeed the father begrudged the loss of the son's labor as aid to the support of the family. You will get an insight into the financial struggles of the young man Brown when you hear that he got to New Haven with a few cents in his pocket at the time when he applied for entrance into the Freshman class of Yale College. How he expected to pay his way through college is not clear, but what he did was almost litterally to sing his way through college. He was an excellent musician and a fine singer, as were also his two sisters. By teaching singing and occupying a place in the village choir, besides performing other minor services, he completed his studies at Yale with quite a sum of money in his possession. Even till he was an old man his voice retained its musical qualities and he delighted friends with his songs in his own house and at social gatherings.

His eye-sight was very poor from earliest child-

hood. For a long time, it was not known what was the trouble with his eyes. Oculists did not abound as to-day. But one day just in play, he put on his grandfather's spectacles. When, lo! he who had never before seen anything distinctly, now saw plainly and without painful effort. He danced with delight at the discovery he had made. From that time onward he wore glasses and could read and study almost as unhindered as other children. I think he wore lenses of the same magnifying power, from first to last. His eyes were like those of an old man from his birth. But he made good use of those eyes! His many pupils in three lands will bear me out in saying that it was a delight to receive their approval, but not a pleasant experience to incur their reproof!

The boy S. R. Brown grew up in New England, and fitted for college at the Monson, Mass. academy. Before graduation from college he had accepted a position as teacher in the "Institute for Deaf and Dumb," in New York city. Here he spent three years, while he sent most of his earnings home to his parents. I think I am not mistaken in saying, that soon after graduation he was at home wearing the carpenter's garb and working for a time beside his father. With his own hands he painted his father's house and by other work earned the gratitude of his parents. His work in the deaf and dumb institute gave him a life and animation in his preaching possessed by few men. His face and gestures might almost be called the preaching of his sermon in the sign language, which effectually added to his spoken words. His heart was tender and sympathetic with either the joy or

sadness of others. When a boy in my teens, he begged my father to spare him one of his sons for a year or two. I was sent to live in the Brown family and to pay for my board by doing the chores. At that time he was back in the pulpit which he had resigned in order to go to Japan. The work of that pastorate took him along both sides of Owasco Lake in New York. He preached Sabbath mornings in the church built through his influence years before and designed by himself. In the afternoons he went to meetings in the school houses, miles away. In those meetings more distinctly than at those in the church, memory recalls his impassioned appeals to his audiences, as with tears streaming down his cheeks he exhorted or warned the people. At times, the sadness of the judgment day was seen in his face, and again the reflection of the glory of being with the Lord!

Dr. Brown's life was what can in truth he called that of a missionary – that was the spirit which dominated his life, but as a foreign missionary it was divided between China and Japan. When he was a young man, Japan was not thought of as a possible field, for it was in isolation from the world. One or two ports were open in China, and to that land he turned as the place where God would use him in the work which he was to do.

But when he asked for appointment, the American Board could not send him. With other applicants he had to wait till better times financially should come to the Board. While waiting for that time, an unexpected way was opened for going to China.

A few noble minded Christian merchants organized "The Morrison Education Society" in honor of Dr.

Morrison who died in 1834. This society's representatives in the U. S. offered the position of teacher under that Society, to Mr. Brown. In that way he got to his desired work. In Macao and later in Hong Kong, he gave himself with indefatigable zeal to the study of the Chinese language along with the teaching of the Chinese pupils committed to his care. He must have acquired a good working knowledge of the language both written and spoken. He told the writer of this sketch that he had not been obliged to learn the Chinese characters after coming to Japan, his study of them in China made that unnecessary. And his biographer says that he was a notable preacher in the Chinese language, having a full house at least once a month to hear him. This, in addition to his other varied activities. But in the work for which the Morrison Society was founded he was preeminently successful. Teaching was an art with him, and an occupation of which he was very fond. He was philosophic and wise in his methods. Young people were always attracted to him. In teaching them he saw the greatest possibilities of accomplishing good for them and their country. He never neglected the cultivation of the heart along with that of the intellect. Let me give you a portrait of this pioneer, Christian educator, drawn by one of his pupils. "In the school room Dr. Brown was at home. He had tact, patience and kindly ways. He easily won the confidence of his scholars, by coming down to their level. There was none of that austerity and sham loftiness which characterize some school teachers, who wish to hide their shallowness and lack of pedagogic resources by keeping their pupils off at a distance. He was one

of those rare men who mold and shape the men whom they have trained. The men who had the privilege of the Doctor's training have all turned out well, and have done work in after life creditable to any teacher. The Doctor took pride in them; while they cherish his memory and that of Mrs. Brown, the companion of his toil, with the deepest gratitude and reverence."

The school of the Morrison Society was moving forward to a position of success and an assured future, when the health of Mrs. Brown failed so utterly that nothing but a return to the U. S. was deemed possible. After eight years of life in China, following what seemed to him a most mysterious Providence, Mr. Brown was obliged to abandon his plans and relinguish his long cherished hope.

Like other men, when called to form entirely new plans for life, he was led into a field which seemed circumscribed. But in his case it proved to be a wider one than most men are able to fill. Time permits me to speak of only one field he occupied while at home after his return from China. He had a prosperous private school at the foot of Owasco Lake, near the church of which he was the pastor. The salary promised him "to relieve him of worldly cares and anxieties" was so scant, that his service to that church was almost a gift. His reference to his salary was always a good natured regret that the people could soothe their consciences with the thought that they were doing their duty in that matter! And yet he erred in being too lenient with them. He received whatever they gave without any effort to stir them up to better things. In accord with what I have already said on the subject was the remark by one

who knew him well: "He never had anxious thoughts about these things and yet he never was without a more generous supply of them than the majority of ministers." And it all came to him as the more or less direct result of his own varied labors. For it has also been truly said of this missionary, that he could do anything that he attempted.

He was architect for the first English Church building in Yokohama. He was among the first to use the camera in Japan, and taught its use to the first Japanese photographer. On his first return from Japan, he had many interesting photographs of the people and scenery to show and thus inform people about this country. For that purpose those photographs were very useful at home, and I well remember the service some of them rendered in my father's house long after Dr. Brown had resumed his labors in Japan.

He was diligent in laying hold upon a knowledge of the language and the modes of thought of the people, as well as in making acquaintances among them.

His house was ever, a retreat for Europeans, and his voice was heard from the first, preaching to them on the Sabbath. The sailors of all nations found in him a friend and he tried to care for their spiritual good.

Both in China and Japan he was a constant contributor to publications best adapted to give information to the world at large about these unknown Oriental lands.

He began in very early days in Japan to teach English to young men. But I don't know that he began this earlier than his associates did. The first pupils that came to him were for the most part Gov-

ernment officers. He was far-sighted enough to see the value which such teaching would be to young men whose country was just opening to friendly and commercial relations with the world. His experience in China gave him a knowledge on this subject beyond that which is common. For some of his "Chinese boys" were then on the way to become famous men through their English education. And through the moral training which they received along with the acquirement of English they were great benefactors to their own people. To mention one and perhaps the greatest man among them: in 1872, I met in Hartford, Conn., the Hon. Yung Wing, who was at that time a high official, connected with the educational Commission from China. In fact that whole plan of inducing the Chinese Government to send young men to America's best institutions for training was born in Yung Wing's mind. Its accomplishment was due to his persistent representations to his Government on the subject, in the face of many and grave difficulties. Through false reports made against the originator of the plan, it was abandoned before time enough had been given to realize its good results. Yung Wing, I think, still lives a highly respected and eminent Christian gentleman, laboring in his quiet unseen ways for the uplifting of his native land. He it was who as secretary of the Chinese Legation at Washington entertained Dr. and Mrs. Brown after they had finally returned from Japan, in 1879. Here it was that the pictures of Dr. and Mrs. Brown were taken which are most frequently seen now. They are excellent likenesses.

The results of Dr. Brown's teaching young men

in Japan are greater by far than those known in China. The times were more propitious than when he was in China. He spent a greater number of years in Japan than in China, and he was leaving his impress upon a nation more willing to receive, and make use of knowledge acquired. In the memorial number of the "Japan Evangelist" already referred to, a writer stated that "Dr. Brown's pupils are prominent as heads of colleges, professors, editors and pastors in the building of the Christian Japan that is coming and is now. The list of other pupils active in law, medicine, journalism, diplomacy and business is too large to transcribe here."

Dr. Brown was one of the founders of the Asiatic Society of Japan and its first vice president. He often presided at its meetings and is said "to have added", at times, "much to the papers read, out of a fund of information that he had on the subjects discussed."

How could one man accomplish all that this missionary did? These things are evidence of another characteristic and power of the man. He had the faculty of turning off work rapidly as well as unwearying persistence in what he undertook. As frequently as otherwise, he forgot meal time and bed time in his absorption in his work.

The translation of the scriptures appealed to him as it did to others of the first comers to Japan, as an undertaking to be begun as soon as possible. He was giving time and effort to the accomplishment of this great purpose before he had been on the field very long. At just what date his first attempts in this direction were made is not certain. But his

house was burned down in 1867. It has been described as a pathetic scene to witness that gray haired missionary venturing through the smoke of the burning building, in his efforts to save his precious manuscripts which contained the results of his labors in scripture translation. Most or all of them were destroyed. All the other loss and inconvenience caused by that fire were of little consequence compared with the loss of his manuscripts. When the Permanent Committee on Translation was organized, he became chairman and continued to be as long as he remained in Japan. When the permanent Committee on Translation was founded he became chairman and so continued.

It is as a gray haired man that he has just been spoken of. He was gray haired when he came to Japan, being in the fiftieth year of his age. Few men think themselves equal to the undertaking of opening a new mission and attempting the study of a new language, at the age when he did. And yet so varied and assiduous were his labors, while he always seemed a veritable man of God, that his life between fifty and seventy years, was a marvel of usefulness, and an example worthy of emulation by all younger men.

The life of a foreign missionary when Dr. Brown entered it, was not what it is now in most cases. Modern missions had not been given a very thorough trial. The present great missionary fields, with little exception, were sealed against the introduction of Christianity. The progress of the praying people in these days were freighted with petitions to God for the opening of the nations which had long been in ignorance of Him, the True God. All the power of

Government combined with the superstition and hostility of heathenism, to prevent those from entering, who would teach anything subversive of these national religions. International Law was not sufficiently developed to furnish protection to the lives of foregin missionaries. Communication between the nations was very irregular and infrequent. To be a foreign missionary meant isolation from all that was dearest, it meant danger, suffering and often martyrdom. Nothing was too terrible to be anticipated as possible. But Dr. Brown could say with Paul: "I hold not my life of any account as dear unto myself so that I may accomplish my course and the ministry which I received from the Lord Jesus, to testify the Gospel of the grace of God," unto men whose hearts were darkened by false religions.

Through all his life of unremitting service and of varied experiences, Dr. Brown was known for his happy disposition and cheerfulness of temperament. He was a charming companion for young or old. He knew how to associate with the high or lowly. Any true person found in him a friend. He was generous with his aid to the needy. In the communities where he lived in the Orient, he was esteemed as one of the best and greatest of their residents. He was recognized as one who honored and graced society by his life and nobility of character. Surely it is not a little thing for one to be able as a Christian to gain and hold such a position and thereby to exert an influence for good.

Honors, some that were very great, were bestowed upon him. Others would have been his, had he not through his modesty of spirit, avoided them. He was

associated at different times with men of recognized eminence. They were ever ready to acknowledge the worth of Dr. Brown and give him a place among themselves.

His life in cosmopolitan communities may have had something to do with it, but whether that is true or not, Dr. Brown was known for his catholic spirit and love. He was a bold mover in the direction of the union of Protestant denominations in Japan. He did what he could to secure that desirable result. Had it not been for his outspoken belief in it, and his efforts to secure one church of Christ in Japan, free from denominational divisions, we would probably not now know the degree of union which exists here. We might not be sitting together in this council of missionaries. On the other hand, had these views prevailed, "The Church of Christ in Japan" would include all Protestants of the Empire. Since I have had an opinion on the subject it has always seemed such a pity that that could not have been the idea with which to begin our work, instead of as now, the ideal toward which to work, with the hope that it may some time be attained!

It was one of the privileges of my life that I was permitted to know this servant of the Master, and to feel that I had his love. I have told you how one of my earliest recollections was connected with his first starting to Japan, and of my spending a short time in his family when he was at home on furlough. Of course his letters came to our house more or less frequently during my boyhood and youth. Probably I shall never know how much influence these things had in turning me to Japan. During the nearly thirty-

two years of our residence in Japan, the memory of Dr. Brown has been with me as an inspiration and also an evidence of how really great a man he was. He was a rare, good man. All who knew him will join me in this verdict. He was a man of piety: a man of lofty hope concerning the triumph of God's cause: a man loyal to the Master: a man who tried to live so that Christ would be glorified in his life, and who succeeded better than the majority of us do.

* Because of increasing infirmity, at the age of sixty-nine years and two months, this servant of Christ regretfully turned his face once more toward the United States. He well understood that it was his farewell to the land and people for whom he would gladly have given another life, had it been possible for him. As fervid in spirit and young at heart as always, he reluctantly acknowledged that his labors for Japan were ended, and sought the loved ones at home. It was their cherished hope that he might long abide with them to be a benediction to them. He had been in the home land for a few months renewing friendships and visiting places that were dear to him. During this time there was a longing to see one place above all others: the home of his youth, the place where his parents and oldest sister were buried. That was the most sacred spot on earth to him. Drawn irresistibly there, he went to the town of Monson, Mass. in the month of June, 1880. Two days before he had celebrated his seventieth birthday. He spent one day in visiting as many friends as he could, and going, of course, to the cemetery. That night after retiring,

* These closing sentences were added at the suggestion of a friend, after reading the paper at Karuizawa. — T. C. W.

so easily and suddenly did he make the exchange of earth for heaven, that Mrs. Brown was aware of nothing more than that her husband had breathed heavily once or twice.

A devoted niece said of this good man's departure, that it, more beautifully than any other death she had even known, illustrated the words; "He giveth his beloved sleep." It seemed true of him that he had passed away as gently as the sun sinks at the close of day. And it is certain that the day which his death ended was one of unusual loneliness and charm.

J. C. Hepburn, M. D., LL. D.

By Rev. D. Thompson, D. D.

In what I am about to narrate regarding the life, work, and character of Dr. James Curtis Hepburn, I intend to confine myself mainly to the period between the year 1863 and the first years of Meiji, 1867–9. I do this because it was during this time that I was most intimately associated with him. However, it will be necessary first to glance at his life from his birth till the beginning of the period above indicated, and also at what he was enabled to do in Japan after the dawn of the Meiji era till his departure from this country in 1892.

Dr. Hepburn was born March 13th, 1815, at Milton, Pa. His parents were educated people, honored and trusted by those who knew them; his father being a lawyer of eminence and a judge, and his mother a leading woman, esteemed by her associates for her early earnest missionary zeal. When not yet eighteen years of age, James Curtis graduated at Princeton in 1832, and afterwards took a course in medicine, graduating from the University of Pennsylvania in 1836.

In 1840 he married Miss Clara M. Leete, a young woman who traced her lineage back to Governor Leete of Connecticut, who, it is related, gave countenance and shelter to the escaped regicides in the days of Charles II. Shortly before the marriage of Dr. and Mrs.

Hepburn, the Presbyterian Board of Foreign Missions, in 1839, resolved to establish a mission in Siam. It was formed at first with reference to the Chinese rather than to the Siamese. The door into China was not opened, and Missionary Societies adopted the policy of supporting stations among the large numbers of Chinese emigrants who were found in the neighboring countries, and in cities like Batavia, Bangkok, and Singapore. In July, 1841, Dr. and Mrs. Hepburn reached Singapore under appointment of the Presbyterian Board to the mission in Siam, but with permission to join a Chinese mission later. After some two years spent under the Equator, in Oct. 1843, they removed from Singapore to Kulangsu, a small island near the city of Amoy, after spending a few months at Macao. During the three years which they spent in China, or on the coasts, their associates were such well known names as Dr. McCartee, David Abeel of the Reformed church, the two brothers Stronach of the London Mssion, young Walter Lourie who lost his life by falling into the hands of Chinese pirates, and others well worthy of honorable mention. In 1846, on account of Mrs. Hepburn's health, they were obliged to return to New York, where, as in China, they met the family trials of sickness and loss of children. For fourteen years, till 1858, Dr. Hepburn practiced medicine successfully in N. Y. city. At the end of that time the Presbyterian Board again selected him and his companion to begin contemplated mission work in Japan, then recently opened to the commerce of the world. Being thus called, they promptly responded, leaving New York April 25th, 1859, and, after a voyage of 145 days, they arrived and landed at Kanagawa, Oct. 18th, the same year. In this newly

opened port they secured as a residence a temple called Jobutsuji. This they repaired and made their home for some two or more years. Here Dr. Hepburn began his medical missionary work, opening a kind of dispensary which was soon closed by order of the government of the day. At last the foreign residents of Kanagawa were directed by the rulers to remove across the bay to Yokohama, Here, when the town lots were laid off and distributed, Dr. Hepburn secured lot No.39. On this, he erected for himself a substantial frame house, a half bungalow which still stands amid the changes that have since taken place. In this house, when new, the writer first met Dr. and Mrs. Hepburn in May, 1863, now more than forty-six years ago. Both were then in what seemed the prime of life, something under fifty years of age, and both remarkably vigorous and active, erect without effort, and always neatly dressed and of easy manners. The interior of their new house also was and continued to be correspondingly neat and neatly adorned. In this their home, different from what I had expected, I lived with them as their guest for about a year, my first year in Japan, and had every opportunity for observing their habitual daily life. I continued quite intimate with them in Yokohama for several years after finding my own home elsewhere.

From this point I will endeavor to describe, as well as I can, the daily life of Dr. Hepburn for the next six or seven years, till Meiji was ushered in. If this is done, it will suffice to show how he continued his effective work till his work in Japan was finished. To do this, however, I should describe him in his environment, amid his friends and associates of that day. Yokohama

was then beginning to grow; in fact had already grown to be a busy place, almost a city, but not like the compact and populous city of to-day. By request of the residents, Dr. Hepburn laid out the streets of the foreign town, but before this was done, many building lots had been purchased and houses erected by the citizens. These had to be taken into consideration, and all this accounts for the streets being in places narrow, crooked and irregular. At that time, there were no foreign, or even Japanese houses on the Bluff. The Japanese parts of the city, Honcho-dori, Benten-dori, and the rest, were as they are to-day, but not so wealthy-looking and substantial. There was no park, but only what was called "the swamp" in its place. Many of the houses first built in the foreign part of the city were bungalows which have since given place, many of them, to large and tall buildings two, three, or more stories high, and standing close together. Around the whole was the canal, and at convenient spots where roads came in, or at bridges, were guard houses where the Tokugawa samurai dressed in correct hakama and armed with two swords sat in a row and watched travelers coming in or going out. Such, in brief outline, was old Yokohama, continuously seen with a regiment of English soldiers encamped on the Bluff, and often visited by companies and sailors from men-of-war in the harbor. Life in this growing, busy place was then something peculiar and sometimes very interesting and exciting, mainly on account of the frequent assassinations, and consequent large funerals, and occasional executions when the criminal happened to be apprehended. In a time of revolution, amid such stirring scenes, Dr. Hepburn quietly and uninterruptedly prosecuted his work.

His home, however, was not without a peculiar interest of its own. He and Mrs. Hepburn were always on intimate terms with their associates among the early missionaries, and also with many of the leading officials and business men of Yokohama. Besides, in those days before the age of the railroads, great hotels, and tourists, many visitors from China and elsewhere periodically arrived in Japan in pursuit of health or business. Many of these were welcomed by Dr. and Mrs. Hepburn as their guests in their hospitable home. Among others I may mention Admiral Bell who was drowned at Osaka while doing what he deemed his duty. Also Capt. Watson of the U. S. Navy, General Burgavine, companion of Gen. Ward in China, Mrs. Boone, wife of Bishop Boone of Shanghai, and others, all interesting characters. In such surroundings and with such companionship, Dr. Hepburn, day after day, steadily carried on his work. At the side of his house on the same lot, No. 39, he built a good-sized dispensary. The front room had seats for a hundred or more patients. The back room contained shelves for medicine and Chinese Bibles and tracts, with a table and a few chairs for the patients, who were called in one by one from the front room for treatment. At first, for a long time, the front room was quite full of waiting patients from an early hour every morning, except Sunday. On week-days, after an early breakfast and prayers at home, Dr. Hepburn would go out and take his place in the back room, and one of his many medical students, or assistants, would promptly introduce the patients into this back or operating room, where they were promptly treated and sent away with a bottle of medicine, perhaps, and sometimes with a tract or portion of Scripture.

So great was the number from far and near seeking medical aid that only three or four minutes' attention to the gravest cases could be given in order to finish in the forenoon. This practice of medicine for the benefit of the Japanese he continued some fifteen years, but discontinued it when he found the supply of qualified Japanese physicians adequate to meet the demand. He never practiced much among foreigners, being considerate of the claims of foreign practitioners.

In the afternoon, he resumed his work of compiling the first considerable Japanese dictionary, or the work of translating some portion of Scripture. This he prosecuted diligently with a teacher till 4 or 5 P. M. when he would take a walk over the Bluff, or enjoy the society of his friends at home the rest of the day. Such was his daily life at the time of which we speak, and such, doubtless, it continued till his work in Japan was finished. His quiet energy, his temperate life, his regularity, promptness, punctuality, and industry enabled him to accomplish the many tasks which he undertock and carried through. Beside his medical work, he had his share in the translation of the Old and New Testaments from first to last, as also a large share in preparing Romanized versions of portions of the New Testament, and of the whole Bible. He brought out four editions of his dictionary of the Japanese language, and saw his Bible Dictionary through the press, besides publishing a number of useful tracts and leaflets. In his daily life he was, as has been described above. His religious life was equally even and uninterrupted. He was active in establishing English religious services in Yokohama, maintained for several years before the present Union church was organized as it now is. On

the Sabbath, he was regular in his attendance at church. In his home, family worship was faithfully observed. The weekly prayer meeting and the monthly concert were often held at his house, and were frequently led by him, reverently, devoutly, and to the edification of those present. He spoke with conviction rather than with emphasis. At no time did he show great emotion, or violence of manner, but was uniformly grave, calm, serene, mild, and deeply earnest in the performance of all his religious duties. Beside his professional labors, and the many fruits of his literary activity, there are other enduring monuments to show his lifelong devotion to his work. There are at the Meiji Gakuin in Tokyo one dwelling house and Hepburn Hall to show how unselfishly the proceeds of his publications were expended. There is also Shiloh church in Yokohama, one of the most expensive and substantial church edifices in Japan, the ground for which was secured, and the building erected through his instrumentality. All these promise to stand long as monuments of his generosity and activity, but his character as a man peculiarly fitted for his work, promises to outlast them all and shine brighter and brighter in the history to be written in days to come.

Were I asked to designate his most striking characteristic as a Christian, I would not hesitate to mention his meek, unfaltering faith. This enabled him to do what he did, and live as he did, and as he now lives in his 95th year, patiently and hopefully waiting, as he often says, for the Saviour to come and call him to his home on high. His Jubilee exhortation to the church in Japan was lately cabled across the ocean in the well known words of the apostle: "Therefore my beloved

brethren, be ye steadfast, unmovable, always abounding in the work of the Lord, forasmuch as ye know that your labor is not in vain in the Lord." May the whole church heed this exhortation.

Reminiscences

By Rev. Jas. H. Ballagh, D. D.

In being assigned "Reminiscences" as the subject for a paper or address for the Karuizawa Council of Missions at its annual meeting, 1909, I regretted it had not been more distinctively specific, as it would have helped fix attention upon some given subject. As it was so general, I was left to make it almost entirely personal, and possibly, that was its design. I had in mind the Apostle to the Gentiles and his views of his calling, and felt they expressed my own views or hopes of my calling to be a missionary, and my estimate of the honor and privilege of that work, and my unfitness for its vast reponsibilities.

Two texts express these views: first, 1 Tim. i: 12, "I thank Him that enabled me, even Christ Jesus our Lord, for that he counted me faithful, appointing me to his service," and second, Eph. iii: 8, "Unto me, who am less than the least of all saints, was this grace given, to preach unto the Gentiles the unsearchable riches of Christ." Here we have the Apostle's views of the greatness of the trust committed to him, and of his own utter unfitness for its accomplishment, as well as of the exalted source of his commission. All these considerations I have felt applicable in a measure to my own call to be a missionary, and I would fain be the almoner of the inexhaustible riches of the Gospel

of Christ to the people of the Empire of Japan.

My conversion, though far from approaching that of the great Apostle to the Gentiles, was remarkable for its solitariness or independence of human agency. It occurred on a Sabbath afternoon while walking on a railroad track in the summer of 1849. I had been led by the death of my employer's little three year old daughter, Libby Coe Ten Eyck, to see the unsatisfactoriness of life, and though only seventeen years of age, most sincerely longed to die. I did not know my unpreparedness for death, for having been brought up in a strict Presbyterian family, and without any outward vices or violations of the moral law, that I knew of, I did not know the necessity of the new birth for entrance into the Kingdom of Heaven. At this time, I read in the columns of the Christian Intelligencer, an account of a whole family converted by reading a little book called, "Baxter's Call to the Unconverted." I queried what conversion could be. It was a term I had not heard nor had it been borne in upon my mind. At that very time on a visit to my home, six or eight miles distant, I found the little book on my sister Margaret's table, and her name written therein as presented by a friend of the family, once a servant in my grand-father's family, then an earnest Christian carman in New York City, Robin Armstrong by name. I immediately took the book. On opening it, I found an exposition of the eleventh verse of the thirty-third chapter of Ezekiel: "Say unto them, As I live, saith the Lord God, I have no pleasure in the death of the wicked; but that the wicked turn from his way and live: turn ye, turn ye from your evil ways; for why will ye die, O House of Israel?" This text, itself

so opposite to my state of mind and desire to die, came as the unmistakable voice of God to me personally. I no sooner read the preface and introduction than God in great mercy opened my eyes to see my lost and unregenerate state, and that had my wish been granted I had already been "lifting up my eyes in torment." A sin committed several years before and entirely forgotten, coming distinctly to mind, served as a sheriff to bring me to justice, so that, like Paul, I could say, "If the Law had not said 'Thou shalt not covet,' I had not known sin!" Under the powerful conviction of the Spirit I knew not which way to turn for help or relief. Being naturally very reticent of my convictions and feelings there was no one to whom I could go, in whom I could confide. At this time, a text I had heard and stored in memory under peculiar circumstances, sounded as a voice from Heaven in my soul saying, "Come unto me all ye that labor and are heavy laden, and I will give you rest." This voice as though audible came with such force that I asked, "Is this in the Bible?" Recollection answered, "Matthew xi : 28." I turned to the Gospel, and found it there to my joy, and thereafter regarded it as the Lord Jesus' message directly to my soul. But the adversary of souls was busy To come to Jesus was to pray to Him, to call upon Him in prayer. Was this right, or was it lawful to pray to any other than to God only? Was Jesus truly the son of God and was it right to pray to Jesus? This was the greatest and only theological difficulty I have ever had. How was I to settle it? Pressed down by the heavy load of sin unforgiven, invited by Christ to come to Him – what was I to do? I first thought of all the witness the

Father had given concerning His Son, at His birth, His baptism, in His ministry, and in His raising Him up from the dead and investing Him with power at His own right hand in heaven. All this led me to the conclusion that if Christ were not God, and it was wrong to worship Him, I was not to blame for so doing. God Himself would be to blame; because He had given such proofs of Christ's divinity I was in duty bound to believe therein, and would do so; so I began earnestly to call on the name of the Lord Jesus. But the promised rest was not given in a day, a week, or a month. Three months went by, reading and praying, as I read "the little book" through once and again, especially the resolutions at its close – till the Sunday afternoon before mentioned. Reading and praying as I walked on the railroad track, I came to a trestle bridge, thirty or forty feet high over which I had to pass stepping from tie to tie, and the question arose in my mind "Where would I be if I fell into the ravine and stream below?" The answer came with such convincing power that all the world could not have convinced me to the contrary – "I would be in hell!" I was so excited that I actually made a misstep before reaching the bridge and stumbling, my cap rolled down the bank. I hastily secured my cap and heartily thanked God I myself had not fallen down. I very cautiously crossed the bridge and again thanked the Lord. The weight of sin lay so heavily on me, and the promised deliverance had been so long delayed, I felt it was, to use a favorite expression of Baxter's, "Now or never," and I came to the deliberate conclusion that I would pray once more, and if Christ did not save me now, there was no help for me, I would

be lost forever. There was but a short distance to go to reach a cut crossed by a bridge on the main wagon road, and which I would take, leaving the railroad track at this point, to go on my way to Sufferns. Beneath this bridge, therefore, with no eye upon me but that of my Maker, I began to pray, how or what I do not know, but I had not more than begun till I felt the load of sin fall from my shoulders, and my soul filled with joy, and I could proceed no further, but cried out "I have found Him! I have found Him! I have found Him!" – and so ended my prayer. After a few moments passed I thought, "Why, this is strange. I wonder if it be not an infatuation, or a mistake; I had better pray again". I did, a long prayer, remembering my brothers and sisters, eight, by name; my cousins, and other kindred, the first time I had ever consciously done so, aud having concluded, said to myself "Why, this is strange, I never said anything about myself". And then the thought occurred to me "Oh, that is right, I am converted; I am now relieved of my sins and have liberty to help others to be forgiven and saved."

My call to the missionary work was very similar, and occurred not long after. I am happy in being able to fix the date of this event, in reading an account of "Dr. John Scudder and his Descendants," in the June number of the Missionary Review of 1909. In this account of seven sons who all became missionaries to India, is the date given of the death of his son, Samuel, before completing his studies, while preparing also for mission work. This occured, Nov. 16th, 1846. It was in reading the obituary notice of the death of Samuel Scudder, reported in the Christ-

ian Intelligencer, that I received my first personal call to be a missionary. The obituary notice written, as I somehow think, by Dr. Mancius H. Hutton, father of the present Dr. Mancius H. Hutton, President of the Board of Missions of the Reformed Church in America, asked in its conclusion: "Upon whom shall his mantle fall?" And my heart replied, with hardly a thought of all that it implied, "Upon me, Lord, upon me." I was interested in missions from my earliest years, reading in the Christian Instructor accounts of Dr. Gutzlaff's mission to China, and I assume both myself and my younger brother, John, were devoted to this cause by our mother from our birth, though never so informed by her. I infer this from a remark she once made of a Hindoo preacher referring to an early missionary named Jane Hotchkiss, a girl friend of my mother's, and who urged her to accompany her to India. To whom Mother replied, "No, I will marry, and raise up missionaries." Her prophecy became true to the extent that four of her children were here in Japan at one time, and all together have exceeded a century of foreign mission work. Also, I had been a shareholder in the first Morning Star missionary ship, and a monthly contributor of one tenth of my salary to the American Board at Boston. The realization of my call to be the successor of Samuel Scudder did not take place till a year or two later at Haverstraw, N. Y. Here in attendance on the ministry of that devoted man of God, Rev. Amasa S. Freeman, I was in the habit of buying edifying tracts and books of the American Tract Society, such as Leigh Richmond's "Annals of the Poor," and my attention was arrested by a tract by Rev. John Scudder, M. D., of Madras, India, entitled

"The Harvest Perishing for Want of Laborers." It occurred to me this must be the father of Samuel Scudder, so I bought the tract and read it. So impressed was I with my personal responsibility that all my plans for a successful business man had to be given up; although I had a fine offer from my first and beloved employer, to be taken into partnership with him. I felt however that I must refuse this and dedicate myself to God's service as a missionary. This I formally did one night in a shed where dry goods boxes were stored, and wrote down my resolution in the cover of Dr. Scudder's book. I did not know I would have to have a college education, and become a minister of the gospel. All I thought of was, the perishing heathen and my duty to try and save them. The how, I hardly knew. The first step in fulfilling this resolution was in joining the Central Presbyterian Church in Haverstraw under Dr. Freeman, and some months later transferring my membership to the Reformed Church at Scraalenburg, under Rev. Cornelius Blauvelt. My preparation for entering college was under Dr. W. V. V. Mabon, of New Durham, N. J. My entrance into Rutgers College was in 1853, from which I graduated in 1857, and from New Brunswick Seminary in 1860. The same year I was ordained to the ministry and appointed to the Amoy Mission with my beloved classmate, Leonard W. Kipp. But by a signal and most marked providence, my appointment was changed from China to Japan, during a year of enforced delay in the homeland after appointment to China. It came about very naturally, but I believe, very providentially. During my college course, long before any missionaries had been sent to

Japan, I read a little booklet by Talbot M. Watts, M. D., giving a history of the Japanese people. Finishing this book, I said "Wouldn't it be nice if that country opened up about the time I got through my studies!" So far, the desire found expression, and lo! a few years later, to my astonishment a call for missionaries to Japan came from our Board of Missions in N. Y. The call from the Board was owing to requests which had come to them from three men in the Orient, members of as many denominations, who united in urging the Dutch Church to found a mission in Japan because of the previous record of Dutch representatives at Nagasaki. The church as a whole was moved by this call, and especially were several members of my class in the Seminary deeply stirred. We were ready to volunteer, but being still only in the middle year of our course, we waited; and meantime the call was most satisfactorily met by the appointment of Messrs. Brown, Verbeck and Simmons. On Dr. Brown's visiting the Seminary prior to embarking, and addressing the students, I frankly informed him that we had been ready to offer. He replied, "You need not feel disappointed. I am going to provide a place for you." This assurance so kindly meant gave little hope of any fulfilment, as the Mission was now fully equipped; however, singularly enough, it eventually came true. The longer the delay the more the desire became on my part. Two factors stood in the way of my going to China. One was my lack of a musical ear to distinguish the tones in the Chinese language; the second was my inability to endure a hot climate. Neither of these difficulties stood in the way of going to Japan. But these, however,

were not the determining factors. My heart's desire was for Japan, though why, I could not tell, though my warmest personal friends were in China. 'Twas not till New Year's Day, 1861, that a decision was reached. I had been visiting Dr. Freeman of Haverstraw, always deeply interested in my welfare, and on his advice to hasten to the mission field, I visited our Secretary in New York and told him that if I was going as a missionary, I must be sent that year. The Secretary assured me that my request would be complied with. Going thence to consult with Bro. Kipp on the prospects of embarkation, I failed to reach home that night. The next day, as I returned home, I met the Secretary at the ferry, and he hailed me, saying that he had news for me. Asking what it might be, he replied, "You are transferred to Japan!" I was almost stunned; but managed to say, "I hope my anxiety has not had anything to do with this." He replied "No, not at all," as he hastened to catch his train. Pursuing my way home in deep meditation, I could hardly realize the fact; and when I told my mother, she expressed regret, because my friends were all in China and none in Japan. I replied, "Why mother, I am not going on a mission for the sake of friends; if that were the object, I would never leave home. I want to go where I can do something." This answer seemed to silence my mother's objections. And hastening to my room and opening my Bible, my eye lighted upon Acts 26:17-18, "Delivering thee from the people and the Gentiles, unto whom now I send thee, to open their eyes and to turn them from darkness to light, and from the power of Satan unto God, that they may receive forgiveness of sins, and

inheritance among them that are sanctified by faith that is in me." How could I doubt that He who had appeared unto the persecuting Saul, and passed over His own commission (Isa. 43 : 6, 7) to him, had now committed the same to me? I bowed my head and thankfully worshipped.

And now, nearly fifty years later, does it not seem strange to be writing this record? Oh, I am profoundly humbled! The commission has been so inadequately performed. How unworthy of the exalted privilege and the assurance of the help that He would extend to me! I have been an unfaithful steward of the unsearchable riches of Christ. Though I have preached the gospel to a few souls, I have nothing whereof to glory. And what of success has been attained, has been solely of His grace freely bestowed in answer to the prayers and hopes and expectations of God's people and ministering servants. I am humbled when I think of the high hopes entertained of me by my college and seminary professors, my ministerial brethren in the home-land and on the mission field, and by elect sister spirits, what a host! both Japanese and foreign! How unworthy and how deeply indebted am I! And wherefore, Lord, if not to show the more, thine own most gracious forbearance and love? Well may I adopt Thy faithful servant, Paul's language of imprecation upon my own soul and that of every other human being, be he high or low, "If any man love not the Lord Jesus Christ, let him be anathema, Maranatha." One very remarkable promise of an able minister with whom I lived several years, Rev. Jas. Romeyn, at our parting was, "If it be allowed departed spirits to accompany the living, I will

be your guardian angel." I have not forgotten the promise, and always visit his grave in Hackensack and render thanks to God for his faith and example. On his tombstone is an extract from his last sermon; "Thirty years have I been allowed to preach the gospel of the ever blessed God. It is enough! it is enough!"

Immediately on my transference, I made a hasty visit to Virginia to bid farewell to kindred and friends. There occurred the romantic meeting with the young Virginia maiden who a few months later became my wife. Two weeks later, June 1st, 1861, we set sail for Shanghai on the good ship "Kathay." The voyage, the arrival and subsequent events for some years, have all been narrated in my wife's little book, "Glimpses of Old Japan" This includes the baptism of the first convert, Yano Ryu, the first Protestant Christian in Japan. The organization of the first Church of Christ in Japan, March 10th, 1872, as well as the acquisition of the land and erection of the buildings thereon, have all been frequently described and require no further reference at this time.

One point alone is important to be emphasized at the present time. It is the origin and objects of the Co-operation of Missions in labors for a United Church of Christ in Japan. This statement is important for historical honesty and to show that it is no new discovery made in, nor solely confined to Japan. The co-operation of missions in building up a common church, originated, so far as my knowledge goes, in the harmonious action of two missions in the Amoy field in China. These missions were that of the Reformed Church in America and that of the English Presbyterian

Church in the same field. From the outset, the converts of these two missions, though gathered into different churches, united in a common Assembly called Taihoey, or General Synod. The missionaries were not members of the churches, but were advisory members of the presbytery, participating in all the privileges of the same.

Efforts were made by one of the mission boards to compel the missionaries to divide these churches and enroll them in the home church. The missionaries, however, declined to carry out these instructions, and tendered their resignations with their refusal. Upon this, it was wisely decided that the carrying out of these instructions should be left to the discretion of the missionaries. It was this example of co-operation in China which suggested the same for Japan. The members of the Reformed and the American Presbyterian Church Missions agreed together that there should be but one Japanese Church with presbyterial form of government; and this agreement was carried out from the beginning. After several churches and a presbytery had been organised under this plan, efforts were again made by one of the mission boards to break up this agreement and enroll a part of the Japanese church with the home church of the Board. For a time, this division was actually accomplished, but upon a larger influx of members of the mission in question this action was reconsidered, and the newly united church was called for a season The United (Itchi) Church of Christ in Japan. Other Missions, one after another, subsequently joined this union, until missions representing seven different churches in the home land were united in a co-operating Council of Missions, working together for

the upbuilding of the one Church of Christ in Japan. This union in building up a strong Japanese church has led other affiliated missions to form like unions of labor for the establishing of churches of their own faith and order ; the various missions of the Episcopal order, the Methodist, the Congregational and the Baptist, each building up in Japan, a body of their own character. As a result of this union or federation of work, it is hoped that five Protestant bodies will suffice to include all the Protestant churches in the Empire. This number, for division of labor and efficiency of service, has been aptly called " The Five Fingers of the Right Hand of God." It is not to be denied that a higher and completer unity was at first contemplated and most ardently desired by missionaries and the first members of the body of Christ in Japan ; and its realization was believed to be practicable without the surrender of any essential of faith, or even of church administration. And that hope, though delayed for the present, is sure to be realized under larger manifestations of the Holy Spirit, and the personal presence of Christ, " Who was given to be the Head over all things to the Church which is His Body, the Fulness of Him that filleth all in all." " The Lord hasten it in its time ! " (Isa. 60 : 22)

2009年3月25日印刷・発行

明治学院歴史資料館資料集【第6集】

編集代表　辻　泰一郎
発 行 者　久世　　了
発 行 所　明治学院歴史資料館
東京都港区白金台1－2－37
電話　(03) 5421－5170
印 刷 所　株式会社　白峰社
東京都豊島区東池袋5－49－6
電話　(03) 3983－2312